

しも夫婦でなくとも出来る。學校に於いて男教員と女教員とが各學級を擔任して、然も調和的に全校の教育を善美なる成績を以て仕上げるといふが如きも、必ずしも男女兩性の教員でなければならぬ必要は無い。併し斯様な事でなく、最も本質的なる男女の兩性協力が社會生活上儼然として存する。其の第一次は種族保存であり、第二次は稚兒養育であり、第三次は家庭經營である。

後天的規定は、第一に職業の問題、第二に財産の問題である。職業は男女に共通なる職業と、男女に共通ならざる職業とに大別が出来る。然るに此の共通なる職業は、或る職業には男が長じ、或る職業には女が長ずる事は勿論であるが、總體から見ると女の個人的天分は、概して結局男女の間の優劣關係に於いて女が不利益なる成績を致す。故に若し一切の職業が是丈けであり、又男と女とが單に職業の上からだけ競争角逐を試みるとするならば、是に依ては到底女の社會的地位が男と平等になる事は出来ない。然るに社會には女でなければならぬ職業がある、寧ろ是は業務と云ふ方が一層適當であらう。斯る業務を完全に實現するといふことは、全く女の獨得謂はば專賣特許に屬する事であるから、女の社會的地位の上進も

是に依て致されなければならぬのである。而して是は女の天分、殊に社會的天分の効果成績で、家が社會の單位たるといふ原則と相依り相應じて幾久しく女の地位を向上せしめ、又其の地位の安固を保障するのである。次に財産の問題は格別重要な係争問題ではない。過去未開の社會では女の財産所有を認めぬ事もあつたが、開明の社會では皆な之を認めて居る。唯だ女が妻となつた場合に於いて若干の制限を受けるが、其の制限者は夫といふ個人から、段々家といふ社會に進んで來るのである。個人本位主義では個人を制限する者は個人であるといふ中古半開の状態に居るが、世の中が進んで社會本位主義になると、個人を制限するものは社會であるといふ進んだ原則が行はれるやうになる。女が男女孰れにも通じて出来る職業にも従事する事から、女の財産所有の機會も段々擴がり、間接に女の社會的地位の上進を助ける事となる。

凡そ女の社會的地位の上進は、必ず女の特長の發揮を條件とせねばならぬ。而して是が家に於いて、若くは家に關して行はれるもので、何も兵隊に出るとか、議員になるとか、いふ事を必須とするものではないのである。然るに男の方で、昔分婉

をやらうとした事がある。昔昔其昔女が社會に優勢の地位を占めて居つた野蠻時代、即ち所謂婦女中心社會、殊に其の社會が血族團體、其の小規模なるものとして、家社會が婦女中心の家であつた場合に、どうも女の勢力が大であるので男が不平で堪らなかつた。段々考へて見ると、女は兒を産み、又其兒を育てる、それで子供が皆女の方へ歸服する、男は有つても無くてもよいやうな状態だといふので、男共が不平で堪らず、畢竟是は分娩養育に在るのだと智慧袋を絞つて斷定した。所が天理の上から、即ち天分から、如何にしても男には分娩が出来ない、そこで其の分娩の眞似をしやうといふので、クレーヴァードといひ擬娩といふ事をやり出した。今日から見れば實に嗤ふに堪へたる事柄であるが、併し今の人が、嗤ふことは勝手として、今日も一寸それに似た事が無いでもない。流石に今日の賢明なる婦人達は、男が兵隊に行くなら、我々も徴兵検査を受けなければならぬとまでは主張されないが、人見絹枝女史の夭折にも拘らず、ハヤ一年経たぬ中に其の二世三世が、故人のレコードを此の二三日前に破つてさへ居るから、事に依ると三四年中には、婦人兵役運動も出ないとも斷言は出来まい。是は將來に對する杞人の憂として、現に近時喧

ましく起つて居るのは、婦人參政權運動である。それをやるのが國家社會の全體の爲めに利益であるならば、男の分娩と違つて必ずしも不可能の事でない以上、婦人兵役可なり、婦人參政亦可なりと言ふに何も躊躇するに及ばぬ。然し社會全體の利益、國家人類の發達の爲めに結構だといふ論據が無くて、單に空漠たる概念主義から來る所の「男女同權」といふやうな、古くも古くも、人よりも猿に近い程度の進化の逆轉と當然名づけられる、下らぬ概念方程式を當嵌めた詭辯主義の運動ならば、それは最早疾うの昔に過去つた事共である。偕て國家人類の進歩、社會全體の福利といふことを考察するときは、飽くまで此の本著の表題に出て居る所の、優生優境の効果を十二分に考慮の中に加へることが必要であるのである。優生優境の効果を知らずして、社會全體の福利、又は國家人類の進歩杯は斷じて談すべきものではないのである。

第二章 學校

一 道德教育と職業教育

後天の優境方面で、家及び家庭に次いで、優生學的に考察せらるべき社會生活の機關は學校である。先づ第一に其の優生優境的職能を考察する。斯る職能の第一は、學校が道德の教育と職業の教育とに任ずる點である。

道德の教育は更に二つに分れる。一つは品性の教育で、二つは徳教の教育である。品性は社會が要求する所の行爲の規範を完全に實現し得る所の個人的資質能力であり、徳教は社會が社會の何人に向つても、漏れなく是丈けのことは是非實行して貰ひたいと要求する所の行爲の規範の社會的公準である。人々品性を備へて居つても徳教を知らなければ、道德ある人即ち有道有徳の士となることが出來ず、徳教をいくらか心得て居ても、之を實行實現するに充分適當するだけの品性を備へ

なければ所謂論語讀みの論語知らずで、勿論有道有徳の士となることは出來ない。

偕て其の品性が亦二つに分れる。一つは品格で、今一つは性格である。實行實現の能力の主なる力は性格の完備に依るが、更に完全なる品性たるが爲めには、其の實行振り實現振り、即ち其の遣り口、其の成績が善美を盡くすといふことに向つて進むことがなければならぬ。是が即ち品格の向上で、凡そ社會に生活する個人は、其の個人だけ、の立場から見れば、性格の完備で品性は略ぼ完備したと云うても實際上には多くの差支は無いが、一たび社會生活の方面から見ると、唯だ是丈けでは大に物足らぬ所があり、而して其の物足らなさを補うて完全にするのが即ち品格である。一般に上流社會の人は品格が強く要求せられ、下流階級の人には餘り要求されぬやうに見られるけれども、品格を能く吟味すると、上流下流に依て其の要求程度が異るといふが如きは、品格の中の極く有形的な部分だけに就てのことで、品格は、有形物質的の方面もあるが、矢張主なる部分は無形精神的方面に在ることを認めることが困難でない。

徳教は、日本で申せば我々日本人、殊に現代の日本人は如何なるが是れ善、如何な

るが是れ惡單に抽象的の議論ばかりではなく、否な其方は寧ろ極めて軽い一部として、大部分は寧ろ具體的なる徳目に就て完全なる心得がなければならぬ、之を與ふるものが徳教の教育である。偕て是と相並んで殊に重要なものとして、品性の教育が必要であり、具體的なる事項にぶつかつて行き、道德問題に對して判断を誤らず、能く之に處するだけの底力並に綽々たる餘裕を持つことは、業に既に重要な品性教育の成績に待つのである。其の品性教育が亦性格教育と品格教育から成立つので、只今の底力は主に性格教育に待ち、綽々たる餘裕は主に品格教育に待つと申しても宜しい。そこで之を優生優境の價值判断の方面から云ふと、家庭教育も固より此の道德教育に重要な基礎を與へるが、品性教育よりも殊に徳教教育に於いて、多くの場合、學校は家庭に較べて、其の任務をより多く負擔するのである。世の中が複雑になり、社會生活が進み來ると、中々徳教に於ける徳目の教育だけでも容易ならぬ煩瑣なることとなるので、古は仁義禮智で立つたのが更に仁義禮智信となり、ズツと年代を隔てて近く明治の御代となると、畏多くも明治天皇が侍臣に命じて撰述せしめ給へる『幼學綱要』の徳目だけでも、既に二十を數ふるに

至つて居る。固より徳目の教授だけでは相濟まず、之に對して幾多の實地應用の事例並に運用の仕振りも、或る程度までは授けなければならぬ次第で、斯様な點にまで家庭教育が立入り得るが如き家庭は、實際罕に觀る所の幸運なる家庭と申さねばならぬ、仍て主として此の教育に任ずるが學校の責務となつて來る。

優生優境と申して、單に身體だけが馬のやうに、強健になればそれで宜しいといふものではない。優生學を動物優生學と解釋するも學者の隨意ではあるが、我々が今日主たる問題として居るのは、申すまでもない人間優生學であるので、さればこそ獸類優生、鳥類優生とは云はずに、優生學を一名民族衛生學とも申す次第である。

社會の成分たる各個人にして若しも道德を備へないならば、其人は社會の一員として許さるべからざるものである。併し唯だ道德を備へて居るといふだけでは、社會に無害なる一成分であるといふだけで、まだ社會に有効なる一成分として許す譯には行かぬ。人をして社會の有効なる成分たらしむる所の必要資格は、其人が何等かの職業に従事するの能力を備へて居ることである。社會は社會とし

て成立し且つ發達し行く爲めには必ず一定の仕事させねばならぬ。此の仕事の總計をば社會運営と云ひ、社會運営の何かしら一小部分を社會成分たる各々の個人共が分擔する、此の分擔を名づけて各個各種の職業と云ふのである。そこに右の無害成分及び有効成分の批判が完全に又明白に出て來るのである。

そこで學校教育は、道德教育の外に是非とも職業教育を任務とせねばならぬことになる。昔は家庭に於いて職業教育も大部分授けられた、當時は職業は多く世襲で、親の業務を子供が継ぎ、子供の業務を孫共が継ぐ、それで八九分通りまでは家庭で職業教育が出來たものである。然るに近世職業の改良進歩、分化發達が駁々として進む所から、家庭に於いて修め得るだけでは進歩發達が殆ど期せられず、既に昔にも子を換へて教ふるといふことすらあつたやうな譯で、今日大多數の職業を一通り修得するだけでも、幾多の設備や幾多の部分々々に造詣の深い教師に就て學ぶことが必要となつて居るので、道德教育よりも更に學校に於いて成遂げられることの必要の大なるは、實に職業教育であるといふことになつた。職業のこゝを考へず、に論語にさへ喰付いて居れば、それで、人生の能事了ると云ふが如きは、

寧ろ論語の罪人である。孔子も弟子達の平凡なる連中は別として、十哲といふ連中に對して「女君子儒となれ小人儒となる無れ」と常に戒めて居られた。是は頗る意味が深く且つ廣い事であるが、其中に含まれた一つの方面として、個人的儒者になるな、社會的儒者になれ、即ち個人生活の紳士にならず、社會生活の紳士になれといふことを注意せられたのである。即ち無害の人だけに満足すれば個人生活者になり、社會に有効なる人とならねばならぬといふ抱負と實行とを持つて居る者は社會生活者であるのである。兎角道德だけありさへすればそれで足るといふが如き、低級なる程度に満足する國民から成立つと、其國は進歩發達が止つて、即ち萎微衰敗に赴くのである。

二 社交的教育

道德職業の兩面の教育は學校職能の表看板であるが、尙ほ側面の事として閑却すべからざるは學校の社交的教育である。或る國の世界的に有名なる最高學術機關の或る學者は、氣の毒にも其の人種上の關係から、一般の小學校に愛兒を送る

ことを躊躇して、特に家庭に於いて此の大學者並に其令夫人の力で、貴重なる時間を割いて愛兒を教育して居られた。是は洵に勿體ない程の慈愛と犠牲とを以ての教育で、惡るからう筈は決してないのであるが、それに對して又或る世界的に有名なる其の隣國の先輩社會指導家が、私は其の遣方には賛成し兼ねる、學校は學問の教育場所であるのみならず、生徒相互ひ、並に生徒と先生との社交的教育の場所であるのである、隣國の某教授のやうな遣方では、此の社交的教育が缺けることを甚だ缺點と思ふのであるとの説であつた、是には講者も至極同感である。例へば同じ家庭の教化を受けるにしても、獨兒は兎角我儘になり易い、是は親が掛替のない子供として甘やかすといふのみではなく、兄弟同士の切磋鍛錬の機會が獨兒には全然缺けるといふのが、寧ろ大原因であるのである。言ふまでもなく社會生活は共存の生活で、共存には我儘といふ事が禁物である。東洋殊に我日本には少しく藥が利き過ぎる程に、「あの男は圭角があり過ぎる」といふ社會的の訓言がある、現代日本人杯に取つては、「餘り圓きは轉び易い」といふ中和的訓言が必要であらうが、兎も角も社會生活は社會生活人々同士の相互的切磋鍛錬で、恰も桶の中で芋を洗

ふやうに、お互に其の塵を去り、角を或る程度まで圓くすることが必要である。人は生れてからの初めの場所が家庭であり、殊に切磋鍛錬が必然に、大規模に、且つ可なり激しく行はれる場所が即ち學校であるのである、是が學校の社交的教育の大切なる場所として存在する所以である。

社交的教育が更に積極的に一步を進めれば、慈善、同情杯の教育も亦學校に於いて行はれるのである。學校に於ける同一教場の生徒仲間でも、随分其の家庭の狀態や、俗に云ふ身分や生活の差等が様々であることが多いので、此間に於ける同情的教育はいくらでも行はれ得る。是は子供でなく大供の事であるが、米國の或る高等女學校の卒業式に、其の榮譽を明日受けやうといふ同級生の間に一人のお嬢さんが相談を申出した、我々は心の淨さを以て此の學校を卒業させて戴くといふ教育を受けたことであるから、明日は色々の着物を着ることを止めて、皆な白い、即ち芽出たい着物にしやうではありませんか。そこで平素から徳望の高い此のお嬢さんリンネルに致さうではありませんか。そこで平素から徳望の高い此のお嬢さんの申出でもあり、如何にも言ふべくして且つ行ひ易い、殊に道理のある申出である

から、同級全員一致で其事に決した。是は卒業式に生徒達が思ひ／＼に精一杯の晴衣を着飾つて出るとなると、貧しくして苦學せる同窓生に對して甚だ氣の毒な結果になるといふことを、此のお嬢さんが深厚なる優しい同情心を以て此申出をしたのであつた。而して此のお嬢さんこそは、他日米國の大統領官舎、即ちホワイト・ハウスの女主人となつた有名なる大統領ハリソン夫人其人であるといふ、一條の逸話を、數十年前に新聞紙で讀んだことがある。斯くの如きが實に學校教育の社交的教育方面に於ける同情心涵養に、如何に有効であるかの一つの例話である。尙又更に一步を進めて、慈善といふが如きも、近頃我國の感謝すべき小學教育者諸君が、常に此の機會を捉ふべく懈らざる事である。例へば大正十二年秋の帝都附近大震災に際して、全國各地の各小學校生徒が、東京の兒童達に深き思遣りの念を注いで、各若干の慰問の見舞品を提供した。思遣りが罹災地の兒童に對してのみならず、己れの教へ兒達に對しても行届いたる訓導諸氏は、明日誰彼れの差別なく一錢づゝ持つて來るやうにと申渡した。是は右、將來の大統領夫人同様の考からで、同じく慈善行爲の實地演習、實地實行をするにしても、之に伴うて甲兒は一錢

乙兒は拾錢、斯様な異路目があつては、洵に氣まづい思をさせるといふ弊を避くべく、周到なる優しい注意を拂うての事である。偕て私が更に希望する所は、其の一錢も亦親御から貰つての一錢でなく、兒童自らが自己の勞力に依て稼ぎ出した所の金であれば、一錢が一厘でも更に十倍百倍貴い事になる。是は慈善同情とは聊か方面の違ふ事であるが、隴を得て蜀を望むの考はそこに至らざるを得ぬ。是も亦亞米利加の話であるが、私が少年の時初めて英語を稽古したユニオン第四讀本の第何章かに、私の初めて所有した小刀マイ・フォレスト・シヤックナイフといふ題號の一課がある。或る子供が小刀が欲しくてたまらない、どうにかして自分の獨力で之を買はうと決心した、そこで土曜日の午後には山へ入つて栗を拾うて、之を町へ賣つて聊かづゝの貯金をした、さうして遂に小刀一挺を買つた、是は何人の助けにも依らずして、全然自己の勞力、即ち自己の事業、自己の功績としての獲物である、記念物であるといふ、其の衷心の愉快は非常であつた、私の親が其點で大層私を褒めた、此の愉快は實に生涯忘れられず、又此の愉快を生涯に續けるやうにと自分は志を立てた——といふやうな一課であつた事を記憶する。そこで大正十二年の秋、私の村の小學校へ、私の尋常

一年に通うて居つた小童を首めとし、尋常四年の其の兄に對しても、折角先生が一錢持つて來いと言はれた其の難有い思召に對して、更に此際予は汝等に一錢づゝを與へはせぬ、予の金を持つて行つただけでは、唯だ、慈善同情の取次をするに過ぎぬのである、兎角今日の世の中には、取次的慈善家が多くて困るのである、仍て只今は之を汝等に貸與へる、汝等は我が屋敷に於ける是から落ち散る所の杉の枯葉を拾ひ集めて之を母に提供し、母からそれに對する駄賃を貰つて之を貯金し、其中から予に返金するがよい、此の決心と此の實行とを以てすれば、此の一錢は全く汝等の自己の勞力から出た所の眞正の慈善同情の結晶となるので、是程の善行は容易に爲す所の機會が無いことになる、と申し聞けて、其の人並みの寄附に參與せしめたことがある。聊か話が脱線氣味ではあるが、學校に於ける社交的教化は、否でも應でも來る所の方面と、右の例で見たやうな注意深い教師諸氏の下に在る兒童は、社交同情慈善といふ事を、單に教訓として耳に之を聞くのみならず、自ら實地に當つて實行するの機會をいくらでも得られる、その尊き機關として、學校が一面には存立するのである。

三 文武合體教育

學校教育に於いて從來動もすると閑却せられたる方面は、學校は文部省の行政の下に在るといふ爲めでもあるまいが、兎角教育といふものは、文的の事で、武といふ事とは、相ひ對立するものであるやうに誤つて考へられた事である。西洋の教育史を繙いても、兎角學校はお寺の廂を借りて成立ち、我國でも文學は五山の僧侶に依てカツカツ繼續せられ、徳川時代では又寺子屋といふ名稱も出來たやうな譯で、東西共に右の誤解に陥り易い事情は確にあつた。併し教育は勿論本來そんなものではない、教育は必ず文武合體主義で行かなければならぬ。我國の山鹿素行、吉田松陰等模範的教育家の教育は、殊に此點を高調せる力強いものであつた。又舊幕府時代の藩學は、多くは方向だけは此點に於いては誤つて居なかつた。加之近年に至つて世界列國は、殊に偏文教育が社會の實地の必要に間に合はぬことを痛感し、更に武的教育が折角身體の丈夫な元氣潑瀾たる少年青年の大機關たる學校に於いても亦施されること、甚だ社會の必要に適ひ、能率を高める所以である。

ことに氣が付いて軍事教練、青年訓練、少年團等の事に意を注ぐやうになつた。是等は皆な文武合體主義で、大小少年青年等に對する實現である。軍備國防そのもの方面から見ても、一般の教育が文武合體主義に依て行はれることが極めて大切である。國防は一朝事ある時に、國社會の最高意思を貫徹する所以の最後の力である、故に軍備にして此の貫徹が出来ないやうならば何等存在の理由を有せぬ。然るに此の貫徹は無論戦うて而して勝つといふ點に在る、故に軍備は勝ち得るだけの程度までは是非とも必要であるのである、負ける位ならば初めから戦はぬ方がよい、即ち斯様の軍備は全廢の方が道理に適つて居る。故に軍備には必勝の軍備か、將た亦軍備全廢かの二途があるだけで、其の中間に他國との協商で縮小する抔といふ、即ち軍備縮小といふものは、絶対に成立し得べからざる虚偽の概念である。斯くの如く軍備は縮小すべきものでないが、縮小すべきは軍費である、同一の目的を達し得るが爲めに、精々軍費を縮小することは必要である。所で將來軍費の大縮小はどんな方面から來るであらうか、私は敢て茲に一つの研究問題を出す、敢て斷案を出すといふのではない、それは歩兵科全廢といふ

事である。歩兵科全廢といふのは戦争に歩兵が要らぬといふ意味では絶対にない、唯だ歩兵科の主なる仕事、若くは純粹なる歩兵科的の仕事、随つて其の設備を常備兵役の兵種から之を省くことが出来るやうにするが爲めに、右の學校教育に於ける文武合體主義を完全に高調し、擴張し、徹底し、實現するといふことは如何であるか、といふ問題の提出であるのである。

四 偏學校の弊と家庭協働

學校の職能に關する御話は右の程度に止めて、茲に擧ぐべきは偏學校の弊害である。偏學校の弊害といふのは、教育をすることをば學校に偏つて委ねて了ふの弊害である。如何にも學校は教育の場所で、教育は亦學校に頼ることが非常に重く且つ大である。それが動かすべからざる事實であり、又道理である所から、遂に兎角學校だけを偏重するといふことに陥り易い、是が亦頗る重大なる弊害である。獨逸例へば伯林は北緯五十二度何分といふ所で、冬は朝の九時近くまで電燈を點ける必要すら往々ある、それで伯林の市街の商人が一般に店を開けるのは大抵

九時である。然るに學校はといふと、年百年中如何に夜の明けることの遅い、日の短い冬でも、午前八時から必ず授業が始まる、小學校でも勿論其通りである。所で東京はと見ると、北緯三十五度某で、如何に冬でも七時前には立派に夜が明ける、商人は殊に六時位には皆な店を開けて居る、所が學校はと見ると午前九時までには始まらない。此の伯林と東京とで較べると、伯林で最も朝早くから活動する者は學校教員と生徒とである、東京で最も朝寢坊の者は學校教員と生徒とである、斯様な珍事實が出て來るのである。その上、伯林では午餐は一般に二時で、一日五時間の授業は午餐前一時に終る。乃ち伯林では午前と午後と夜と一日に利用し得られる時間上の三帶の中で、學校教育は午前の仕事である。東京ではどうかといふと、午前九時に始まれば仕舞はどうしても午後三時になる、教員諸氏が帳簿の整理等をせられ、引けて自宅へ戻られる時は既に晚餐である。伯林の訓導教諭は一日の三分の一を學校で費し、東京の訓導教諭は一日の三分の二を費す、斯くの如くにして、修養から家事の整理に至る萬事萬端が、非常に教員達に取つて後れる、こゝは東京に在り、綿々、餘裕のあること、は、伯林に在るといふことになる。更に之を

教育を受ける兒童生徒の方から見れば、伯林の兒童は小學校、女學校で半日稽古して、跡の半日と夜分、一晝夜の三分の二は家庭に於ける實地練習をする。家族制度を口喧ましく言ふ所の日本、東京の兒童に限つて、一日の三分の二を學校で費し、殆ど家事を家庭で實地練習する時間を與へられないといふ結果になる。

右はホンの偏學校の弊の唯だ、一班を具體的に述べたに過ぎないが、此事はよくよく注意を要求すべき十二分の重い事である。日本は勿論、西洋でも、村落の學校となると通學區域が大分廣くなるので、東京や伯林のやうな譯には行かぬ。否、其様にするには若干兒童の方面に於ける困難を伴ふが、併し是は踰ゆべからざる困難でない。例へば獨逸や奧太利等、多くの國々では、必ずしも町村の學校、統一がモットーとなつて居らぬ、通學に便利なる範圍で學校は學校で組合を拵へて居る。土臺獨逸、奧太利では日本のやうな町村合併といふことが如何にも争ふべからざる眞理であるが如く、獨斷的に妄信せられて居らぬ。日本では近時益々其弊が激しいので、町村を合併し、縣會議員が出るのに、一村を固めれば所要の投票の半分が取れる。町村長の連中も、府縣廳所在地に於ける政黨支部へ出るにしても、

府縣廳へ行つて知事と折衝するにしても、町村が大きければ大きいだけ、要求も、請願も、議論も威力が付くといふ所から、無暗に町村が大きくなり、そこで學校、統一論が出て来る。そこで兒童が大層通學に困難を感じ、そこで生徒は寢坊どころではない、朝起きをしても學校は九時に始まるといふことになる。そこで日の短い時には、日が暮れてから、兒童が自宅へ歸ることになる。兒童は朝から既に通學で疲勞して居る所から、午前十一時頃からそろそろ兒童は草臥れて來、懸て日が暮れて宅へ歸つてからは、夜は殆ど何事も出来ない程疲勞する。斯ういふやうな事が平氣で行はれて居る。一知半解の國字論者は、無駄を去るとかいふを理想を振りかざして、ヤレ羅馬字、ヤレ假名遣、洵に下らぬ事に東京は竹平町の西洋造りの二階の上で、電車のブツブツを聞きつゝ、計畫をして居られるが、こんな無駄が公々然と行はれて居ることに何も氣が付かぬ。其癖、獨逸や奧太利へ外遊して來て居る連中も澤山居るに拘らず、伯林や維也納を以て獨逸や奧太利と心得て、何等斯くの如き活きた事情に通せぬ。日本の國運は何もこんな連中に大部分を負擔して貰ふにも及ばぬが、連中の覺醒はどうでもよいとしても、日本そのものが、今少し、今日に於いて、眞面目に覺醒することが必要である。

五 夜學校・朝學校

夜學校といふものは前方からあつたが、近頃朝學校といふものが興つて來た。新潟縣加茂町に、西村大串師(曹洞宗大昌寺住職)は、東京帝國大學出身の英文學科文學士で、夙に朝學校を設立し、加茂町及び附近數里の間から生徒が集つて來、夜から通學して夜の授業を了へ、其夜は學校、實は寺の客殿に宿泊し、朝四時から授業を受け、而して朝飯時に引けて行くといふ仕組で、既に創立滿十年記念式を今年の九月十日に擧げて居る。此類は我が全國にまだ若干の數あることと確信するが、是等は右の日本式寢坊教育に對する頂門の一針であり、又實に鷄群の一鶴と申さねばならぬ、我が日本帝國の眞個の覺醒は是等から始まるべきである。

六 勞働學校の提唱

更に私の希望するのは、勞働學校があつて然るべきことである。我國にも昔か

ら苦學生といふ者が澤山ある。苦學で之を切抜けて學業を修得し、社會に馳騁するは、其人に取つて實に重大なる成功であり、又榮譽である。是には何等の異議は無いが、苦學生を個人的に酷い目に逢はせて放任するは、國として社會として甚だ氣の利かぬ話である。講者は大正十二年に初めて樺太に遊び、其の實情を視察し、其の戻り土産の一部に勞働學校を提唱した。即ち樺太高等學校を設立して、午前は授業をし、午後は勞働に従事せしめ、學費はそれを以て辨ずることにする。其代り高等學校が三ヶ年であるのを、四ヶ年或は五ヶ年に延べて一向差支ない。斯様な特殊の勞働學校を樺太の如き地に設けるならば、一面に於いては綜合的苦學生救濟となり、他の一面に於いては、將來の有識階級の有爲の士が樺太に對して非常なる親みを持ち、樺太の開発經營に向つて、長足の進歩を促すことになり、更に又第三面の利益として、斯くの如き教育が實に東京邊りの微温的、な、ラ、ク、ラ、教育に較べて、是こそ眞に教育といふ教育が出来ることである。是はまだ斷案には至らぬが、實に教育上の重大なる研究問題であり、之を解決せんとする重要な發案者として敢て自ら立つたことであるのである。夜學校は夙に在り、朝學校が既に興り、更

に大に後天優境方面からの優生學的社會生活の一重要な施設として、勞働學校が立つことを考へなければならぬのである。

七 寄宿生活

學校の多數には、寄宿生活が伴ふ。此の寄宿生活といふものは、優境的價值の上から、プラス方面に於いても、マイナス方面に於いても、考慮を費さねばならぬ事である。昔、四十餘年前、第一高等中學、今の一高の前身では、校風の搖籃は自治制寄宿寮に在りといふ主義で、實に重要な教育上の成績を醗酵した。是は細かに言ふまでもなく、寄宿生活のプラス方面の最も輝ける一例である。併し多くの寄宿生活に於いては、又随分種々のマイナス方面の現象が伴ふ。之を一々茲に列挙するにも及ぶまいが、一寸茲に女學校の寄宿舎に就て一言して見たい。

佛蘭西のセーヌ縣の女子師範學校は、巴里の可なり卑陋なる地區バチニヨル街にある、それにも拘らず、其の寄宿生活は實に上品に出來て居る。我國の各學校の寄宿舎では、往々修學室と寢室とは別々であるが、女學校には概して此の區別は無

い。右の女子師範學校では別に修學室の設けは無く、是は同じ生徒が使ふのであるから、放課後、教場が即ち修學室である。寄宿舎には寢室と食堂とがあるだけである。其の寢室は大きな室で、之を二米平方づゝの小さい區劃に仕切つてあり、其の仕切りは高さ二米に三方が板で仕切つてあり、一方の二米幅に對して、一米二は板で仕切り、其餘の〇八米は厚い暖簾が下げてあり、其の二米平方の小區劃の中に寢臺一個と、姿見鏡附の洗面臺と、着物入箆筒が備付けてある。天井は大きな室の天井までガラ明きになつて居る。是は年頃の女學生として、乃ち嚮にも述べたる品格教育上、充分なる身嗜み、をさせる、自尊、自重の念を涵養せしむる爲めに拂はれたる、周到なる注意の結果である。必ずしも我國の女學生寄宿舎とは云はぬが、斯様な注意は、近頃文部省にも女性督學官も出來たから、多少は拂はれるに至つたことと確信するが、兎に角高尚なる品性の持主であるとはばかりは限らない所の男性教育行政家には、一寸「弘法も筆の誤り」で、是等の點には行届かなかつたことも從來絶對に無いとは行かなかつた事であらう。

女子師範が右の通りであるから、更に其の卒業生程度の者の入る二種の女子高

等師範學校、一つは女子師範學校の教諭を養成する普通教育女子高等師範學校は、巴里の東南郊フオン・トネー・オー・ローズに在り、女子中學校教員を養成する女子高等師範學校は巴里の西郊セーヴルに在り、是等の如き皆な六疊位の室を生徒一人に一室宛あてられて居る。是で更に徹底せる、上品なる、寄宿生活が出来て行かうといふものである。

男性寄宿舎に就ても言ふべき事は多々あるが、此の小冊子では大體寄宿生活に就て、講者の着目點、注意點がどんな方面に在るかといふことを、右で大體髣髴させることが出來たものとして、是に話を止めて置く。

第三章 世間

一 各種の機關

世間の事を社會と云ひたがる人が澤山あるが、社會は既に緒論に申したやうな嚴肅なる意義があるから、家庭、學校に對して世間と云ふ事が適當であり、既に上篇にも家庭、求心生活に對して世間、遠心生活と申した次第であるから、其の意味で了解を願ひたい。世間は家庭よりも學校、學校よりも更に各個人に取つて、既に人となつた若くは人となるに近づいた時期に於いて觸接する所であるから、優生的關係も亦段々と遠のき、即ち一層間接になる。隨て一層稀薄となる事は免れない。然しそれは機關の種類からすれば實に種々あり、又特に機關と云ふに當らないまでも、世間の各部に各種の設備があり、其等が各々優生的價値の上に於いて相當重要な關係があり、隨て優生學と社會生活との相關研究に於いて、見遁してはならぬ

重要さがある。今此の章に於いては大體各種機關と各種設備との二つに大別して之を述べる事にする。

各種機關の中にも範圍の明確なる團體と、其の甚だ明確ならざる團體との二た通りがある。前者を甲種とし、後者を乙種とする。前者に屬するは青年會、處女會、尙齒會、教育會、軍人會である。

青年會は地方乃至町村、稀には町村内の部落の青年が所在團結せる修養團體であるが、動もすると修養の第一義たる獨立力行を忘れる。是が相當選舉杯に役に立つ青年の集りであるから、兎角野心ある重立杯が之を利用すべく、恰も田畑に肥料を施すやうに、僅かの金を肥料として、此の團體に施し、青年共も亦青年會の第一義たる獨立力行を忘れて、僅かなる團體維持の費用を稼ぎ出す事をせずして、斯る不淨なる寄附金を仰ぎ、野心家の爪牙となつて、其の本義を沒却する事は頗る屢々見られる所である。且つ青年會には常に青年俱樂部の建物及び設備が伴ふ、此の俱樂部に於いて、せめて毎月一回特定の一夜を、午後七時より十時までといふ工合にクラブデーとも云ふべきものに充てて、其處へ集つて、或は相互の思想感情を交

換し、時には又先輩を聘して教を聽くといふやうな事をするのが、青年會の最小限の事業であるのに、斯様な事をする青年會は、殆ど寥々として晨星も嘗ならずである。洵に下らぬ青年會が、實は我が日本の現代状態では甚だ多いのである。青年會が團體維持の金を出すと、いふ事は、何も現金を出すには及ばぬ、いくらも方法がある。或は村の利用すべくして利用せられざる土地を耕し、若くは果樹を植ゑ、若くは植林するも一法であり、或は神社奉仕といふが如き事柄に、献身的の勞働奉仕をするも一つの事であり、殊に農村で容易に且必ず出来る所の農業上の試作的小作をや、それから生ずる収益で、優に團體維持費位は出来るのである。我國の農村は地方に依り、土地氣候に依て多少の差はあるが、農業者は忙はしい時は非常に忙はしいけれども、一ヶ年の間に随分閑な日が多い。殊に所謂農村青年といふ者には、公休日が非常に澤山ある、此の公休日の中の一か二日を團體員が生産的に用ゐれば、其の所得に依て青年會の維持杯は何の問題にならぬのである。

處女會は之を率ゐる所の女性たる女子會長が考の届いた者であれば、滅多に處女會俱樂部維持の問題も無ければ、品性も向上して行くに於いて、相當の効果は直

ちに擧げられるのである。新潟縣北蒲原郡濁川村の處女會では、毎年夜の長い冬季數ヶ月を利用して、隔晩に一種の夜學講習を行つた。其時には處女會員は二人を一組と做して、此の處女會の定紋並に名稱を附けた提燈を携へて往復し、又其の校舎には、長い間處女會長彼れ自らの家の廣い臺所を用ゐた。是は何程の効能があつたと云うて褒める程ではないが、併し斯様な遣り口もある。處女會には何等青年會に於けるが如き、愚劣なる忌はしい話は無いやうである。

尙齒會は老人を尊敬する事業で、是は青年會處女會とは趣が違ひ、老人達の團體ではなく、老人尊敬の誠意を效さうといふ町村人の團體である。青年や處女や若い方を云へば、勢ひ年寄を聯想せざるを得ぬので、此の尙齒會の設けのするやうな地方團體、町村部落は、自ら人情が敦くなり、尙齒の優遇を受ける老人達に對してよりも、寧ろ尙齒行爲をやる所の村民、中年壯年一同の民風作興に極めて效益のある事柄である。

最も大なる地方町村の團體は、教育會と在郷軍人會とである。地方に於ける教育會は、中々色々な事をやり、又地方廳若くは町村役場も、多少必ず之に資金を補助

して様々の事をやらせて居る。大體洵に結構の事であるが、唯だ教育會が師範學校の別働隊のやうな範圍の外、一般の民風作興、又は教育者の方面に對しても、教育者の一般的精神向上といふ方に餘り力を注がぬ事が、我が日本の數十年來今日に至るまでも、現状洵に然りである。是は甚だ教育會としての缺點で、小學教育のみが縣や乃至市町村と雖もの教育向上の全體ではない。況や小學教育に従事して居る訓導諸氏の如きは、今日となつては皆師範學校で充分の基礎教育を受けて居り、又日々其の業務として従事する所は小學教育であり、無論尙ほ其上に向上進歩の餘地は無いではないが、此の道筋に於ける向上進歩よりも、更に未だ是程に基礎教育や日々の磨きを掛けてない方面にこそ、大に修養を積むべき事があるのである。例へば、今日の時局に對して、滿洲問題はどうか考へたらよいか、又戦争に對して吹けば飛ぶやうな平和主義や、多少硬くなつたやうな軍人精神論が聞ゆる、是等に對して如何やうの批判を自分等は下し、如何やうの確信を以て國民教育の重責を完うすべきであるか。更に又思想問題が大分喧ましい、共產黨の騒ぎさへもある。凡そ是等の問題に對して、師範學校で既に充分の教育を受けて來た事は、いづれの

訓導でもそれ程幸運な人はあるまい。總て斯様な點に對しての事業を、或は直接に引受け、或は傍から助勢することが、教育會の重大任務でなければならぬ。然るに國民教育者と云ひ、師範學校と云ひ、乃至各府縣の教育會と云ひ、彼等のやる事はまるで鼻に、着いてしまつて居る。兎角某々縣教育大會と云うても、新聞に出る所の其の日程は、何々を何々されんことを其筋へ建議するの件、何々視察員を派遣せられんことを其筋へ建議するの件、凡そ斯くの如きのみある。折角府縣が補助せる府縣教育會で催す夏季講習會と云うても、博物教授法を一週間、東京高等師範學校教授何某氏を聘してやる、算術教授法の講習、地理教授法の講習、先づザツとこんな類である。是等は皆な無用とは言はぬ、無論結構の事に相違ない、殊に教授法といふ事だけは、是は小學訓導諸氏は、即ち日本臣民九千萬中での正眞の權威者であるのであるから、此點に於いて彌が上にも向上發展しやうといふことにつくづく無理はないのであるが、教育は技術の末梢に於いては教授法であると同時に、精神氣魄の中樞に於いては、實に愛國心併せて人格の涵養に存するのである。中樞だけでは人にならず、末梢だけでは人にならぬ、末梢神經は固より大切であると、同

時に、中樞たる腦脊髓が亦大切である。今日の我が帝國の國民教育は、末梢神經は健全であるが、腦脊髓が聊かボンヤリして居るといふ感を催さざるを得ぬ實狀に於いて在る。所で師範學校といふものは、教育行政の中樞機關たる文部省や其他との關係に於いて、實狀に於いて法規關係、行政關係の若干の拘束から、勝手な仕事が出来ぬものではない、その出来るのは即ち教育會であるのである。其の教育會までが師範學校の拙い出店のやうな事で満足して居るならば、實は教育會杯といふものは潰した方がよいのである。併し教育會に爲すべき多くが残されて居るといふ事を注意さへすれば、實に須要なる地方的社會機關である。

在郷軍人會は、今を距る事二十一ヶ年前の創立に係り、頗る組織的に出来て居る。唯だ、在郷軍人は色々片廻りをして居る。或る町村では中將少將が出身であり、又現住して居られる。然るに或る町村では、最高の軍人經驗者でも上等兵に止まる。勿論上等兵だから値打が無い、中少將だから値打が有ると云ふのではないが、上等兵十人を頭としての百人の在郷軍人分會と、少將を頭としての在郷軍人分會とでは、少くも纏りの點が非常に違ふ。次に團體又は機關、即ち役場に對し、學校に對し、

教育會に對し、青年會に對し、寺院に對し、神職に對して對立的比重が違ふ。是等の點に於いて甚だ利益の大小がある。隨て軍人會の長所の發揮に、甚しき便不便の差がある事は免れ難い所である。且つ在郷軍人會の中樞は帝國在郷軍人會本部である、此の本部から只今では「战友」「我が家」並に陸軍省との關係の寄合事業の類として、更に「訓練」「つわもの」といふ四通りの定期刊行物が出て居る。十年程前から「大正公論」其後改題して「昭和公論」といふ、先づ將校以上を對手にするやうな高等の月刊雜誌も出て居つたが、是は近く廢刊した。在郷軍人會本部の指導が宜しきを得ると得ざるとに依て、各地方の支部、其下の聯合分會、其下の分會、是等に及ぼす成績の良し悪しある事は勿論であるが、近く前會長一戸大將が、明治神宮宮司といふ重要な職責を兼ねて居られた後を承けて、春秋に富んで居る前參謀總長鈴木莊六大將が新たに會長の任に就かれたから、是からは在郷軍人會の成績も刮目して見るべきものがあるだらうと信ずる。申すまでもなく治に居つては良民となり、亂に居つては良兵となるのが在郷軍人の職責で、殊に從來、教育の本源たるべき文武合體主義が、動もすれば閑却されつゝあつた我が日本帝國社會に於いては、在郷軍

人自身の修養を積んで以て本分を完うする爲めのみならず、社會の空氣、社會の色彩を大に釐革し、振作すべき重大なる任務を有つて居る事に注意せねばならぬ。

各種機關の乙種には、頗る散漫ながらも色々ある。宴會、歌舞の會、運動會、遠足會、旅行會、俳諧詩歌の會、賴母子會、直會、寺詣會、賭博會、俱樂部會等がある。

宴會は何れの社會にも古くからある事で、人々の一般感情と心理學者が名づける所のものを昂めて、以て社會生活の重要な一面たる社交を穩かにし、又陽氣にする所の效能ある機關である。是には常住の會員がある譯ではなく、一時的烏合の會ではあるが、それだけ亦最も屢々行はれる事で、我國でも昔は宴會の規律は相當正しかつたものであり、又地方に依て所謂處の風として様々であるが、現代行はれる宴會の多くは兎角規律が乏しく、酒は量なし亂に及ばずと戒められてある其の亂に及ぶ事が相當多いやうである。加之、近年は農村山村の僻地と雖も、宴會場に充てらるべき飲食店が大分發達し來た爲めに、益々宴會に於ける規律氣分が崩れかゝつて居る。是等の點に多少の注意を拂ふことは大切であるが、それには小學教育に於いて、夙に作法といふものを能く教込むことが大切である。我が教育

行政の中樞機關たる文部に於いても、夙に此點は大に心配されて、普通教育の各種學校に於ける修身科教授要目に、作法を大に高調して居らるのである。然るに何事でも文部省には極めて忠實なる師範教育乃至男女中等學校が、是には殆ど冷淡にして注意を拂はないのは、洵に奇怪なる一現象であると云はねばならぬ。

歌舞といふ事も亦人間本性の發露で、隨て其の社會生活に於けるや、歌舞の會は文化の程度如何を問はず、東西古今の各社會に於いて大に行はれた所である。西洋の舞踏會、我國の盆踊、其他實に色々ある。是等は禁せんと欲して禁することは出來ないが、有害にならない程度に、國民の自覺を以て之を節することが必要である。明治二十年前後の頃、上流貴紳の間に於いてまで、舞踏といふ西洋の陋風が興りかかつた時に、恐多くも畏き邊りでは餘り之を嘉みせられざりしやに、當時の新聞は傳へて居つた。兎角歌舞の會のみではないが、我が日本の社會生活では、業に既に在來のそれで充分であるのに、更に又西洋のそれを加へ、それで社會の弊毒が二重になるといふことがあり易い。新年祝といふ事があるのに、そこへまるで無用で且つ重複するクリスマスをやる、日本の盆踊がある上に西洋のダンスをやる、日本

の相撲があるのに西洋のベイスボールをやる。甚だ畏多い事であるが、十年前畏くも今上陛下が攝政殿下と遊ばされて西洋へ行啓に相成つた際の御感想として御洩しになつたと傳へられて居る事に、どうも日本は二重生活が多いやうだといふやうな御言葉があつたやうに漏れ承つて居る。如何にも二重生活は餘り褒めた事ではない。然るに斯様な兎角弊害を生じ易い方面に愈々益々二重生活を奨勵する。是れ將た何たる考であるかと言はざるを得ない。さればこそ氣の利いたつもりで間の抜けた其處ら邊りの小學校長杯が假名遣ひ改革を教科書で先づ強ふる順序顛倒の先廻りをして、國語の外に更に羅馬字杯を教へて其の成績を報告して、一廉尖端を行く新しい教育者のつもりで居る。歌舞の會で注意すべき事は、風俗上の方面は勿論衛生上の方面にも亦大切である。或縣で縣廳が擧つて、花合のある上に、トランプで小さな博奕をするといふ例の墮落的二重生活をやつて居つた時代に、獨り民間の盆踊だけは猛烈に禁止令を發した。然るに駐在巡查が午後十時までは職務を厲行し、或夜村長邸を襲うて、斯様な取締は警察官だけでは行かぬ、村長の協力を以てせねばならぬと言うて交渉を爲し、村長の理想論から手酷

く刎付けられた、其中午後十一時に今度は一個人の資格で盆踊の中へ加はつて、盛んに踊つた杯いふ滑稽な例がある。是は勿論駐在巡查は深く咎むべき所は無い、墮落的二重生活の小賭博に縣官等が擧つて耽つて居りながら、農村の盆踊に對して嚴密なる禁制をやらうといふ事が、臍茶問題であるのである。併し近年は流石に農村住民其者の自覺で、午後十二時まで盆踊を盆の三日間許され、十二時になると正午の號砲よりも確實にキチンと解散をし、笛大鼓の音も止む。斯くの如き程度で實現されるなら、歌舞の會もさして咎める事でないのみならず、元々人の本性から出て來る要求であるから、之を根絶しやう杯いふ事は、以ての外の事であると申して置くべきである。而して優生的プラスの價值が無いにせよ、此の程度なら別段マイナス價值も無くて済むことである。

運動會は各學校又は特殊の小團體等でやる事は固より無害有益であるが、それが所謂スポーツの競技會になるとまるで違ふ。併し此事は下篇の第四章、戰爭を説く場合に譲ることにしやう。

遠足會は運動會と兄弟のやうなもので、是も適當の時機に、適當の規律の下に行

はれる事は、格別擧げて言ふべきではない。殊に青年會處女會杯が一日の間に往復の出来る範圍に於いての遠足會を催すことは、娛樂と實益と懇親とを兼ねたる洵に結構なる催しである。青年會ならば一泊する事も必ずしも惡事とは云へない。處女會が泊り掛けて行く場合には、其の統率者又其の統率振りに於いて、青年會以上に注意を要する。

旅行會には、學校等には修學旅行があり、其他府縣市町村等で團體視察旅行がある。學校の修學旅行は其の計畫が大切で、動もすれば教師の費澤旅行に陥つたり、又無暗に費用が嵩んで、生徒に格別利益の無い會になつたりする。殊に修學旅行と云へば、必ず數日に亘る宿泊旅行になる事であるから、女學校のそれ等になると、統率並に風紀の點に於いて一層骨が折れる。是は餘程各種の條件を嚴密にするでなければならぬが、概して、其の學校を卒業して出れば、最早學生生活をする機會が無いといふ學校には、是は餘程價值がある。之に反して、又それより上級の學校へ進むといふ程度の學校では、餘り大袈裟なる修學旅行を催す必要は先づ無いと云うて宜しい。若しも之を催すならば、一日々々と其の宿泊地の性能も違ひ、又視

察事項の種類も大に異なるでなければ、何等日を重ねて旅行するの價值は無いのである。次に府縣市町村等の各種の視察旅行が近頃非常に流行して居る、其の最も馬鹿氣たる頭旗は、東京市會議員達の所謂大名旅行である。之に感染したといふ譯ではあるまいが、各市町村も近年頻りに役得としてそれをやる、先づ各陸軍の師團所在地、又は海軍の鎮守府所在地等へ、各地方の町村長が一緒になつて、其の町村から出身せる兵士の慰勞といふ旅行をやる、洵に理由に於いては、間然する所ないものである。次には農業視察の旅行がある、又各遠隔の地に於ける、地方行政職務振りの視察旅行がある。教員になると、或は教育會又は其他の催しとして、例へば新潟縣から九州への教育視察旅行の類がある。青年會は青年會を視察する旅行をやれば、農業視察旅行もやり、處女會も亦何等かの名儀を附けて視察旅行をやる。其外に、例へば文部所管の大學、總長會議、高等學校、校長會議、又は内務省でやる地方長官會議、大藏省でやる稅務管理局長會議等にかぶれた譯でもあるまいが、全國中學校長會議、全國女學校長會議、全國町村長會議等、杯が、昨年は臺灣、今年は福岡、明年は札幌といふやうに頻りと行はれて、凡そ月給を受けて、帝國の爲めに拮据盡

瘁しつゝ居らるゝ所の國家の須要なる機關たる諸氏に、重荷小に着けとも申さうか、實に幾多の煩雜なる旅行を強要するといふのが今日の實狀である。併し斯くの如き事で、何も是等の有力なる人々が其の職務を荒廢する虞はあるまいが、こんな事が流行り出した事は妙な時勢であると云はねばならぬ。人間には若干の放浪癖があるもので、之がひどくなれば丁度精神病を「病」と云ふと同じく、放浪癖で「癖」の字が附くが、何も人に喜怒哀樂があつても決して精神病でないと同様に、校長室や局長室で一定の執務をして居るだけでは氣力が銷磨する爲めに、相當旅行を歡ぶ心情があつても、決して是は「癖」申すべきではない。併し、義といふものは程よい所で之を切斷するが大切で、韓退之の「原道」にも、行つて之を宜しうする之を義と謂ふとある。旅行會も一寸此邊で一服する事が好い潮であらう。

俳諧や詩歌の會は、俳諧詩歌といふ行事を以てする上品なる寄合である。頼母子會は頼母子講に伴つて之を行事とするに宴會を伴ひ、何れも宴會の別種とも云ふべき、然も宴會よりも自ら規律の生じ得る、進める、但し散漫なる社交機關と申して宜しい。

神社に於ける祭典の後に、昔は相當之に關係する人々に依て行はれたる小宴會が直會であつたが、近頃は神官等の間に之が行はるゝ程度で、直會といふ名稱で、其の献供の品物を參拜者に頒與する、それに此の名稱が與へらるゝ程度に縮小した。寺院に對しては是とは大違ひで、單純なる寺詣でも大にあるが、寺院そのものに於いて、賄をし、酒食若くは飲食を提供する所の寺詣會が、隨分屢々且つ相當大規模に行はれるのである。

奇妙なる會合に賭博の會がある、恰も結社に秘密結社あるが如く、賭博會は亦頗る其筋の目を忍んで行はれるといふ話である。斯くの如きは勿論恕すべからざる事であるが、花骨牌、又はトランプが必ず賭博的遊技であるとは速斷出來ぬけれども、我が税制に於いても既に骨牌税といふものがあることで、迂濶なる著者も、衆議院議員として初めて税制整理に參畫せる場合に、驚かされた次第である。例の墮落的二重生活の一例が亦此點にも出た、即ち輓近麻雀の大流行が是れである。加之、各地方の當局官吏杯までが斯くの如き危險物に手を染めて平氣で居る事は、支那傳來だけあつて時節柄甚だ頓珍漢の沙汰と云はねばならぬ。

俱樂部は西洋に於ける大なる發達で、實は西洋殊に英國式の俱樂部であると、一般社交と云へば必ず男女入り混つての社交で、宴會然り、茶話會然り、勿論舞踏會に至つては尙更の事、是が一種の洵に男女の性的特色を利用して、和氣霽々といふ事が寧ろ過度といふ危険に瀕するまでに完全に行はれる所の結構な風習ではあるが、男性の立場からすると、餘りに事毎に女性が附いて廻り、然も西洋各國の風習として、女性に對して男性が少くも外面的には一目を置くべく餘儀なくされる、此の鼻に着いた厄介から解放せらるべく、野郎連中の治外法權的社交をやらうといふのが、俱樂部の重要な意義である。それで兎も角も俱樂部は西洋に於いて發達し、又其の利用も盛んに進んで居るが、近時我國にもそれが輸入されたにしても、どうも俱樂部の利用隨て俱樂部の性能の發達が左程ではない。其の果てが例へば各市町村部落等に於ける青年俱樂部等にまでも及んで、何等の必要あつて之を維持して置くかといふ點に疑なきを得ぬやうな無意義なる存在すらも見受ける次第である。日本に俱樂部が餘り發達しなかつたのは、俱樂部に依らない社交が反比例に發達して居る爲めもある。俱樂部は畢竟一種の世間遠心生活的現象であり、家庭求心生活の發達せる社會に、俱樂部の發達が充分でないとして、何等悲觀を要せぬ事である。

二 各種の設備

特に機關を備へるでなく、世間に汎く各種の設備が出来て居つて、それが優境的價值又は反價値の因縁となるものが尠くない。

其の第一は設備と云ふも少しく妥當を缺くが都會生活である。都會が大きくなり、都會生活が複雑に、又深刻に發達する事が、所謂現代文明の自然的、又必至的趨勢であるが、都會生活に對する進歩改良は、都會生活から來る幾多の優生的反價値を中和する爲めに講せられて居るので、單純なる衛生的立場からすれば、近頃は最も發達せる都會生活は、農村生活よりも更に健康上進の爲めには進んで居るとまで、若干の統計事實が擧つて居る。併し都會生活に對する反省の上からする所の改良上進の設備は、矢張り餘り多く講せられて居らぬ。それも世界の或る部分にはそろそろ起りかけて居る。際限なく都會の規模が大きくなる事は、人生社會の

呪ひであるといふ事に氣が付いて、都會の人口は須らく十萬を以て制限と爲すべしといふ説があるやに傳聞した、其の論據の詳かなる事は得て聞く事が出来なかつたが、論旨は大體窺はれるのである。都會は所謂現代文明の醞釀地であり、又其の尖端に位するもので、現代文明の長所も都會に顯著であれば、又短所も都會に深刻であるべきは當然である。以下主として都會生活に於いて顯著である所の、右各種設備に就て若干吟味しやう。

百貨店が主として商賣の利益増進を圖るの立場から、近頃彌々倍々盛んになりつゝある。併し其の人間心理、又間接には道德的に及ぼす影響も頗る著大なるものがある。買ひに行く者よりも見に行く者が多い、見て其儘に済まされず、買へばそれで人間心理は飽和状態に落付くが見て欲しくなり、欲しくなつて買へないといふ場合が最大の部分を占めるので、是が即ち人間心理に影響し、偕ては道德生活にまで影響する事となるのである。

公園の設備は、近代都市に於いて頗る發達して來た。道路そのものを半公園の役目に役立てる事も愈々發達し、道路に面するといふ事は、端近はぢかではなく、寧ろ庭園

に面するといふ心持になるのが、近代都會の常例である。我國ではまだ道路は端近で、奥座敷を貴ぶといふ考から、折角立派に舗装せられ、並木も植えられ、向側まで數十間の距離のある道路に面しても、主なる座敷を造るといふ事は、半信半疑の爲體でやつて居る。偕て斯る公園の利用を充分にする事に依て、都會生活が餘程緩和されるが、我國では右に準じて、公衆若くは兒童が公園を利用する事が、まだ左程に發達せぬ。のみならず、兎角庭園といふものは、之に遊ぶよりも之を観るといふ心持が取り切れぬので、公園にも矢鱈にせよこましい下らぬ建物や、殊に飲食店の類が建てられる。乃ち公園は飲食店に上つて、飲食しながら、觀覽する所といふ飛んでもない間違つた考が、今尙ほ我國都會の公衆に取り切れない。猫の額程の日比谷公園邊りにも、如何はしい建物が無暗に建つて居る。大震火災以後の上野公園だけは、稍々是等の建物が少し許り整理の端緒を開いた。獨逸例へば、伯林のチーアガルテン、佛蘭西は巴里のボア、英吉利は倫敦のハイドパーク等の如き大公園になると、其中へ入れば倫敦が何所にあるか少しも判らぬ、巴里の街とはまるで相忘れたる如き心持になるといふ状態である。それでこそ大都市の公園が、公園と

して心理的氣分の轉換に役立つのである。公園は斯様にして其の目的を完全に達し得られるのであるが、偕て目的を達して見た所で公園は矢張り公園で、田園都市に於ける田園殊に田舎そのものに於ける田舎生活とは大に趣を異にするものである。加之近頃の右公園代用の道路にしても舗装が完全になる、完全なる舗装は土と絶縁する事である。乃ち土に親しむといふ機會が如何に公園や道路を完全にしても、田園都市殊に田舎生活とは大に趣を異にする事になるのである。

陳列館、即ち各種の博物館、美術館、工藝館、乃至衛生陳列館、遞信陳列館、武器陳列館、海事陳列館等様々ある。是等は人々の一面には知識を開發し、他の一面には娛樂にも供する極めて結構なる設備である。固より其の長所は澤山にあるが併し斯様なるものは亦都市の設備として缺くべからざるものになつて居り、而して之を利用するが爲めには、亦尠からざる努力が入用になつて来る。此の努力を精々輕減して、利用が充分出来るやうにするが爲めに様々の試みがせられて居る。例へば一定の時刻を設けて、單に觀覽のみならず説明を聽かせ、又或は一定の題目を設けて講演を聽かせ、是と陳列の品物と相ひ結付けて、篤と觀覽者の了解を完うする

といふが如きの類である。若し單に都會生活の所謂お上りさんを威し付けるが爲めの設備たるに了らしめるならば、頗る亦現代文明式弊害あるものとなるのである。

演説、講演、講習といふが如きものも、現代の都會生活では、殊に頻繁に行はれる事で、陳列館と相並び、若くはそれ以上に、人智開發に須要なる役目を遂げるものである。講習は最も系統的、連續的知識の練習で、講演は此れよりも稍規模の小なるものであり、演説となると或る簡單なる特定の結論を聽衆に傳へるといふだけで、知識内容も極めて淺薄なるものである事が常である。

更に娛樂の趣旨を多分に加味したものは、講談であるが、是は既に各種の演藝の中の一つになる。演藝には複雑なる歌劇、演劇より、曲馬、手品、其他種々の藝術的乃至娛樂的の催しを含むもので、是等が亦殆ど都會生活の遊樂の先鋒となるのである。都會生活の甲斐ある價値は、殆ど演藝に存すると云うても宜しい、而も是等が兎角世間、遠心生活の獎勵となるのである。

更に現代の大なる都會生活に於いては、殆ど常に娛樂園の説備が伴ふ。娛樂園

は一つの大きな遊園地で、演藝、スポーツ、見世物、飲食店等、有ゆる人々の娛樂的欲望の満足を得、廣大なる一區劃の中で満足するの設備である。大阪近郊の寶塚、東京では淺草の奥山、花屋敷、杯は其の極めて規模の小なるもので、歐米各國へ行くと、それに數十倍大なるものが出來て居る。是も亦田舎漢を魂消させるに充分なるもので、都會生活と田舎生活との非常なる異路目となるものである。

飲食店が都會に於いて發達するは申すまでもない、高等なる料亭、割烹店より民衆的低級安直なる公衆食堂に至るまで、各種の種類と階級とがある。

以上各種設備の主なるものを列擧したが、格別差當つて急に社會生活に弊害を及ぼすといふ程でもないから、勢の趨く所で、是等に對して殆ど何等の反省的取締りや、又發達の適度を加減する所の制限等も無い。唯警察といふ頗る機械的なる而して餘りに深い考案を費さずして施行せらるゝ所の、軽い監督機關に一任されて居るといふことが、現代の各國の常である。差當りは、固よりそれで何等の不足を言ふには當らぬが、少しく根本に立入つて攻究すれば、隨分寒心すべき弊害の芽が潜んで居らぬでもない。併し是等は設備そのものに關する議論ではなくて、今少

し深い所の理想論、原理論として、風俗並に社會生活一般に關して論究せられ、其の應用の閃きとして、始めて是等の指導若くは監督に論及せらるべきものである。故に茲には是丈けに止めて置く。

特に都會生活に限つてのものではないが、近時ラヂオの普及と流行とは大に注意に値する。先づラヂオの資料や題目が問題である。時事に關し、學術に關し、史傳に關し、生活實地の指導に關し、相場に關し、在外同胞の慰藉激勵に關するが如きは、ラヂオの最も光輝ある利用であり、その國民生活に大效用あることは何人も異議を挾まぬ。歌曲、音樂等、娛樂の性質あるものも、ほんものを聽聞するには機會も得難く多大の費用をも要するのを極めて容易に耳に届くこと故、頗る結構ではあるが、これには第一に時刻を擇ぶことが極めて大切である。日曜でも大祭日でもなく、晚餐後の休憩時刻でもなく、滿都の士民が熱心銳意、一生懸命に家事に公務に精出して稼ぎ居る、又居るべく居らねばならぬ時刻に、うかれ節、ざれ歌の洪水で堂々たる大日本帝國の首府、鞆の下の東京の八百八街が、天の眞ッ晝間に到る處騒々しくも鳴り渡り汚されて居るなどは、眞に是れ亡國の歴然たる兆候、豫言がぶ

ちまけられて居るものと言はねばならぬ。ラヂオ取締の第二點は是非共その音調の強弱大小についてあらねばならぬ。家庭でラヂオを聞くなら其の家庭限りで鄰家や他人に邪魔にならぬやう注意すべきは半開國の社會生活でも必ず課せらるべき義務であり禮儀である。家庭のものがあたり近所に構はず怒鳴つたり語つたり騒いだり踊つたりしてよいといふ法はない、ラヂオだからとて同様の無作法の許さるべき道理は絶対にない。早慶とか日米とかの仕合だとして譯の分らぬ吼え續けを難有がつて拜聴するの義務深思熟考、讀書計算、作文著述の大妨害を胸をさすりながら我慢するの負擔を四隣の隣人に課するの權利を如何なる法、理からラヂオ架設者は僭有するのであるか。今やJ・O・A・Kは百萬に達するさうだが、ラヂオの濫用から日本民族はさらでだに餘り厚く太くもない氣力と天分、鋭敏過ぎる感受性の濫用、興奮、磨滅、減耗、衰憊を來して、日に日に影が薄くなりつゝありはせぬか。是等は醫學者等に於いても、今や十二分の用意を整へて研究の火蓋を切るべき時であらう。受話器ともいふべき銘々家庭の再現機を音の大小強弱適宜に調節して、隣り近所に迷惑を及ぼさない位の設備は中等程度の工業學校卒業

生にでも直ぐに發明出来る簡單なる仕事ではないか。

下

篇

因緣關係

第一章 淫風蕩俗

既に先天方面並に後天方面から優生學的事實と社會生活との關係、主として後者が含有する前者の價值的品等並に價值的性質に就て考察し來つたが、是丈けではまだ考察が完了したとは認められない。乃ち孰れが原因であり、孰れが結果であるかと云ふではなく、社會生活事實と優生學的事實との相互關係、相互に因となり縁となる、主客の關係を超えたる事實、若くは主でもあり、亦客でもある所の事實に就て頗る重要なもののあることを注意せねばならぬ。それは最も廣い關係に於いては風俗、次いで戦争といふ重要な社會生活事實、又側面からは等に對して滿遍なく影響を及ぼす所の謂はば機關に注ぐ油の如き作用を爲す所の新聞雜誌、此の主要目に就て考察を費す仕事はまだ残つて居る。この下篇はこれが検討に充てられる。

風俗の中には固より良風美俗もあるが、此の簡單なる小著に於いてはそれまでを説くよりも寧ろ惡俗に就て警戒し反省すべく、實際上の價値から題目を擇ぶことが適切であらう。仍て第一に淫風蕩俗、第二に飲酒及喫煙、さて第三には頽敗俗、この三大風俗事項について話を進める。

一 社會的弊害

淫風蕩俗に對する考察は殆ど風俗の全幅を覆ふやうに普通には考へられて居る。成程淫風蕩俗が風俗の全體ではない、併し普通の談話に風俗が良いとか悪いとか言へば先づ此の問題に就て言ふものと解せられる。

淫風蕩俗に對しては、勿論之を矯正し廓清することを主眼とせねばならぬ。併しそれには先づ全體淫風蕩俗がどんな社會的弊害を喚び來たすものであるかを見ねばならぬ。是は全體に於て、四通りに攝せられ、其の各通りに又細かく幾多の事項が含まれる。

第一は人口に及ぼす弊害である。淫風蕩俗の影響は人口に弊害を及ぼし、人口減衰を速めるものである。其の手續は、一つに惡疾の發生及び蔓延を盛んに致して、殊に生殖官能を障害すること、二つに避妊の惡俗を盛んにし、且つ之を蔓延せしめ、且つ其の手段方法を發達せしむること、三つには妊娠不能の症狀を誘ひ致すこと、四つには善良且つ健全なる家族關係に龜裂を生せしめ、又その次第に減り行く傾向即ち消耗を來たすこと、五つに惡疾に基づく遺傳に依りて人口の發達を妨害すること、是等が即ち淫風蕩俗から人口減衰を致す所以の手續である。

第二は人種に及ぼす弊害である。即ち民族の體格、延ては性格に頽敗的傾向を致す、其目を擧げると、一つには惡疾を發生し、且つ之を傳播して段々民族の健康を低下し、人種は其の遺傳に依つて劣惡となること、二つには不衛生の行爲から平時の健康を削弱して、人種を頽敗せしむるに向ふこと、三つには頽敗的性格を次第次第に致すこと等である。

第三は經濟上の影響である。淫風蕩俗は社會經濟の上に大害を來たす、一つには無用の浪費を進めて社會經濟を害すること、二つには勤勞の風を障害して生産を衰頽せしむること、三つには奢侈の惡風を助け長じて一般經濟の變調を致し、淫

風蕩俗の直接行はるゝ範圍よりも更に廣く遠くに亘つて社會の頹敗的風俗を促し進むること、四つには無用の生産を獎勵して富の運用を不完全且つ不順當の傾向に導くこと、五つには個人の富を費し遂に家産を蕩盡して社會經濟の資本を減らすこと等である。

第四は道德上の影響である。淫風蕩俗は更に進んで道德殊に品性の上に惡果を致す。一には自制的生活が頹敗すること、即ち身を省み自ら慎しむといふことが無くなること、二つには活動の氣力の減衰すること、三つには趣味が病的若くは變的に枯れ衰ふること、四つには智能的向上が休止すること、五つには道德が低下すること、即ち家の内に於ける族員相互の關係に於て、又甲乙兩家の間に於ける紛糾せる變的關係を生ずるに於て此事が起り來る、六つには社會の單位たる家の頹敗に依りて社會道德の低下を促すこと。

以上各項目の諸々の影響の錯綜せる總體として、淫風蕩俗の社會的効果は、第一兵力の削弱となり、第二に富力の減衰となり、第三社會鞏固の衰頹となり、第四秩序及び進歩の休止となる。乃ち其の一つがあつても、以て國を亡ぼすに足るのである。斯るが故に古來經國の道必ず先づ淫風蕩俗に向つて周到なる注意を施すことが條件となつて居るのである。我國の今日は如何なる状態に在るかと考へるまでもなく、苟も社會生活の考察者は、必ず此點に對して相當以上の注意を懈つてはならぬのである。

二 德教教育による救治

淫風を防遏せんが爲めには、先づ其の大本に遡つての救治策が大切である。大本の救治は些か青表紙臭い事ながら、矢張り實に教化政策に存する。之を大別すると、德教教育に於ける方策と、學校管理に於ける方策との二大部門となる、今之を各目に就て御話致さう。

德教教育に於ける方策は、淫風蕩俗の不徳なること、清淨なる品行の大切なる徳なることを、德教に於ける重要なる一目として之を教へ之を授けるのである。其の遣り方には様々ある。

第一は獨斷教主義である、即ち理由の如何を説明せずして、獨斷的形式の下に示

命を與ふるものが是れである。此の主義の實効如何は、其の背後に存する權威の大小に依る。宗教の權威、國家の權威、又教ふる人の人格の權威、杯が即ち此の權威で、偕て權威の大小は一つには權威者に依り、二つには被教化者に依る。故に同一の權威者を以てしても、幼童に對するよりも少年青年壯年に對するに至る程段々効力が小さくなる。國民心理の違ひはあるけれども、概して幼童及び少年に對しては、人格や國や、又は宗教の權威が途轍もなく劣弱になつて居らない限り、此の主義は若干實際に用ゐて差支ないが、青年以上に對しては其の適用は餘程注意せねば、勞して功なきに了るものである。

第二が合理教主義である。嚴密なる實理であれば此上ないが、合理的と云ふに於ては稍々廣い緩い意義でも差支ない。要するに理由を擧げ示して、制約的、殊に自律的に徳行を進歩せしめやうとする方策が即ち是れである。青年や壯年に對しては、此の主義を以てするの外、獨斷教主義では殆ど駄目であると謂うて宜しい。但し此の主義を以てしても、其の効力は極めて限られて居る。是には更に二つの細目がある。

一つは個人觀とも謂ふべきもので、自個の心意身體に對する、淫風的行動の惡効果を詳に示し、衛生上から此の害惡を豫防し、若くは矯革せんとするもので、世に傳ふる性欲教育なるものが即ち是れである。此の主義には利害が伴ふ、一つには自分痛切なる利害を説示さるゝといふので、効力が頗る大なりといふ利益がある。二つには早晚詳に知るを要する所の知識に達するといふ利益がある。所が三つには未だ其の問題の必要を知らざるに、早く之を暗示するといふ弊がある。四つには二人以上、即ち極小にしても一人の教師と一人の生徒との對話、又共通對話に於いて斯かる事柄を公言し、公けに聽くといふ所から羞惡の心を癩痺せしむるといふ弊がある。斯るが故に、所謂性欲教育は、決して策の上乗なるものではない。されば歐洲各國でも餘り是は行はれない例へば一九一一年に普魯西の七年制高等學校に該當する約八百のギムナジウムの中で、僅か七十六校丈けが之を行つて居つた、それも最上級で、主として性欲禁遏の健全なるを強く説くに限られて居る。之を一般教育とすることは、歐洲何れの國にもそれが實施されて居らぬ。普魯西及瑞典の教育者の意見では、之を學校の問題とせずして、家庭の問題にするといふ

ことに一致して居る。

次に個人觀に對する社會觀がある。古今東西幾千百の民族、幾千百の社會の運命に對して淫風蕩俗が如何に怖るべきものであるかに關し、其の初めは唯だ大體の概括的の説き示しを以て、其の進むや次第に分析的の評論叙述を以て、順當且つ的確なる概念を與へ、感想を喚起し、其の詳かなるに至つては、生徒が自然に之を識得するに委せるといふのが、此の社會觀、合理教主義の實用である。自然識得といふことは一寸其の機會が無さうに考へられるかも知れぬが、實は其の材料の多きに苦む程の事實あることは、何人も一寸考へたら注意出来る事である。

三 學校管理に於ける救治

學校管理に於ける方策には、更に禁遏主義及び豫防主義の二通りがある。

徳教教育が遂に餘り効力が無く、既に此の弊風が學校關係に於いても頗る現はれて來るやうになつた場合には、即ち茲に禁遏主義の必要を生ずる。禁遏主義はどんな弊風を目當てに働くかと云ふと、先づ第一が内外異性愛の弊風である、即ち

對手方の一方は教育機關の内に在り、一方は其の外に在るもので、其の弊風の行はれるのは多く教育機關の外である。第二は全内異性愛の弊風である、是は男女共學の専門學校、中學校、稀には小學校に於いて行はれる、是は最も教育機關そのものに弱點のあるから來る。此弊の大小は、民族性、又人種、氣候等に因ることが大である。例へば歐洲でも、一番北のスカンデナヴィヤでは、共學の弊が甚だ小であるが、之を地中海沿岸の南方諸國に適用すべきではない。第三は男子同性愛の弊風である、是は殆ど主として教育機關の内に存するが、偶まには内外に涉つて存することもある。第四は女子同性愛の弊風である、是は殆ど常に教育機關内に存し、其の内外に屬するは極めて稀である。斯く申せばとて、有ゆる學校に之が有るといふ意味と文理を誤解されては困る。凡そ禁遏主義は殆ど極めて困難である、殊に同性愛の弊風に至つては一番取扱ひ難い代物である。

禁遏主義は困難であり、獨斷教主義又は合理教主義は極めて効力が限られて居るといふことが判つて、成るべく側面から此の弊風を誘ひ出すべき暗示を避くる策を講じ、併せて情欲の發動を調節し、且つ之を健全ならしむるを期するものが豫

防主義である。それには、或は淫猥なる文學、繪畫、演劇、舞踏、音樂等に接することを防ぎ、或は不健全なる異性との社交に近づけるの注意を勵行する。例へば舞踏會、歌留多會、英語會、教會、寺院、劇場、活動寫真館等に出入するに就いて精細なる注意を施す、是等は先づ消極豫防策と名づくべきである。之に對して積極豫防策と謂ふべきものの其の第一は、身體の健全を圖り、體育を獎勵する事が、近頃教育者の間に盛んに主義として行はれて居るが、然るに是が却て意外の惡果を導くことが稀でない、それは身體の健全といふ所から自然に出て來ることすらもある。是は芽出たいたいに伴ふ多少の税金の類として先づ諦めるとしても、右の體育獎勵といふことを因縁として、邪路に馳せるといふことが割合に屢々出て來る事であるのである。向島邊りに一種の魔窟が繁昌するといふことは、右の悲しむべき一實例と見るべき理由が頗る含まれて居る。そこで積極豫防策の第二は、心情を他の方面に導いて、情慾に傾くに違あらざらしむること、是は豫防主義の上乗なるものであるが、それには不斷の周倒且つ嚴厲なる注意が入用である。積極豫防策の第三は、生理的に惡性なる刺戟を避ける方策である、即ち枕や蒲團の形狀及び品質に注意

し、食物殊に晚餐の副食物に注意し、飲物に注意し、運動及び體操の形式に注意するといふが如き事が此類の積極豫防策である。體操の形式に於ける注意は、特に教育機關に於いて最も大切である。斯様な事に餘り深刻なる知識の無い體操教師や、若くは體操教範制定に與かる所の文部官吏杯には、特に聲を大にして此點に對する注意を要求せねばならぬ。凡そ豫防主義は總て頗る實施が困難であるけれども、青年以上に對しては合理主義に較べて寧ろ有効なるが常である、以上は淫風防遏の教化政策の大要である。

四 禁止政策

教化政策は、淫風蕩俗に對する大體に遡つての救治策であるけれども、其の根本的なる丈け、其の効果は必ずしも多大とはなり難い。殊に徳教教育に於ける方策は、一步も手を緩うしてはならぬことは勿論ながら、其の多數人に於ける平均成績は、逆も、理想的な好結果には至り難い。學校管理に於ける方策は、初めから正しい結果を豫期し難い、是が實施に當る人の數も限られて居れば、又風俗といふ事が、

本來、中以下の多數人の共通事項であるから、風俗を矯正する方策は、中と是れで満足なる結果に至り難い。さうすると、斯かる極めて限られたる成績に於いて出来上つた人格、即ち既成の人格に對して、更に刑政政策で出来得る丈け蕩俗の滔々たる勢を阻止することが必要となつて來る。

刑政政策は即ち賣春に對する政策である。淫風蕩俗が社會必然惡として現れるのは、即ち賣春現象である。其の以外に於けるものも固より様々ある例へば、姦通や姦淫の各種現象もあるが、是は刑法及び道德問題として存し、事は重大であるけれども、多くは既決の問題に屬し、政策問題として存するものは無い。

偕て賣春現象に對する刑政政策は、第一が禁止政策で、第二が制限政策である。刑政の機關及び効力に頼りて、賣春を禁止せんとする政策が即ち禁止政策である。是には更に二通りある、一つは絶対禁止政策で、是は一切の賣春を禁止しやうとする政策である、即ち公娼私娼一切を禁止して之を絶滅せんことを期するもので、其の實行が困難な所から、いつも有名無實に止まるのが常である。二つは相對禁止政策で、是は公娼を禁絶して、其他は必ずしも措て問はざるの政策である。さ

ればそれが私娼獎勵に陥つても、一向差支ないといふ所の政策となることがある。此の如きは「耳を掩うて鈴を盗む」に陥るものである。公娼は之を許すに於て始めて存するものであるから、公娼禁絶は、公娼を許さなければ直ぐに行はるゝ事であるが、私娼の存在を冷眼に視るならば、私娼は彌々繁殖し、而して之を禁絶するどころか、數を減らすことも容易には出来ぬ。故に相對禁止政策は、實に其の名に負いて放任政策である、即ち無政策政策である、即ち矛盾の行き方であるのである。

五 制限政策

制限政策は禁止政策とは異りて、賣春現象をば社會の必然惡と認め、出来得る丈け其の實地に行はるゝを制限し、且つ其の弊害を輕減せんとするの政策である。是には様々の方面がある。

先づ制限の方針としては、一つに風儀上の制限がある、是は主として風儀上、即ち人の品位上から賣春を制限せんとするものである。二つには衛生上の制限がある、是は主として社會衛生の上から賣春を制限せんとするものである。

制限の方式が又二通りある。一つは限地制で、場所に關して賣淫の行はれる地域を制限すること、二つは限時制で、時間に關して賣春の行はれる時刻を制限せんとするものである。

次に營業の方式に又二通りある。一つは樓娼制で、經營者は營業者の外に存する。即ち營業者たる婦女稀には男子と、經營者とは別人で、營業者は經營者に隸屬し、其の指圖に従うて營業するものである。即ち隸屬營業である。二つは個娼制である。是は營業者が直ちに經營者であるので、即ち獨立營業を爲す者である。

以上制限の方針並に方式の違ひからして、各種の制限政策があり得るのである。就中、現今と云ふよりも寧ろ古來最も行はるゝ所の實地の制限制度は、大體左の二通りの孰れかに屬するものと見て宜しい。

第一は限地公娼制である。凡そ公娼制は、法の眼に於いて其の存在を認むる所の賣春制で、其の營業には各種の條件義務の負擔が存する。公娼制は、私娼を一層猛烈に制限するか、若くは絶対に私娼を禁止するでなければ、筋が立たぬと申して宜しい。さて限地公娼制は、一定の地區を限つて此營業に従事するを許すもので

ある。故に、多くは室内營業であり、且つ多くは樓娼制になつて居る。但し個娼制も亦た限地制と兩立し得ないことはない。唯だ我國では從來の遊廓制度が常に樓娼制であつた所から、賣春問題に就いて種々熱烈なる運動をする人々も、遊廓内に於ける個娼制といふことを一向考へて見ず、その利害得失を考慮したといふ事實が見えぬやうである。限地公娼制は、既に地區が限られて居るが爲めに、往々自然に若干限時の傾向をも有することが稀でない。限地公娼制に於ける制限の方針は、主として風儀上よりし、併せて又衛生上よりするが、是等の爲めには、此制は頗る便利なる制である。

第二は限時公娼制であるが、是は特定の地區を定めず、隨て多く戶外營業となり、又容易に個娼制となるものである。既に限地の制が無いからして、其の限時の制も亦た往々弛緩して畢竟制限の大に弛緩するを致すことは稀ではない。即ち夜の八時より街路をうろつくことが許されて居つても、八時以前或は白晝もうろつく者が稀でないといふことになる。制限の方針は、風儀上からは殆ど絶望である。唯だ衛生上の取締丈は、例へば登録せられたる限時公娼が一定の日、例へば一週

水士の二回といふが如く、警察の取締を受けるといふが如きことで、若干の可能性がある丈けである。

六 娼婦の各種

以上、各種の見地よりする各種の賣春方式に就いて、其の長短得失を些か比較して見やう。之が爲めには姑く賣春制の發展、進化の順序にも若干の注意を拂ふことが適當である。是等の注意を以て左に順序を逐うて列擧して見やう。

第一は私娼である。賣淫に關し、刑政上何等の干涉する所なき賣春方式は是れ私娼制である。私娼は、一定の地區に限りて營業するを要せず、又一定の時刻を限りて營業するを要せず、營業者自身の意思とお客の需要とに依りて自由に營業するものである。是は無制限の制で、此くの如きが風儀上最も害毒を流し、衛生上又何等取締を受けず、豫防を加へられざるは明白である。私娼にも様々ある。賣子即ち種々の見世に於いて販賣人として使はれて居り出勤して居る所の若い婦人、舞妓、劇妓、即ちオリンピック、カジノと云ふが如き、寄席劇場に出て藝を演ずる所の婦人

達、それから館婢、即ち旅館料亭、カフェー、茶亭等に於ける給仕女、白首等が即ち私娼の録々たるものである。次で藝妓、女優の類も、或は多く或は少なく事實上此の仲間に入る者がある。

第二は街娼で、晝夜を別たさず街上を散歩して、賣春の機會を捉へることに従事する連中である。是が最も風儀上の制限を受くること、輕き者、唯だ之を營むや警察に登録することを要するが爲めに、一週多くは二回、警察が規定する場所と方法とに於いて、衛生上の取締を受くるの制限を蒙つてゐる。

第三は亭娼である。街娼が少しく進むと、茶亭、カフェー等に出陣して、此所に入り來る所の蕩兒を捉へやうといふ業務に従事する。彼等は茶亭やカフェー等の館婢とは全然別物である。此事は注意を要する。亭娼の衛生上、警察行動に對する關係は全く街娼と同じである。併し風儀上では漸く極りが付く方に赴き、一般社會の風儀を紊ることは街娼の如く甚しくはない。凡そ街娼と亭娼とは晝夜を別たぬけれども、特定の茶亭、カフェーにして、特定の時刻ならでは開店せざるものも亦た尠くないから、亭娼は幾分既に、限時制を加味するに進んだものである。偕てそ

れが純然たる進度に達せるものが、

第四の夜娼である。併し純然たる夜娼は甚だ之を判別することが難い。多くは制限の難易に従うて夜娼となり、又は逆轉して亭娼となり、甚しきは更に逆轉して街娼となる者が亦た尠くない。歐洲に於ける特定の遊技場、娛樂場、舞踏館、即ち踊場に入出入する娼婦は、先づ此の夜娼の例に數へて宜しい。

第五は散娼である。以上第一乃至第四は皆な個娼であるが、更に樓娼の中の初等なるが散娼である。樓娼を蓄ふる妓樓が一般市街に混在するときは、其の樓娼は散娼である。即ち遊廓に於ける妓樓の娼妓たらずして、尋常の市街に於ける妓樓の娼婦たる者が是れである。散娼は、日夕の生活に於いては普通の子女と同一のやうに視られ、出入にも進退にも多く普通の子女と一緒にするから、風儀上の制限は到底多きを望むことが出来ぬ。併し衛生上の制限は、固より之を個娼に比して一層の確實を加ふることになる。今日、我國でも、田舎町に於いては或は三四戸、或は六七戸、或は十數戸の妓樓を存するに止まる場合は、多くは此の散娼制が行はれて居る。

第六は廓娼である。妓樓が特定の廓に集つて存在するとき、其の樓娼は即ち廓娼で、是は風儀上及び衛生上の制限の稍々確實なるものである。凡そ賣春制の制限政策上最も完全に近きは、實に此の廓娼制に在るのである。歐洲のセグレドーション即ち隔離聚在制度は、一都會の娼婦の全體若くは多數部分を特定一個若くは若干の區域に限局する制であるが、ブタベストよりグラスゴーに到る歐洲の各都會が未だ一として之を企劃せるものが無いとは、此事の研究者フレツクスナー君が其の著書に於いて歎じて居る所である。

七 公娼廢止論、實は樓娼廢止論

以上大體制限政策の基本から、且つ社會進化の最も重要な社會的見解から、賣春制の進化的順序に従うて娼婦の各類の列擧を試みた。然るに、凡そ公娼の中で、特に樓娼を非とする議論がある、其名を「公娼廢止論」と云ふけれども、其實は樓娼反對の説である。「公娼」括言うて大層喧ましく論じて居るが、夜娼や亭娼は實は何れも皆な公娼である。何も散娼及び廓娼、即ち樓娼に限つて公娼ではない。苟も公

けに其の存在を認め、之に取締をまで加へながら、之が公娼でない、杯言ふのは、耳を掩うて鈴を盗み、免れて恥づるなき論法である。故に公娼廢止の看板は先づ、以て之を撤廢して、「樓娼反對」と云ふのが至當である。

偕て此の所謂偽公娼廢止論に對して、即ち樓娼反對説に對して、其の論點を擧げ、且つ之を批判して見やう。

其一、樓娼は人身賣買なりと云ふこと。勞役契約が本人の意思に基づき、損害賠償の責を負ふことを條件として、何時なりとも之を解除することを得るといふ法律の原則は、樓娼と樓主、即ち經營者と經營者との間に、何等適用上の除外例たることは無いのである。唯だそれが行はるゝことの甚だ困難であり、又は稍々稀なりし的事实は、此の營業者が經營者に對して、比較上頗る懸隔の大なる弱者たるに坐するので、之に對しては、法令實施上の注意の到らず、足らざりしことを責むべきで、樓娼の存在を以て人身賣買の行はれるものなりといふが如き曲説を做し、他國社會のアラを探すことに依て、纒に己れの空虚なる自尊心を満足せんとする底の、低劣なる西人の批評に、合槌を打つが如きは、洵に陋劣千萬なる態度と謂はねばなら

ぬ。樓娼の存在は斷じて人身賣買の制度を表すものではない。近頃國際聯盟杯でも何を血迷うたか「人身賣買制度の撤廢」といふ表題の下に、樓娼禁止を策せんとするさうであるが、樓娼禁止を更に他の論點からするならばして見るが宜しい。前段に於て樓娼は賣春制度の頗る進化せるものである所以を述べ、制度上の進化を述べてあるが、併し又他の點から一層有力なる反對説をするならするが宜しい。「人身賣買」といふが如きことを以て樓娼制度を非難するのは、洵に噴飯に値する僻論と申して宜しいのである。

其二、樓娼は營業の自由を有せずと云ふこと。賣春のことは既に普通の堅實なる職業と同一なる品位を有すべからずとせば、樓娼が獨立營業の自由を有し、完全なる權利義務の主體として人並みに振舞ふは寧ろ不合理である。併し是は樓娼に對して言ふのではない、獨り樓娼のみならず、樓主も亦た固より普通堅實なる商業經營者の間に齒せらるべき者に非ざるや論なく、又從來の歴史的にも事實左様にあつたのである。樓主對樓娼の間には、從來多くの場合に於ける慣例上、弱者として慘虐行爲を逞しうするが如き事に對しては、取締の必要なるは、既に前項に述

べたる通りで茲に繰返して申す必要は無い。併し樓娼が獨立營業でないといふことを以て、個娼の方が遙に結構だとして之を推稱する理由とするは、以ての外の議論である。社會の秩序風儀等より見て、個娼の自由行動が却て大に社會を毒することが大なることを顧慮した上で、一般に賣春營業がどのくらいかの程度まで自由を享受すべきものなるかを判定することが根本的に必要であるのである。

其三、樓娼は國家が賣春を公許し之を獎勵するの結果に至ると云ふこと。樓娼は國家が公許せるものなるに於いて、個娼の中の街娼、亭娼、夜娼と何等擇ぶ所がない。併しながら公許といふ事は獎勵政策を意味しはせぬ、樓娼の公許は個娼の公許と同じく行政上之を取締らんが爲めの公許である。恰も猶ほ避病院の設立を公許したとして、それが何も疫病の獎勵を含まざると同斷である。唯だ樓娼制は個娼に較べて取締政策即ち制限政策の實効の優らんことを努めて居る丈けのことである。國家の認許を以て直に推奨政策と做し之を非難するは、全然穿きちがひの議論である。是等の事柄に就いては、徳川時代の制限政策並にそれが日本橋の真中の葎原から新吉原へ移り、又は場末の品川、新宿、板橋、千住と所謂二廓四宿に押

詰められたといふ實例を參考して容易に首肯される事柄である。羅馬の舊き都、今の新らしき羅馬市之に入り來るときに、必ず其の町外づれに於て、大なるカタコム即ち墓地を通らなければならぬ。同様にお江戸へ乗り込むには、必ず其の場末の遊廓を通らなければならぬ。古の羅馬の行政が墓地を羅馬の町の真中に置かず、場末に置いたのと、江戸の行政が遊廓を町の真中に置かずして場末に置いたのとは、殆ど能く似た考から出た、可なり賢明なる方策である。時々大火災等の場合に、場末から中央へ近づかうとしたことも屢々あつたが、時の爲政者が慳巧であるとか中々それを許さざるを例とした。一般の需要者がそれに満足せずして、江戸の市街の真中にも種々の個娼甚しきは一種の樓娼までも發生するに至つたことは、是れ江戸社會の恥辱であり、逆轉類敗にして、賣春制度、廓娼制の失敗では斷じてないのである。

其四、個娼は賣春の内密隠密なる實行なるが故に、風俗上甚だ結構であると云ふこと。此くの如きは歐米の事情に疎きことの甚しい連中の申す事で、迂濶と謂ふべきか、虚偽と謂ふべきか、頭隠して尻隠さずと謂ふべきか、此に至つては人をして

復た言ふ所を知らざらしめるもの、啞然たるもの之を久しうするの外ないのである。

以上は樓娼に對する非難、所謂「公娼廢止論」の根據ないことを列擧して明かにしたものであるが、更に樓娼、殊に廓娼制は他の諸制に較べて若干の長所があり、又弊害が比較的少ないといふ事を擧ぐれば、一つには廓娼制は淫風を一地區に收束する、二つには廓娼制はそれが特定の地區に在り、出入に垣が据えられて居り、殊に多く場末の地區に在るが爲めに、蕩兒の放行を困難にする。大學の前で引張りを捉へるよりは、角帽の始末を考へ、制服の釦を氣にしなから向島の歸りに吉原へ繰込むことは、よくよくでなければ出来難い事である。昔、東京大學の法、理、文、三學部が一ツ橋から今の本郷の加賀屋敷へ移轉した頃に、直ぐ大學の裏の根津に遊廓があつた、之を名づけて「上野の動物園」と學生連が申して居つたことは、其の當時の本郷の大學學生の寫實小説とも謂ふべき、坪内春のやおぼろ先生の名著「書生氣質」に明白に書いてある。單に大學生の墮落といふのみからではなかつたけれども、確か明治二十一年の頃に、根津遊廓が洲崎へ移轉した、大學生の風儀は、是に依て餘程

改良上進を見たことは、何人も存じて居る顯著なる事實である。三つには廓娼制は、一般人に、放行の誘惑を與ふる機會が尠い。髮の毛を縮らし、赤い粉を振り掛け、臉を黒く彩り、頬に紅を點じて居るやうな連中が、往きつ戻りつ街道を通るとなると、所謂「冶容誨淫」の結果が非常に多くなる。四つには廓娼制は、時間の制限を持ち來たす傾向を有して居る。五つには、樓娼制は婦女の娼婦に墮落するの機會を少なうする。六つには、樓娼制は賣春を營むに困難である。乃ち之を個娼制に較べると、之を決行するに、關係する所の人數も多數となり、手數も甚だ繁雜である。個娼は自分でやらうと思へば何時でもやれるが、樓娼となると色々の手續を經、又色色の人々の手に掛らなければならず、又お上のお手數をも煩はす。故に之に投ずることは、本人に在つてよくよくの決心がなければ出來る事でない。個娼制の中の公娼、即ち夜娼、亭娼、街娼は幾分お上のお手數は掛るが、併し是等は多くは私娼から成るもので初めからお上の手數を掛けて而して後ちに成立するではなく、勝手次第に私娼を營み、それを後で警察が認めて公娼と爲し、手數を掛けるといふに至るのが、歐洲各國の普通の仕來りとなつて居る。

凡そ右様の次第で、各項目に涉れる得失は洵に顯著である。現今の制限政策に於いて、娼妓制が最も進んで居る。故に之に反對する者は、論旨が極めて朦朧たるか、若くは甚だ徹底せざるものである。其の動機を茲に推測することは必要が無いやうであるが、特定の公娼廢止論者の論旨は別として、一般に我が明治以來の公娼廢止論者といふ連中は、外人の悪口が怖くて、其の誕を樂しんで、即ち彼等の出鱈目に雷同して、文明がハイヤカラがつて此論を爲すに至つたといふことが歴史上の事實である。固より今日の公娼廢止論者が皆な此くの如き陋劣なる心事の持主であると言ふのではないが、論旨の不徹底孟浪杜撰なるは大體前者と伯仲の間に在るやうである。併し何も賣春制度や樓娼制度が人間社會として、理想的で極めて完全なものかと言ふのでは斷じてない。從來あつた所のものの中から各の如く列擧するのであるが、此れより以上更に完全なる制度があり得るや否やは、固より研究の餘地ある問題である。が然し所詮制限政策は社會の必然惡を認め、た以上の事であるから、絶對完全の制限といふものは之を期すること實に困難であると斷定せねばならぬ。

第二章 飲酒及び喫煙

一 古く汎き飲酒の事實

飲酒の社交上に缺くべからざるが如く、認められ、又行はれて居ることは古今東西其揆を一にする。飲酒の習俗は、高等動物以來既に其の芽生を發し、其の嗜好も段々に發達し、之に伴うてその物質的供給も次第に發達し來つて、人類社會となつては極めて汎く且つ盛んに其俗が行はるるやうになつた。

本來野蠻人は己れの欲望を制することが甚だ弱い。故に先づ酒類を飲用することに手が出る、偕て一たび手が出ると、所謂一杯々々又一杯で、酒類を飲用するの結果は直ちに理性を晦まし、意志の力を弱むる。故に彌々用ゐて彌々深味に陥り、延いて生活現象乃至心意現象の或る部分が一時休止するといふ所にまで行かねば止め度がないことになる。所謂始めには人酒を飲み、中頃は酒酒を飲み、終りは

酒、人を飲むといふのがそれである。されば人々が自ら律し自ら制するといふ、強硬なる意志の力を發揮するやうにならぬ限り、飲酒に對しては、他律的に注意を懈るべからざる譯合となつて居る、所謂アルコリズム、飲酒政策の必要は此に存するのである。

我國では、古より、神に捧ぐる所の最も必要な物件として、神酒、即ち酒類がある。支那に於いても、古より郷飲酒の禮といふ事がある程、酒と社交上の關係が舊い。西洋に於いても、亦固より然りである。動物界に於いては、猿酒といふ物がある。酒といふ言葉も無く、名も無くとも、一種の醱酵的の飲料を、猿が自然に拵へて、折々之を飲むといふことは、袖人に依て、夙に知られて居る所の事實である。龜が酒を好むこと、甚しきは法羅貝が酒を飲むといふ童話まで傳はつて居る。そこまでは行かぬにしても、酒類に對する嗜欲は實に動物界に汎く行はるゝといふことは明かなる事實である。斯かる平たい事實から考へても、社會生活殊に社交生活と酒との因縁關係が、洵に絡み合つて深いものあるべきは、極めて明瞭である。然るに、右の如き重要な酒、その酒はそれに伴ふ所の自然的、寧ろ必然的なる短所弊害が

あるといふことが明かになると、茲に相當難しい問題が出て來る、即ち飲酒問題が一つの問題となり、其弊害を減ずるには、否な絶滅するには如何やうなる方法を執るべきか、又若し是が行政政策にまで手数を掛けることとなるに於いて、如何なる政策で此の目的を達すべきか、それが問題となつて來る。

併し飲酒防遏の方法や政策に就いて論評するに先だち、防遏其事を必要と認むるの動機並に程度から究めて行くことが適當であらう。

二 獎勵主義

飲酒防遏と最も距離の大なる考が獎勵主義である。獎勵と云ふは餘りに奇抜に聞ゆるが、確かに或る時代に於いて之が有つた。戰國亂離の時代、明治維新後暫くの間、或る方面、例へば壯士、軍人、書生等の方面、是等には顯著に一種の獎勵主義が行はれた。或る塾の如き、飲酒は必ずせねばならぬといふことになつて居る所もあつた。又或る地方の或る私立學校では學校で遠足をやつて校門に引揚げるときには鏡を抜いて、生徒は必ず之を多少飲まなければならぬこととなつて居つた。

分量に於いては所謂告朔の餼羊ながら、少なくとも神社參拜の際に御神酒を戴き、婦女や子供で一滴も戴けぬ者は額に之を濕すといふが如きも、矢張り一種の獎勵主義である。又野蠻人以來の積極的慣習が既に存する以上、防遏に反對すればそれが直ちに獎勵主義になる。故に獎勵主義といふ言葉は多少奇抜に聞えても、それが事實、必ずしも奇抜なるに非ず、又今日稍々奇抜に聞えても、それに聞えぬ時代や地方や社會があつたといふことを、先づ認めて置かねばならぬ。

獎勵主義は、青年教育及び國民若くは軍隊の志氣の振作の上に、飲酒は無害どころではなく、實に有益であると認むるものである。此類の考を懐く人々は、飲酒を防遏する杯いふことは、醒礙屑々たる小人的女性的の性情を誘ひ致すもので、元氣あり、強大を致す國民を養成する所以でないと言言するものである。此の主義は今日の多數の人々からは、如何にも頑冥固陋なる「東洋流の道德」とでも排斥せらるべき調子を帯びて居るが、併しさう手軽に片付けてしまふべきものではない、それには之を批判するの要點を列舉して分析的に考察するのが適當である。

第一、酒類を飲用することが、果して國民の元氣を振作するやの問題である。酒

類を飲用することが元氣を振作するといふことは確かにあるが、併しそれが一時性のものであるといふことは、醫學上殆ど明確である。さりながら、一時性の元氣振作も、矢張り必要とすべきことがある。例へば健康の變態なる場合、即ち醫師が患者の回復を促すが爲めに一定量の葡萄酒を與ふるの類、又は看護兵が傳染病看護に従事するに當りて一杯のブランデーを與へらるゝの類がある。又特に茲に注意を以て考察せらるべきは、特定社會の特定時代に於いて、若しも様々の形式に社會組織が縛られ、此の束縛を超越して言論し行動するの必要ある場合の如きは、即ち一時性の元氣振作も必要とせらるゝに至るべきである。例へば交遊に於いて肝膽を披瀝し、社交に於いて所謂無禮講の必要を認めらるゝ場合の如きが其例である。社會が虚禮と情實等の或は新しき形式主義、或は舊き形式主義に囚はるる場合には、酒を以て右の形式主義から脱落しなければ、本當の交が出来ぬ、又暫らく酒に托して右の形式を脱却せる眞似をして、或は際どい所まで言論動作を進めるといふことがある、即ち社會が沈滞して窮屈になればなる程、酒の必要が社交生活、社會生活上に進んで來るのである。我が舊幕時代然も幕末の社會は、殊に右の

如き桎梏束縛が無暗と多かつたさういふ社會に處して酒が必要とせられた。其の慣習情性が、我が明治の時代にも及び、明治の時代そのものも、一旦政治上其他に於いて目醒ましき改革、大改革が行はれたけれども、是等の點までは中々容易に改革の機運が及ぶものではないので、矢張所謂麴孽に托して胸中の磊塊を吐くといふが如き習俗が盛んに行はれたものである。歐米の人情は、現今に於いても概して稍々簡明率直で、東洋に於けるとは大分違ふ、此くの如き社會上の理由から飲酒が盛んに行はるといふこと即ち社交的飲酒といふことは、左程猛烈とならずに濟んで居る。但し獨逸の大學生、又學生組合等に於ける、麥酒を呷ることは、歐西に於いては餘程著明なる現象で、酔うて理性を晦ますではないが、社交交遊に對する酒の手傳を盛んに發揮するといふこと、是が先づ西洋社會に於いての最も目醒しき獎勵主義的現象であると見られねばならぬ。之を要するに、飲酒が國民の元氣を振作するは、積極的に非ずして消極的である、常住的に非ずして一時的である、實質的に非ずして形式的である。此の消極的、一時的、形式的ながらも、元氣増進の必要といふものが社會に實存するに於いては、此點よりする獎勵主義も亦た若干の

根據ありと認められねばならぬ。乃ち飲酒獎勵の必要は、若し之を罪すべしとせば、形式的なる束縛桎梏の煩しき社會の罪であると申さねばならぬ。

第二、飲酒の防遏が果して國民の元氣を消耗するやの問題である。若しも飲酒防遏が個人に對して直接に行はるゝに於いては、右に述べたる所と正に相表裏して、彌々倍々社會の形式主義を助長するの弊がある。良い所で所謂小廉曲謹の習氣を誘致して、青年の元氣を挫折する、甚しきに至つては、虚街虚飾表に君子の面を以て、裏では途徹もない裏切的の行爲をやる、所謂巧言令色足恭の徒を作り、外厲にして内在なる之を盜賊に喩ふれば、夫れ猶ほ穿窬の盜の如き、連中が舉世滔々として皆な是なるに至る。話半分であらうけれども、米國に於いて一九一八年以來禁酒法が實行になつた後の逸話として色々傳へらるゝ所に據ると、此の禁酒法の如きは、尊敬すべき米國の市民諸君を化して、右の穿窬の盜とする話が往々傳へられる。海岸より三哩先きは米國に非ずといふので、遊山船に乗つて三哩先きまで海上へ出て其所でヘベレケの宴會を催す、ステッキを携へて居るかと思へば、其のステッキの中にウイスキーが入つて居る、富豪の如きは今後十代の間飲んでも盡き

ない丈けの分量の酒を、大邸宅の大なる窖に貯へて居る、杯いふ逸話が様々傳へらる。併し是は話半分、乃至五十分の一、若くは乃至五百分の一に過ぎないと、我々の尊敬する米國の市民諸君に對して確かに認定したのであるが、併し茲に極めて明確なる一二の事實がある。例へば米國に於ける干葡萄酒の需要が、禁酒法厲行の年に於いて、俄に二億七千二百萬斤殖えた、是は何故かと云ふと、其の方面の技術は、講者はまるで専門違ひで存せぬが、干葡萄酒から葡萄酒が容易に出来るものだからである、而して此の莫大なる干葡萄酒消費の増加數量は、實に葡萄酒密造の爲め用ゐられたと報告せられて居る。是は一九二三年に出版せられたる、講者も推薦を受けて其の會員の一人である所の米國政治學社會學士院年報の「飲酒禁止問題」と題する特別報告書に載つて居る所の事實である。種々斯様な關係が生ずることであるから、飲酒の防遏は、假に主義として、是認せらるべきであるとした所で、其の手段に於いて、三方からも四方からも、十二分に考慮を費して攻究せられなければならぬことは、是等の點からも考ふべき事である。人間が虚言を言ひ、虚偽を行ふことを獎勵する如きことは、飲酒そのものよりも買淫そのものよりも遙に

擯斥すべき惡徳で、而して復た社會の繁榮發達の爲めに最も厭ふべき事であると新たに茲に確言する。凡そ虚偽、虚言、詭辯、虚術、是等は皆な同一の犬の腹から出る所の四ツ兒で、而して社會生活、社交生活、社交性を裏切る所の、正反對なる敵である。即ち社會の土崩瓦解に向つて直ちに急ぐ所の有毒なる武器であることは、今更申すまでもない事柄である。此くの如き馬鹿氣たる防遏政策、杯が行はれ出すと、褒めた事ではないが、一種の反動現象として、獎勵主義が復た復た更に盛返して出て來ぬとも限らぬ。

第三は、飲酒の害毒は、生理的、病理的に、如何なる範圍及び性質に於いて確認せられ得るかの問題である。此の事項は、全く是れ醫學的研究の成績に待つ外のない。固より今日の醫學の成績上、大體に於いて飲酒の害毒の認むべきは確かであるが、微を穿ち幽を闡く今日の諸學科、殊に醫學の發達に較べては、割合に此の問題の範圍並に性質は、未だ明確ならざるものが多いやうである。殊に我々社會研究者から醫學者にお需めしたい事は、飲酒が少年、又は青年、又は壯者に及ぼす特殊の生理的、病理的影響、並に人に依りて醉態の生理的、病理的特殊相を致すの原因、又反酒的

即ち酒が飲めなくなり、又は嫌ひになる原因となり得る所の、飲食物との關係、並にそれを攝取するの效果等に就いてである。是等の諸問題に對して案外に専門科學者は、研究はして居らるゝかも知れぬが、未だ一般に指示を與へて呉れられることが周到でないやうである。洵に遺憾の至りである。偕て凡そ此の生理的病理的害毒が明確となりさへすれば、獎勵主義は、他の點は如何にもあれ、此點から全然其の主張の根柢を覆さるるものとなるのである。然るに醫學的研究の明確動かすべからざる成績を周到に且つ精密に擧ぐることをせずして、又は半ば之を懈つて棚へ上げて、動もすれば精神的、道德的、甚しきは獨斷的、宗教的なる社會風俗論杯に飲酒防遏主義の根柢を托するは、洵に微弱なる論法で、獎勵主義は之に對して容易に逆襲を敢てすることとなるのである。

三 防遏主義

獎勵主義と相ひ對する防遏主義にも様々ある。固より飲酒に對して適當の防遏を加ふるの必要を認むるに於いては一致するけれども、多くの論者の間に、動機

の差異に依て頗る懸離れがある。

第一は宗教的防遏主義である。野蠻人の生活に於いては、飲酒醉狂より來る所の不行跡や惡徳が甚しい所から、慈悲の眼を以て生民を愛する所の原始宗教の聖人達は、大抵社會的初等教育の一つの教として「飲酒する勿れ」といふ事を加へてある。佛教然り。耶蘇教然り。宗教的防遏主義は、宗教上の因襲から、即ち傳統的の仕來りから、獨斷的に飲酒の防遏を爲さうとするものである。如何にも飲酒の弊害は古今其の禍を同じうする。故に此主義は固より相當に尊重されねばならぬが、合理的及び實際的根據を以て、近頃の人心を満足せしむる種子は少しも無い。第二は教育的防遏主義である。是は未だ相當の發達成績には至らぬが、大體飲酒の惡弊を確かに認むる所から、教育で之を防遏しやうとするものであり、其の學理的科學的根柢は尙ほ不十分を免れないが、其の動機も、亦其の手段も、概して穩和である。

第三は科學的防遏主義である。是は主として醫學の成績たる實理を楯とし、特に又生物學や、殊に近頃頭を出し始めた優生學が、聊か達して得たる理論に基づ

き、之を實地に應用して人生の害惡を輕減するの趣旨を以てする所の飲酒防遏の主義である。其の効力の多少は固より科學の實理的成績の完全なると否とに比例するが、學者ともあるべき者が、往々純粹に斯かる科學的根柢に據ることをせずして、宗教的若くは教育的動機を加味する者も往々ある、其の加味が大になればなる程其の權威が段々に減るのである。

第四は經濟的防遏主義である。是は酒を飲むのは損だ、社會經濟若くは個人經濟に關係するといふ理由からの防遏主義である。「下戸の建てたる倉は無い」といふのは途轍もない間違で、酒を飲んで潰された倉が澤山あると云ひ、又日本では今や食糧の爲めに三億七千萬圓の輸入をして居る、米丈けでも年々五六百萬石づつ、足らぬのに、四百萬石を酒に潰すのは勿體ないといふやうな點から、算盤玉の上で酒を止めなければならぬ、といふ論である。所で、近頃之に對して、米を潰さずとも、酒が出来る、といふ、鈴木農學博士等の研究に基づく對案が出るやうになつた。又米は無くとも麥酒は麥で出来る。葡萄酒は葡萄で出来ることは先刻來の事實である。併し之に對しては又、所謂羊を以て牛に代ふるの類、といふ批評も出やう。

社會人心が相當に賢明になれば、どの途、經濟的防遏主義は相當有効なる根據を有すべきものと認めねばならぬ。

第五は財政的防遏主義である。是は飲酒に重税を課して、以て一面には飲酒の風俗を防遏すると同時に、一面にはこれより生ずる社會經濟の損失に對して、國家財政の利得を以て幾分相殺し、補充に充てやうとする所の一種の主義である。是は寧ろ實際主義で、此の兩面を一つ一つ考察すると、如何にも矛盾が甚しいやうに感ぜらるゝが、斯様な一得一失を相殺するといふ主義の上に坐するものとして考察すると、其間何等の矛盾なきのみならず、實は頗る巧妙なる救濟的政策主義と申さねばならぬ。併し矛盾のあることも事實であり、相殺となることも事實であるから、全體としての論評は如何にも甚だ複雑なる一種の政策主義なりと申すの外はない。

四 防遏の努力

偕て、飲酒に對する防遏が良いか悪いかの諸々の見解や、又様々の立脚地は大體

右の五通りに盡きて居る。所で獎勵主義は別に何等の手段や積極的の運動に出でぬが防遏主義に至つては實に種々様々の手段様々の施設種々の機關を以て其の主義の實行に努力して居る。是等を又例に依て重なる類別として擧げて見やう。

第一は個人の教化である。乃ち飲酒の惡習ある個人に對して、宗教或は教育の方面から飲酒の害と惡とを知らしめ、以て飲酒の習癖に遠ざかるを期せしめる。是は所謂風漬しの方法であるが、其の効能は敢て侮るべきものでない。殊に或る特殊の事變が當該個人の身の上に取り來つた機會を利用して、之を説き、又相當賢明なる個人であれば、それを機會に自分から飲酒の惡習を斷然止めるといふが如き例は、割合に屢々出會ふ所の事實である。

第二は組合の警戒である。是は飲酒に反對する組合を設けて、其の組合員たる者は、相戒めて飲酒の習癖に陥らざらんことを期するものである。飲酒は固より個人的習癖であるが、然も社會、社交、風俗、慣習の上にも頗る汎く根ざして居る事であるが故に、個人が如何に決心しても、右等の方面から來る所の飲酒の實行に對し

ては、頗る之に抵抗するの困難なる場合が尠くない、之に對しては斯かる組合の警戒が大に實行を容易にするものである。又道を歩くに掛聲をしながら勵まし合ふやうに、斯かる實行に對しても、組合を以てすることが實行を進めるのに多少好都合なるものである。

第三は團體の飲酒防遏運動である。是は飲酒と闘ふべく團體を作つて、防遏運動に従事するものである。乃ち其の團體に屬する所の人々が相戒めて自ら此の習癖に遠ざかるの外、更に社會一般に對して一種の矯風運動を爲すのである。併し矯風運動としての此種の方策は、其の効が極めて微々たるに止まるが通例である。其譯は、斯かる團體の力を挾んで他人のする事に喙を容るゝやうな行動は、一般の人々から兎角嫌はるゝものである。又斯かる團體は、其の多くは宗教的防遏主義に坐するもので、現代人心を満足せしむるに足る所の實理の根柢が乏しいからである。現代人心は、自律的には頗る思ひ切つた善行を爲すが、假令善事でも、他律的にやることは、業に既に甚だ之を厭ふといふ所まで進んで居る。口に「民本主義」や「自由主義」を唱へながら、現代人心に對して「他律」を以て善行を強ひんとするが

如きは實に笑ふべき自家撞着時代錯誤の甚しきものである。

第四は經濟的取締である。酒類に對して、或は國税を課し、或は地方團體税を賦課する例へば佛蘭西の各自治體に於ける入市税、入町税の如きがそれである。又一面、自家用若くは營業用の醸造業者に醸造税を重く課する、それが延いて飲酒者の財布に及び、飲酒の常習者をして經濟的壓迫の上から制限を蒙らしむる。お銚子の重さを氣にし、お銚子を振つて見て歡ぶといふが飲酒常習者の常癖である。故に或る程度まで、即ち人酒を飲む時期に於いて、此の經濟的取締は、其の限度までは相當の効能のあるものである。殊に一般に現代の生活は頗る世智辛くなつて居るが故に、口舌を以て、甚しきは宗教を振翳し、バタ臭い辯論を以ての防遏運動よりも、經濟的取締は遙に有効なる一方策である。

第五は刑政的取締である。是は飲酒より來る所の風俗の缺點を、警察若くは一般法令に於いて取締るもので、直接に飲酒の防遏とはならぬが、唯だ間接効果はある。併し酒類販賣業者、又飲酒客を對手とする營業者に對する取締が適當なるに於いては、風俗行政の上に寧ろ適切なる一種の政策と褒めて宜しい。此種の營業

者の種類並に數を制限するといふことは實行上相當に容易であるが、併し交通の發達せる今日では、殊に都會生活に在りては、斯かる遣り口の効能は至つて微々たるに止ることが多い。甚しきは國際交通を利用して、國外に出で、其の禁制を逸脱する者すらも生ずるので、米國人が三千哩の大西洋を渡つて歐洲へ酒飲みに出掛けるといふが如き、大規模なる交通利用の脱禁者すらも、比々として之れ有るのである。

第六は酒類の改良である。酒類の品質を改良し、或は酒精分の微弱なる物となし、又或は良質の物と爲し、それで以て飲酒から來る所の生理的害毒を軽減せんとする方策である。或は又代用品を設け、然も代用といふ名稱すらも採らざるに於いては、頗る其の効能は大となり得るのである。然るに、第四の經濟的取締が餘り厳しくなると、之を潜る者が出て參つて一方には密造すると同時に、他の一方には改良どころか、甚だ惡質なる廉價なる酒類を以て飲酒の欲望を充たす者が出來、又之を供給して之を幫助する商人が出て來る。是に於いて經濟的取締が全然裏切らるる所の結果を生ずることに立至るのである。此點から、第四策を用ゐる者

は、必ず第六策を併せて考慮すべき必要が生ずるのである。

第七は時間制限である。以上述べたる各種の方策は、皆な取締の程度を出でざるものであるが、更に進んでは禁遏に近づいた方策が出て来る。其の第一段が即ち時間制限の方策である。例へば歐洲、殊に北部歐洲諸國に於いて最も行はるゝ方策は、土曜日の午後四時より月曜日の午前八時に至る間を以て、酒類販賣禁止の時間と爲して居る。是は、労働者の賃銀を得る勘定日が毎週土曜の夕刻であるから、此の懐の温かな時は、最も濫費に陥り易い時間であるが故に、此の時間を狙うて、此間に於ける禁遏から段々飲酒が減退するやうになることを期するものである。夫婦共稼ぎならば夫婦夫だけならば夫が賃銀を貰つて来る時を狙うて一週に一遍の食卓を賑はし、殊に強請を差控へて居つた所の、子供の着替をも着せ、乃至は一週の間、多少買ひが、りになつた懸けをも拂はうといふので、山の神が三方四方苦慮して居る矢先に、今夜は何で歸りが遅いかと心配して待つて居ると、大事の夫はへべレケに酔うて財布を軽くして歸つて來るといふが如き、悲惨なる弊害丈けは、確かに此の方法で喰ひ止めることが出来る。それが爲めに家庭も和氣霽々とな

り、子供も所謂優境學的關係から來る所の慢性墮落から脱却し、一個の法令に過ぎぬが、洵に其の効能は大なるものと見るべき実績が擧げられて居る。併し單純に、飲酒に對する政策といふ點から考へれば、是はさまで大なる影響のあるものではない。

第八は禁止政策である。即ち社會の全體を擧げて酒類の全種類を禁遏する、名づけて乾燥政策と稱するものが是れである。稀に極めて微少なる酒精含有飲料を、酒といふ名前の外に出して、些かの例外を作ることがある。さりながら此の乾燥政策は、其の名前丈けは如何にも堂々として居るけれども、其實の甚だ擧り難きは、米國近頃の實際が之を語つて餘師ありと申さねばならぬ。序に、酒と稱する物の範圍はどんな物かといふことは、飲酒問題を取扱ふに對して之を明確にするところが適當である。全體酒の種類を分類する標準は二つある、一つは其の含有する酒精の分量、二つには酒精以外に含有する刺戟性藥物の種類及び分量、其の藥物には積極性なる物即ち無毒有益なるものと、消極性なる有毒無益なる物との二種がある。消極性藥物の最も劇しき例はアブサントである。酒精の分量は百分の一

以上に至るときは既に明かに酒類としての反應を最大多數の場合に呈するものである。米國では確か千分の五、即ち百分の半以下の酒精を含有する物を酒と認めぬことになつて居るやうに記憶する百分の一以上酒精の分量の大なるに従ひ愈よ酒らしき酒となり、且つ其の弊害の大なるべきは明かである。刺戟性藥物は各種無數にして枚擧に遑あらずであるが、單に有毒無毒の問題のみならず、分量も亦た大切である。

第九に酒精作用を緩和することに依りて、飲酒の効果を減せんとする方策がある。瑞典のゲーテベルグで創められたるゲーテベルグ式飲酒店と稱するものが即ち是れである。是れには、元ストックホルム警視總監ルーベンソン氏が最も其の發達に與かつて力があつた。其法は、一定量の酒を飲むが爲めには、必ず一定量の食品を攝ることを條件とする。ストックホルム市に於ける此式の特別飲食店の數でも、既に數十に上り、衛生風紀の設備、料理等の經濟的設備を完全にして、廉價にして品格ある料理店たるの外、節酒運動の方策として相當の効果を擧げつゝある。併し凡そ此類の商賣に對する特許的關係から、監督上至大の注意を拂ふで

なければ、動もすれば矯風革俗、正人義士的事業が流れて、錙銖の利を趁ふ所の市井の賈人的事業に陥る弊が無いとも限らぬ。左様になると、此の事業の權威と品位とに關し隨て此の事業の發達を阻害することとなる。且我國の農家に於ける濁酒醸造並に飲用が期せずして既に此の主義の精神を完全に實現せる良風美俗であつたことは、ハイカラ學者や論客に特に注意を要求するの價值がある。此くの如き事に何等氣が付かず、澤山の國財を糜して西洋下り^{くだ}りまで出掛けて、下らぬ事有難がる所の官僚や學者の習氣は、飲酒よりも先に早く止めたいものである。

第十に飲酒に年齢の制限を附することに依つて其の惡果を減せんとする方策である。我が現行で二十歳以下の青年男女には酒類飲用を禁止してゐる事が其の一例である。子供は兎角大人の眞似をしたがる。大人のシルクハットを被つて見たがるは、獨逸皇帝ウイヘルム二世の皇子達に限らない。今や更に二十五歳以下をも制限しやうとするの論が出て居るが、眞似から來る詰らぬ習癖を根絶するが上に、多少の自覺、自制から來る制限主義の實現として、意義が幾分複雑となつて來るが、強ひて反對するにも及ばぬ議論である。

五 煙草喫用

喫煙は煙草と阿片との二品を含む。此の二品は、或る所までは共通に取扱はれてよいが、其以上は大分嚴密に區別せられねばならぬ。

煙草の喫用に對しての防止運動は、未成年者に對するそれがあるわけである。成人に對しては、從來宗教者流の間に幾分熱烈なる防止運動があつたが、今日では何人も眞面目に之を主張する者は無い。所で、科學的立場からすると、生理衛生上の利害得失に關しては、判斷が多端であり且つ區々であつて、全體利益か、害毒か、其の總勘定の上で、プラス、マイナスを決定することが容易でない。兎も角も、過度の喫用丈けは宜しくなからうといふので、其の弊害を防止するに對しては、飲酒に對する例の經濟的取締並に酒類の改良に類似する所の方策丈けが、幾分行はれんとしつつある。即ち課税に依る煙草價格鈞上げと、煙草製造の業を官營にし、若くは公けの機關の監督の下に置いて、其の質が悪性でなくなるやうにする、即ち害毒の點に於いての悪性が精々減せらるゝやうに圖ることに依て、幾分煙草喫煙に對す

る方策又は政策が行はれて居る。

少年に對する煙草喫煙に關しては、其の利益は殆ど認められず、其の害を認むることが段々普通となりつつある。殊に煙草に對して右の如き經濟政策財政政策が、次第に何れの國でも實行せらるゝといふことに擴まつて來ると、煙草喫用の經濟的損失が他の有益なる費途に對する比較上頗る重く且つ大なる故に、少年の煙草喫用を防止する策を講ずることは決して迂愚の沙汰ではない、併し之を實行するに法令や刑政で取締るのがよいかといふことの可否は、容易に斷定は出來ない。今日に至るまでの成績に依ると、其の煩累に失ふ所が、取締の成績の得る所に過ぎるといふ事實がある。されば煙草喫用は、今日尙ほ殆ど放任主義に置かれてあると申して宜しい。

併しそれならば此上何も下すべき手が無いかと云ふと、從來の禁煙論者杯の氣の付かぬ點で、一、必ず申添へなければならぬ事がある。

第一は煙草の喫用に火を用ふるといふ點である。昔は火を蓄へることが頗る困難であつたが爲めに、我が日本の農村生活に於いては、爐の片隅に糶糠一升を持

つて来て、毎夜火種を添へて之を活けて眠に就く、それが翌朝の炊爨の火種となる、といふことが汎く行はれた。又燧道具といふ物が、一家に於いては極めて大切な物として尊重せられた。然るに煙草喫用は、田圃に出掛けるにしても、必ず右の燧道具を持參する、即ち一寸一服といふ場合には、煙草入に附隨して居る燧道具に依て、燧石と燧金とを打ち合せ、之に「火口」と云ふ綿様の物を添へて火を移し、是に依て煙草を吸付けて喫用するといふことが常であつた。此の火を製造する物を携へるといふことは、人間生活に取つて甚だ尊重すべき物件、殆ど神聖なる物件を携帶するといふことであるのである。其昔、日本武尊が東夷征討に御下りになつた際にも、神聖なる天祖大神に齋きまつりつゝ、あられたる、叔母君倭姬命から、餞として、燧袋を御携帶になつたればこそ、燒津に於いて賊徒を逆襲なされ、草薙劍の威徳を御發揮になることも出来た次第である。故に煙草喫用は、右の場合に於いては、火を携帶するといふ神聖なる行事に對する、一種の景物、若くは慰勞、若くは役得とも謂ふべき状態に於いて在つたのである。然るに、今日は、煙草と火との關係は、まるで是と反對の方に陥つて、煙草よりして、火災を起す例が頻々として、毎日の新聞

に現はれて來る、次第である。飲酒には固より幾多の點に於いて害悪があるが、飲酒に比して、煙草の有する所の害悪は、此の火との關係に於いて、在ると申さねばならぬ。

第二には煙草は、四、六時中之を用ゐるが普通である、殊に我國に於いては煙草喫用者に對して時を制限することも極めて薄く、處を制限することも極めて狭い。飲酒も、其の惡癖の増長せる人となると、朝から之に耽る者も往々見受けるが、大體飲酒は食事の時に附隨するに限ることが一般の仕來りとなつて居る。然るに、煙草は斯かる制限拘束が無い。又飲酒は食卓に向うて之を攝ることが普通となつて居るが、煙草は食卓可なり、然らざる何れの場所に於いても、攝らんと欲すれば之を攝るに甚だ困難なることはない。飲酒に就いても、普通の汽車の客車内に於いて、平氣で飲酒をする人も稀にはあるが、是は相客の目を惹くけれども、普通の客車内に於ける喫煙は、何人も之を怪しむ者が無い、電車の中で飲酒する人は殆ど之を見受けぬが、喫煙は屢々之を見受ける。東京の市街電車等に在つて、吊革にブラ下つて居る洋服客の如きは、其の込合ふ所の相客の煙草の火に依て、我が着用のマン

トに穴を明けらるることが屢々ある。此くの如き無作法が飲酒にも増して喫煙の方に多くあるといふことは、第二に擧げられねばならぬ點である。

併し第三に、喫煙の飲酒に對する長所は、右飲酒に對する第七防遏政策、即ち北歐諸國に行はるる時間制限の實際に就いて語れるが如く、家庭に及ぼす弊害といふことが殆ど全く之れ無しと斷定して宜しい事である。飲酒よりして家を破り身を傷ふ者が比々として之れ有るに對し、喫煙は、直接に酒に費す代價と比較すれば、一ケ年に積つて、或は代價は大であるかも知れぬが、喫煙の爲めに身を滅ぼし家を破るといふまでになることは、殆ど之れ無しと斷定して宜しいのである。宗教家を首め、所謂社會の矯風運動に従事する人々の熱心が、飲酒に比しては、喫煙に對して甚だ淡薄であるやうに感ぜられるのは、主として是に因るものと謂はねばならぬ。

故に喫煙に對しては、禁煙の何のと騒立てるには及ばぬが、作法の問題として、喫煙作法といふものを今少しく厲行するといふ丈けの注文を附けて置けば、社會生活、社交生活の上では澤山であると申して宜しい。其の注文はどの點に在るか

云へば、先づ多人數寄り集る所では或る程度まで喫煙を遠慮するといふこと、殊に小さな室である所の汽車若くは電車等に於いては、我國でも既に「煙草は御遠慮下さい」といふ貼出しをせる電車もある通り、客室の多い列車等に於いては「喫煙車」といふものを特に設けて、喫煙者は必ず之に乗ることを要する、其代り其所が非常に混んでも、それは喫煙者の自業自得と諦めて貰ふ、一般には喫煙せざるを原則として、喫煙する人を特別扱にして、喫煙車を設けるといふことを速に厲行して貰ひたいのである。食堂車はあるが、其外に飲酒する人に對しても、喫煙列車ならば飲酒しても宜しいといふことにするのにも一策かも知れぬ。即ち特定の喫煙車に非ざる限りは、喫煙並に飲酒は禁ずるといふことが適當であらうと思はれる。殊に火の用心の點に就いては最も嚴肅なる禁令條件を加へなければならぬ。是が煙草の酒に對する最大の弱點として有する所である。帝國ホテルの火災も、給仕人の喫煙から來たといふ噂があり、最近警視廳の調査でも、昨昭和五年中管内の火災原因は、煙草が第二位で、百分の三十以上に上つたといふこと、其他喫煙と火災との關係は實に比々として之ある次第である。是等一二の點に對する注意を勵行す

るならば煙草といふ特定喫煙は別段大騒ぎをすべき程の事ではない。

六 阿片喫用

阿片喫用に至つては、薬用として醫師の處方に依る服用の外、其の有害なることは明々白白であるが故に、之を防止するに全力を用ふべきは、是れ實に確定の政策事項とすべきである。

其の方法は、先づ第一に物資供給の杜絶である。それには、一方に輸入を杜絶し、一方には内國生産を取締らねばならぬ。而して此の二つの方法は孰れも實行に容易である。但し薬用阿片だけは、公けの機關の手に之を獨占して、一定の手續の下に之を醫藥業者に配付するを要する。

第二には喫用を禁遏することである。それには、一方に喫用犯行者を處罰し、他の一方には喫用介助者を處罰し且つ取締ることである。喫用犯行者は必ずしも現行でなくともよい、即ち醫師の檢診上明確に犯行者たることを證明し得る者は、皆な此の處罰の中に入れてよい、故に之を賣春の取締に較べると、法令が空文に化

するといふ弊は極めて尠い。次に犯行介助者の重なる者は、阿片の販賣者若しくは贈與者並に仲介者である。其他藥種商、食物商、殊に酒亭や茶亭の類にして、容易にお客に阿片を提供し得る者に對しては、犯行の介助を未然に取締ることが是れ最も必要な方策である。

第三に既成習慣者の救治が大切である。例へば我が臺灣の土民に於けるが如く、阿片の喫用が久しい間の習慣となつて居る者に對しては、一朝にして、其の多年の習慣を絶對に禁遏することをすると、却て其の健康を減却する虞がある。之に對して限地主義、限時主義及び限量主義の三條件の下に之を救治することが適當である。限地主義は、阿片の喫用に對して、一定の地域に於てすることを條件として之を許す、故に本人が若し遠方に旅行せんとするときは、阿片及び喫用器具を携帯することを許さず、そこで阿片に離れることが出來ぬならば、旅行の自由を犠牲に供せねばならぬ、故に此法丈けでも阿片喫用惡癖を撲滅するには餘程手傳となる。限時主義は、其の惡癖の浸潤の程度に應じて、醫師の診斷に基づいて、今後何ヶ年を限つてといふことにして喫用を許可するのである。其間に本人が次第々々

に喫用の量を減らして、自分でも何年後には此の悪習を撲滅するといふ心掛けが必要である。若しも此の期限の後に至るまで尙ほ此の習癖を幾分残存し、爲に爾後の斷然たる絶對禁遏に依て健康の激變を生ずることがあつても、本人が其責に任せなければならぬ。限量主義は、公けの機關から阿片を交付する以上、交付の分量を制限することが容易であるのを利用して、此人には是丈けの分量を限つて交付するといふことにするのである。若しも公けの機關以外に私に阿片を供給する者は、犯行介助罪を以て之を論ずる。斯様にして此の方面から喫用の分量を他律的に次第々々に減じ行つて、一定時期の終りに於いて習慣が良くなり、最早阿片は喫用せずとも宜しいといふに至らしむる方策である。

大凡そ阿片喫用といふことは、一人一個の場合には格別大騒ぎをして其の弊を言ふに足らぬ。謂はば一種の不養生に過ぎないが、それが社會の風俗となり、慣習と化するに於いて、實に弊毒言ふに堪へざるものがある。斯るが故に、其の禍の大ならざるに及び、其の弊の公けに露れざるに於いて、禍の源を塞ぐといふ趣旨に於いて、嚴密な行政的考慮を費すべきものである。輓近、國際聯盟關係の萬國會議に於いて阿片會議が開かれた、兎角萬國會議流行の茶番狂言は、今此所で批評の限りにあらずとするも、如何にも阿片の問題は、或る程度までは國際的に其の取締をするを要する一種の問題たるには相違ないのである。

第三章 頹敗俗

一 夜更し

頹敗俗に就て、先づ第一に夜更し俗を述べる。

所謂文化生活が進むと夜更しが之に伴うて増進する。其の行き道は、第一に都會に人口集中が激しく行はれ、人々の受ける刺戟が増進して、彌々倍々強大なる刺戟でなければ、刺戟の感じが薄いといふやうに感受性が鈍くなり、そこで晝の娛樂は此の欲求を満足するに不適當となる爲めに、夜更しの俗が増長する。第二には生活難の爲めに終日勞役に服し、然も歡樂を求め、情が彌々昂まること。第三に娛樂の種類が倍々増加し、其等は主に夜に行はれるものが多いこと。第四に男女共同で行ふべき娛樂に夜の方が便利であること、例へば舞踏、音樂、歌留多遊び、其他總て女は己れの家を離れ、男は己れの家を忘れて逸樂に耽るに、夜更しが都合の好

いこと。是等の爲めに、此の惡俗が益々進行しつゝある。

夜更しの必然の結果として、朝寢が來る、それで晝が短縮し、經濟生活にも道德生活にも惡影響を及ぼす。又心理的には懶惰、神經衰弱が來、隨つて激昂性が増進する。是が現代文明の文化生活に於ける、文化人、尖端人の極めて顯著なる特色である。電車の中で無暗に居睡をしたり、一寸した事に非常に激し易くなる。我國の近い事實に見ても、新聞杯で所謂新人等が使ふ所の新しい言葉には、無暗に猛烈なる過激なる言葉が盛んになつて來て居る。平和主義といふことを口癖に言ひながら「戦」とか「奮闘」とか「戦線」「戦術」杯いふことが無暗矢鱈に使はれ、一寸した何か意見の相違といふ場合に、直ぐ「何々戦闘」「家庭争議」杯いふ猛烈なる然り、彼等の主義理想とは矛盾する血塗れの不穩な言葉が、尋常茶飯の事として、矢鱈に使はれて居るといふが如きは、是れ如何に現代の文化生活、殊に其の尖端を行く新人等の頭腦や精神や、心理が、半病的に薄弱になり、頹敗しつゝあるかの明徴である。生理的弊害として、夜更しは兎角、食物を濫りにすること、並に疲勞といふことを致し、社會的弊害としては申すまでもなく、淫風の増進を促す。

斯くの如き諸々の弊害に對して、若干之を匡救する方策としては、一には夜間に開業する酒屋茶屋劇場踊場等の時間を制限すること、二つには街頭の瓦斯を消す時刻を早目に切上げるやう制限すること、三つには市街鐵道等の運轉時刻を制限すること、四つには一定の時刻以後運轉する所の市街車輛の課税を重くし、且一面には市街掃除の時刻を早くすることである。歐米の發達せる都會では、毎朝暗い中に必ず市街掃除をやる。東京では晝間水撒をやるが市街掃除は如何なる規則の下に勵行されつゝあるかは、講者は迂濶にして未だ存知せぬ。此の市街掃除をやつて居る所を通ると、最早翌朝になつたといふ感じがする。大抵是は午前三四時あたりに行はれる。更に五つには、毎度言ふことであるが、學校や官衙や工場等の早起を獎勵することである。學校の事は嚮にも述べたが、役所が朝早く始めぬといふことは、殊に我國に於ける惡い仕來りの一つである。それには因縁があるので、一つには矢鱈に宴會がある所、で宴會は多く、節制が乏しい故に、割合に役人達に夜更しが多い、それで朝寢坊が多くなる。二つには役所が遅く始まるのに附込んで、節制なき自宅訪問者が役人に對して、毎朝押掛ける、相當程度以上の役人、甚し

きは課長級邊りまでが、朝、相當遅刻することを何とも思はぬといふ惡習が我國の役所にある。それも怠ける爲めではなく、自分の所管事務に關聯する訪問客があつたからと言譯が立つやうになつて居る爲めに、次第々々に朝の出勤が後れる。そこで因襲の餘、相當の役人は餘り朝早く登應せぬものといふやうになり、早く登應するのは下級の役人らしくて、品の惡いものゝやうに考へて來たといふやうな、途轍もない妙な風習が生ずるのである。

夜更しは實に民族頹敗、文明頹敗の極めて顯著なる一つの徴候である。

二 離家生活

世間、遠心生活、一名離家生活とも云ふべき事が、頹敗俗の第二に數へられねばならぬ。其の手續は、一つは私園、即ち銘々の家々に小さいながら庭を備へて居つた生活が、殊に大都會生活には逆も持ち切れなくなつて、其代りとして公園が出来る、即ち私園より公園に移ること。二つには用談が茶屋待合、又はカフェーに移り、事務を是まで自宅でしたものが、事務所に移ること。自宅に居る時は自宅氣分であ

るが、事務所に居る時は事務所氣分で大に事務が捗り、且つ氣分の轉換で頭が鮮かになるといふ利益は確かにあり、又用談が茶屋等に移るのも事務處理の一種の進歩ではあるが、日本では東京をはじめ西洋のカフェーの如き簡易なる設備がまだ殆ど出來て居らぬ以上、却て用談に色々の肉が着き、花が咲いて、無益に生活を複雑化するといふ弊害は免れない。三つには家庭團欒の食事から飲食店での喫餐に移ること。四つには娛樂が家庭のから世間のに移ること。家庭の娛樂は一つは人格の制限といふ範囲内で行はれるから、どうしても比較的清白であり、又幾分か經濟的であり、更に又家族の人々の殆ど總てに共通することが出来るから、一般的幸福と和氣とに補ひがある。然るにそれが廢れて世間的娛樂を主とするやうになることは、甚だ芽出たくない事である。

そこで之を反省し、矯正するには、どんな事が實行せらるべきであるか。一つには不健全なる世間的娛樂施設を制限することである。其の方法手續としては、或は禁止、或は不認可、或は課税、殊に間接税即ち入場税をば、其の弊害の輕重に従うて、或は軽く、或は重く課すること。二つには必要以外の飲食店營業の制限を斷行する

こと。全體田舎に較べて都會に飲食店の數多いこと、又甚だ遺憾なるは、西洋に較べて我國の例へば東京邊りに飲食店の多いことは實に驚くべきばかりである。東京は、餓鬼の集合市ではないかと訝かられるのである。

三 風呂

羅馬は風呂で亡びたといふ諺さへある。式亭三馬が輕妙なる江戸晩期の文學作品を物した中に、『浮世風呂』『浮世床』杯がある。我々日本人は神代の昔から非常に清潔を旨とし、今日でも神に奉ずるに褌と襦とがある、其の褌が我が身體を清潔に淨潔にする神聖なる儀式である。「褌ぞ夏のしるしなりける」で、其の方面から發達した我國の家庭に於ける浴室、又世間に於ける浴場は、寧ろ我が國風の誇りの一つに數ふべきであるが、それでも矢張り小規模ながら羅馬流の風呂の弊害が出て來て居る。今日温泉旅館から普通の旅館に至るまで、必要なる衣類として提供せらるゝ丹前といふものが、其の最も明白なる名残りである。即ち浴場そのものが風俗上の如何はしい場所、而して其の位置が江戸の神田で丹後守某の邸前にあ

つたといふ所から、其の浴後の寛いだ衣類として提供されるものに下されたる名稱が、即ち此の丹前といふものである。明治の或る時代に至るまでも、相當此類の浴場が所々にあつたやうに傳へられて居る。

羅馬の二千前の遺跡として、「カラカラの浴殿」といふのがある。勿論今日は殆ど柱といふものも無く、贅澤なる象眼の敷石が残つて居るに過ぎないが、數千人の浴客が毎日朝から晩まで之に集り、風呂氣分でしたらなき生活をし、勿論男女共に集り來る場所では、さなきだに征服民族は、經濟的にも遊んで暮らせる、人の目には幸福で、神の目には慘めなる生活——今の歐西にも頗る見られる——を營み、精神並に身體の兩面に張りといふものが全く無くなり、隨つて風俗も極端に墮落し、即ち羅馬帝國の根基を腐蝕せるものは此の風呂であるといふことにまで相成つた。羅馬は貧の爲めに衰へずして富の爲めに衰へた、羅馬の滅亡は人口減衰の爲めである、と近代史家の定論になつたことであるが、之が爲めには此の風呂といふものが頗る力強く働いて居るのである。其の設備には混浴風呂といふ大きな浴池、寧ろ浴湖があり、その外に、個人的のシャンプル・セバレー式隔離浴室は、往々安樂往生の

自殺室ともなつた。斯くの如く爛れ切つた頹敗的羅馬人は、自殺に於いても安樂に往生することを考へた、それは上膊邊りの動脈を銳利なる剃刀で切り、次第々々に貧血して往生する方法である。唯だでも此の貧血自殺は氣持よく眠るやうな氣分のものださうであるが、殊に熱からず温からざる風呂に浸つて之をやるのは最上の安樂往生だといふことで、所謂羅馬の貴顯紳士は、奴隸をして此の剃刀を行使せしめ、風呂の中で往生することが大流行であつたといふ言傳へすらある。

我國では幸に斯様な大規模惡規模の風呂も無く、又風呂其物は右の如く洵に立派なる趣旨から發達した我が良風美俗の設備であるが、唯だ一つ杞憂の種は、我國が世界にも稀なる豊富なる溫泉國である點で、萬一是から頹敗俗が進み進んで底止する所を知らざるやうな場合が來るとすれば、此の溫泉がカラカラの湯に悪用されぬとも限らぬ。殊に近頃鐵道省で觀光局杯が出來て、旅の耻は搔捨ての外國旅人を澤山招き入れやうとするに至つては、我が國人は清淨潔白でも搔捨外人から飛んでもない風俗上の惡質微菌を何時溫泉場へ撒かれまいとも限るまい。既に東京から餘り遠からぬ外人で繁昌する或る溫泉地杯では、隨分風俗上如何はし

い游戲に托した途轍もない事柄が行はれることは、最早相當年數も古いことであるのである。是が所謂霜を履んで堅氷到るである。

四 避妊・墮胎・殺兒

例の避妊、アヴォイダンス、又はコントラセプション、墮胎、アボルション、並に殺兒、インフアンチサイドの悪俗は、或は淫風に關聯し、或は經濟上の生活難に關聯し、又或は迷信に關聯して、實は文野東西古今を問はず極めて汎く行はれる。

加之所謂文化生活が進むと其の方法が益々精妙に赴き、先づ殺兒が減り、尋いで墮胎も段々減つて、其等の減つた分よりも遙に以上に避妊が盛んに行はれる、それには機械的、藥劑的、並に施術的の三通りがある。故に此の悪俗を退治する方策は、一つは機械商、護謨商、並に化學商を取締り、二つには醫師の取締の方面に當らねばならぬ。

更に墮胎にも自爲と幫助との二通りがあり、此の各々に又機械的と藥劑的との二通りがある。墮胎の取締は、幫助者たる醫師、産婆、特殊施術者を取締るの方法が

甚だ困難であり、殊に藥劑的墮胎に對する化學商の取締は、寧ろ避妊よりも困難である。

殺兒俗で、間引といふ事が昔は汎く行はれた之に對する刑罰に依る取締は容易であるが、それにも尙ほ死産と殺兒との間に紛はしい事が多い、乃ち私生兒又は淫行の結果に死産が多いのである。

凡そ是等は、表面は「文化生活の進歩」と號せられるが、實は民族社會の頹敗の道筋に於いて必然なる滅亡を迎への火の車である。

五 宗教悪俗

右等の悪俗にも、時として宗教が言譯に使はれる、如何にも頹敗俗の考察には、宗教悪俗を見通す譯に行かぬ。

宗教悪俗の第一類は、宗教行事の風俗關係である。お籠りと稱する如何はしい事で、若しも「宗教」といふ二字を抜きにしたら、假令極めて寛裕なる警察官でも決して見通すことないやうな事が「宗教」の二字の下に平氣で行はれて居る。それが嵩

じて來ると、露西亞の革命前、帝政の末年に於ける、ラスプーチンの、七人風呂杯になる。妖僧ラスプーチンは、皇后もそれに加はつたかどうかは暫く言ふことを遠慮するとして、少くも最高の女官ビルボヴァ夫人を首めとして、やんごとなき六人の宮中婦人を對手にして一緒に風呂に入る、それが、彼れの「宗教上」と稱する重大行事であつたのである。

宗教行事には極めて屢々催眠性の行事が伴ふ、彼れ妖僧ラスプーチンも催眠術の達人であつた。我國でも奈良朝の玄昉道鏡等は、何れも相當の催眠術者であつたと云はれる。宗教關係者とは限らぬが、一般に催眠術といふものは面白いものであり、或る効能のあるものには相違ないが、その取締は風俗上非常に大切な事である。それを例の「宗教」といふ社會風俗上の治外法權としてのさばつて矢鱈にやられては堪つたものでない。加之右の例にも見ゆるやうに、宗教者は概して多少催眠術上の曲者である、是れ亦宗教行事の風俗關係上見遁すべからざる所である。固より宗教は人間生活に藥のやうに大切なものである、假令食物のやうに日常缺くべからざるものでないにしても、一たび病に罹つたり怪我をした時には所謂

切ない時の神頼みで、切ない時は神が必要である。即ち宗教が必要である。其の大切な宗教に從事する人々に、或は禮を缺くやうなことを諄々しく言ふには及ばぬから、此話は是丈けに止めて置く。

第二類は迷信である。近き數年來、丙午生れのお嬢さん達が、婚期に達し、且つ婚期が今や將に後れんとして居るといふ所から、大分迷信に對する一般の反感寧ろ反省が進んで來たことは、非常に慶ぶべき、所謂禍を轉じて福と作した社會現象の一つである。隨分宗教上の迷信から、優生的反價值事實若くは行爲が、様々の方面に且つ屢々行はれて居る。一つ二つだけ舉げて見るならば、先づ醫藥忌避といふ事が極めて屢々又手廣く行はれる。或る佛だか神だか、半神半佛のやうなものを信心して眼科醫を忌避する。甚しきは半神半佛の境内に於ける汚水を目の藥として、頻りに是で目を洗ひ、若くは點眼するといふ猛烈な例さへある。これには古來宣傳劇が色々あつた「壺坂」で澤市の眼が明き、昭和の今日、今月の東京劇場にさへ、新作として木村富子作「盲人」が上演され、猿追ひ座頭與の市が、藥師如來の御來光で眼が明くといふ次第である。又精神病者を、狐憑と云ふ事は、單に宗教から來るの

ではなく、寧ろ一般の民俗的事項であるが、一派の宗徒になると、之に對して患者から狐さへ驅出せばよいといふので、或は患者を松葉燻しに掛ける、又は漫々と水の湛えたる池の中へ叩き込み、其上に竹竿で殴り付ける、それで患者の身體に潜んで居る狐が堪らずに逃出すと考へ、甚しきは親が精神病者である場合にも、孝行をすむつもりで、親を右のやうに虐待する、孝子抔すらある。斯様な類は別に専門家に依て幾多集められたる記述があるから、此位で大體を諒解するに澤山であらう。凡そ宗教、惡俗は、亦是れ優生的反價値の大なるものであるから、之に對する反省並に風俗改良が大切である。

六 政治惡俗

次には、殊に輓近に於いては、政治惡俗も亦擧げられねばならぬ。輓近の政治は、國政、地方政治、乃至自治體の政治に至るまで、殆ど常に選舉といふ事が伴はぬものはない、輓近の政治は、選舉政治であると云うても殆ど差支へ無い、偕て其の選舉が風俗に及ぼす影響、隨つて選舉の優生的價値、反價値は、大に注意攻究を値ひする

事である。

是は決して我が日本の現状のみに就てではなく、殆ど選舉政治をやる所の世界各國に於いて皆同様、若くは更に激しく行はるゝ所の弊害であり、それが爲めに近年既に議會政治の危機といふスロガンが盛んに論議せられるに至つて居る。先づ其の一つとして御馳走政策が選舉には殆ど附物である。大は國會議員の選舉から、中は府縣會議員の選舉、小は市町村會議員の選舉、更に各種の方面では水利組合の委員の選舉、所得稅調査委員の選舉等、等に至るまで、凡そ選舉と云へば、殆ど必ず常に御馳走政策が伴はないものは無い。故に例へば選舉が一たびあると、是まで飲食店の一軒しか無かつた農村にも、直ちに四五軒も殖えて來る。如何はしい酌婦が居らなかつた村落にも、忽ち四五人の増加を見るといふ實狀が、彼地にも此地にも見受けられる。我が社會で宴會の不規律、不節制といふ事に屢々觸れたが、是も亦此の選舉の御馳走政策に關係する所が頗る大である、この兩者の化合で農村其他の風俗を攪亂する事が決して閑却すべからざる程度に在る。又斯くの如き特殊設備を通じてするに限らず、反對候補に對する有力なる應援者、運動者等を、

所謂罐詰にする爲めに御馳走政策が行はれ、又味方の投票者を或は要撃し、或は檢閲する爲めに御馳走政策が行はれる。縣會議員の選舉に時の内閣の旨を希ふ所の地方官衙から、巧妙なる暗命を受ける所の農村駐在巡査は、反對黨に屬する議員候補の運動者の事務所を頻りに「何か變つた事がないか」と平生の懇意を利用して佛面ほまけつらで訪問する、此の訪問がある爲めに、何等御馳走政策をやる機會が無くなる。然るに政府黨の候補者の爲めの事務所に對しては、何等斯様な心切なる訪問をせぬ、仍て此所では選舉投票の行はれる二三日前から、連日連夜即ち酒を飲む要撃が行はれて居る。而して投票をした戻りにも亦其所へ投票者は立寄つて一杯飲んで檢閲を受けて行く、是で與黨候補者の爲めの特定農村選舉事務所は、どれだけの投票が入つたといふことがチャンと判るのである。又どちらにしやうかと思ふフラフラ腰の投票者を、二三日前からの要撃馳走で、充分此方のものと捉へてしまふことも出来るといふ状態。凡そ御馳走政策は、數へ上げれば管に斯くの如きに止らず、實に徹底して行はれるといふ状態である。

こゝまで述べ來ると、御馳走は單に御馳走に止らず、如何にも選舉が一度行はれ

る毎に、人間は嘘を言ふことが平氣になり、國法といふものも洵に好い加減なものであるといふ、國法に對する一般人民の尊敬が減り、様々の方面に風俗の頹敗を導きつゝあるといふことに就て、思半ばに過ぐべきである。

選舉に伴うて一つの最も重大なる事を茲に更めて述べねばならぬ、それは賄賂の奨勵といふ事である。全體所謂選舉に於ける腐敗コルラプションといふことは、單に一杯飲ませるといふが如き軽い程度のもではなく、所謂買収の盛んに行はれるといふ點である、即ち賄賂公行といふ事であるのである。古來東洋でも西洋でも、政治には殆ど常に賄賂が附物で、西郷南洲の如き大局的政治家も、大局に着眼すればする程、賄賂が政治を腐蝕する根柢的微菌であることを痛論せざるを得なかつた。南洲の「賄賂」と題する一篇の論文は實に堂々たる大文字で、其の書き出しは「國衰へ民窮するは國家の大患にして」といふことから始つて居るが、實に是程恐ろしい政治の結核病は無いのである。然るに決して單に我國と云はず、中外各國、世界各國に於いて、賄賂の最も大袈裟に、大びらに行はれる、所謂鐵砲打つと我國では卑俗の言葉で申すが、賄賂の小銃射撃演習は、選舉に於いて極めて練達リッパの域に達せられる。賄

賂を使つたり、賄賂を貰つたりすることが斯くの如く大びらに行はれる、其の機會を提供する所の選舉は、國會は解散が無くば四年に一度、縣會も四年に一度、市町村會も四年に一度であるから、少くも陸軍の機動演習が行はれるやうに、平均毎年一度づゝ我が國民は賄賂の小銃射撃の演習を、全國の津々浦々に至るまで、残る限なく實行することになつた。そこで賄賂に對する正邪善惡の判斷力、杯は、我國に縣會が出来て殆ど茲に五十餘年、國會が出来て既に四十餘年といふ今日、可なり徹底的に麻痺せるものとなつたのである。かるが故に外國から我身を買はれ、而して身の代金を受取つて甘んじて賣國的行爲をやるといふことも、今日の日本人には案外お茶の子さいさいになつて居るかも知れない。斯くの如き大なる價を拂うてやらなければ、立憲政治は出来ぬのであるか、又斯くの如き大なる價を拂うてやるの價値が立憲政治、殊に議會政治といふものにあるのであるか、といふ根本問題までに行かずとも、獨り日本と云はず、世界に於ける各國に於いて、議會政治の危機の叫びが強くなつて居るといふことは、如何にも政治、惡俗の、恐るべき標本として、見通す譯に行かぬ事柄である。是は直接優生的事實と關係するではないが、

勿論幾多の間接關係を及ぼす所であることは確實である。

七 經濟惡俗

更に宗教惡俗、政治惡俗と並べて、經濟惡俗が擧げられねばならぬ。それは奢侈を中堅とし、過儉を後陣とし、萬引及び射倖を左右の先鋒とする、一連系統の惡俗である。

奢侈に就ての研究は、經濟學者あたりでは中々難かしい問題として居る。其のややこしい議論は總てこゝでは抜きにして、全體奢侈は人が不知不識陥る所の弊である。個人は個人で慎しみ、社會は社會で用心して、常に之を抑制し、之を防遏するに努めるでなければ、奢侈の弊風は忽ち洪水の如く社會に漲り、到るものである。所で從來奢侈を防ぐ政策は幾多試みられて居るが、其の主なるものを列擧すると、第一は禁止政策で、例の水野越前守所謂水越の禁止令杯が其の適例である。其の極めて少い効能が、然もホンの一時に止つたことは顯著なる事實である。第二は防止政策で、其の一つに秩序政策がある。例へば社會各種の階級に應じて格式を

定め、其の格式に應じて一定の用品以外を禁ずるといふことを、法令や慣習で嚴密に規定する。徳川時代には中央から地方田舎の果てに至るまで、大體是れで相當に奢侈の勢が防がれて居つた。其譯は、其の内容が多く具體的なる物品に關係し、之を用ゐると直ぐに世間一般の目に觸れ易いからであつた。所謂社會階級の固定せる社會では、此の方策が最も行はれ易かつたが、此の固定並に世襲といふことが段段寛いで來た時代に於いては、殆ど之を頼ることが出來ない。第三は經濟政策で、奢侈品に過大の課税を賦課し、損得の判斷の鋭敏なる者には、逆も奢侈品杯は使へないといふやうに仕向ける政策である。但し奢侈品中の奢侈品とも云ふべき例へば寶石品杯になると、錢の高いといふことが奢侈品使用者の目的であるから、五千圓のダイヤが従價十割の關稅で一萬圓になると、五千圓の時よりも更に之が矢鱈に使はれるといふことにもなる。十數年前、三越の有力なる店員の談話に、婦人の高級丸帯は西陣で精々百五十圓の實價が關の山である、馬鹿氣た金銀珠玉を鑲めるやうなことをせぬ限りは——併しもつと高いのが欲しいといふ要求に應せんが爲めに、ちよいとした技巧を施して、或は三百圓、或は五百圓といふ賣價を

付けるものだといふことを耳に挿んだ覚えがあるが、大體そんなものであらう。故に經濟政策も餘程品物に應じて、デリケートな注意を施さなければ、火災に對する細雨のやうに、却て火焰を煽り立てることもある。第四は教育政策である、是は以上、他律的政策と異にして、人間の心から自律的に奢侈を防止せんとする方策である。其の小別けの一つの言説主義、即ち言葉で奢侈が如何に惡い事であるかといふことを、宗教家や教育家がよく言ふのであるが、是は殆ど何等の効能が無い。今一つの實地主義は、家庭や學校等で實地上の制限を衣食住其他日用品等に加へて、相戒めて此の限度を超えないやうにするもので、是は頗る合理的であるが、家庭と學校と世間、此の三つが相協和して進むことは甚だ困難で、兎角破綻を生じ易い。抑も奢侈の心理は、自己満足には相違ないが、自己の快樂の増進よりも、他人に見せびらかすといふ、即ち他人の評判を通しての自己満足が、九分である。昔の諺にも「錦を着て夜行くが如し」で、美服を纏ふことに依る直接の快感は一分で、人から見て貰はなければ満足が九分減り、即ち十分の一になる。故に人間の密集生活、又社交の頻繁なる生活が行はれる都會生活ほど、人が見得坊になる、隨て奢侈心理が昂

ぶつて來る。三四年前の新聞種に、立派なお嬢さんが電車に乗つて電車の故障に遭うた、車掌は怪我や迷惑をかけた御詫を、殊に此の令嬢に慇懃に述べ、御詫に罷り出たいからとて宿所をお聞かせ願ひたいと言ふに對し、イヤ決して其には及びませんとの辭退にも拘らず、強ひて翌日出掛けて驚いた。見すばらしい露地の粗末なる長屋で、硝子越しに見ると大肌ぬぎで何かバクついて居る、昨日高貴の物品を納めて居ると睨んだ立派な袋が、辨當を半分はみ出して轉がつて居る、即ち正に是れ何所かの小工場に通勤の若い婦人を、田舎の尺度で測つた爲めに大の見損ひをした地方出の車掌君の大失策物語——種々の意味で今日の社會相を語つて居る。偕て奢侈の裏面には過儉がある、即ち儉吝に過ぎたる私生活が殆ど必ず伴ふ、故に過儉は奢侈の戰鬥力を補給する、兵站部である。更に奢侈を欲して而して其の欲望の飽和せられざる場合、例へば電氣の陰陽二極が中間に不良導體に妨げられて、遂に火花を散らす、其の火花に該當するのが萬引である。萬引は資本なしの火花であるが、幾分か資本を入れた火花が射倅である。國法の制限規定、隨て道徳上から見れば射倅にも罪の深いのと罪の浅いのと様々の種類がある、其の最も深い

ものは即ち賭博である。各種の投機は之に較べて段段罪の浅いものである。凡そ是等に關して、現代の社會では多少の方策を講じて此の弊風を止めやうとして居る。其の一つは禁止政策で、總て法令を以て富籤、競馬、賭博を禁絶し、更に之を徹底せんが爲めには、勸業債券割増金附の籤引、空米相場、乃至株式の定期賣買の如きまでをも、一網に打盡するを要するといふ論理的結果になる。併し之を實行することは難事であるのみならず、産業發達の刺戟を奪ひ去つて、産業界の沈滞を惹起すといふ弊害をも喚起す、そこで茲に歩み合が必要になつて來る。株式定期取引の限、月短縮、競馬に對して賭博的性質を最小限にするやうに綿密なる注意をする。唯だ普通の賭博だけは絶対に猛烈なる監督をして、富籤や競馬に對して餘り注意せぬといふことでは、政策の徹底は期せられぬ。第二には又制限政策がある、賭博は禁止、競馬には重税を課し、富籤は一定の過重なる條件と嚴密なる監督との下に之を許し、取引所の如きは特定法規の下に之を許容する。其の制限の遣り方にも、亦限地主義と限時主義とがある。賭博を禁じても人間は何所かで賭博をやつるものだといふ譯から、歐羅巴全體としてモンテカルロ、オスタン、ルツェルン

といふやうに、國際的賭博公許所がある。是は恰も賣春制度に於ける吉原、洲崎の類で、即ち限地主義の賭博公許である。射倖といふことに深入りするのが人情の必至的傾向であるから、一寸の間も之に向つて絆を弛めてはならぬ。

以上述べたる種々の類敗俗は、直接若くは間接、程度の深淺、範圍の廣狹は様々であるが、何れも優生的價值、殊に多くの反價値を伴ひ易いものであることを綱領として注意せねばならぬ。

第四章 戦争

一 戦争の優生問題

社會生活の最も大規模なるは人類世界、即ち列國對峙の儘に於ける列國相互の間、所謂國際生活のそれである。國際生活に於いて最も顯著なる事實の一つとして戦争がある。戦争は人間社會の遠い昔からあつた。社會生活が未だ國家生活乃至國際生活といふやうな大規模でなかつた時から既にあつた。即ち部落と部落との間の戦争、乃至部落内に於ける人々の鬭争、是等も皆な初等なる、小規模なる戦争現象と見るべきものであつた。併し現代生活に於いては、戦争は國內に於けるものは寧ろ變例で、國際戦争が其の常例のものと見らるるに至つた。而して一般に此の戦争といふものの優生學的價値の正負如何といふ事が、從來可なり論せられた所である。此の小著に於いては、此の問題を見通す事は一つの怠慢となる。

二 戦争の起因

戦争は種々の原因から起つて来る。

第一は人種的戦争で、人種を異にする諸々の民族共が對立するといふ事實と、何れの民族もが有する所の人種的感情とから起つて来る。

第二は宗教的戦争で、戦争を尊尙する宗教の存立する事實、假令戦争を尊尙しやうがしまいが、大小各種の宗教共が對立するといふ事實に、宗教に固有なる排他性が加はつて起るのである。

第三は政治的戦争で、一つには統治權の爭奪並に移轉、二つには植民地の獨立、三つには國際覇權の獲得、四つには第三國の制馭、五つには敵國征服、總て是等を成遂げんが爲めに起るのである。

第四は經濟的戦争で、一つには其國が生活物資に甚だ不足して居る事、又は格別不足はないが、戦争が一番物資を獲得する捷徑だといふ、恰も泥棒の心理にさも似たる考から、總て物資を掠め取り、又は強奪する事、二つには人間を俘虜として獲得

し、又は土地其他の不動産を獲得せんが爲めにする事、三つには領土の擴張、四つには對手國をして港を開かしめ、市場を開かしめ、對手國に或る物資を賣込む専商權を取り、又は資本を投下する放資權を取る爲めに、若しくは政治的に優勢の立場を取る、所謂勢力範圍を開始する爲め等、種々の經濟的特權を獲得せんとするから起るのである。

更に第五は文化的戦争である。一つに教化、又は經濟、又は政治の諸々の制度、其中で例へば風俗慣習や國語を我れより對手國に弘めやうとし、又二つには思想を宣傳し、又は我れの有する徳教、即ち道德主義と、對手國のそれとの對立衝突から惹起されるのである。

以上各種の事柄が色々に複雑に入り混つて、戦争の具體的原因となり、其中には世の中が進むに伴れて段々薄くなるものもあるが、其の總てが無くなる事は、將來も決してあり得ない。原因が無くならぬ以上、結果たる戦争は熄まぬものである。然らば戦争は熄まぬものであるとして、それを放任して宜しいかと云へば、假令熄まぬものであるとしても、惡いものならば之を熄めるべく努力せねばならぬ。

努力しても熄まないまでも努力すれば幾分か減るといふ事になる。「戦争は悪いものだ」と、テンから吟味を要せぬものとして掛る事が現代人の癖であるが、是は洵に輕卒なる沙汰である。さて戦争は善い事か悪い事かといふ事を斷定するには、戦争の効果を審にせなければならぬ。戦争の効果が悪い事ばかりであるならば戦争は悪い事である、若しも又善い事ばかりであるならば戦争は善い事である。善い効果もあれば悪い効果もあるとなれば、戦争は輕々しく善い又は悪いと斷定は出来ない。兎も角も戦争の効果を審に調べる必要である。

三 戦争の有形的效果

戦争は、生理、人口、智能、道德、政治、及び經濟の六方面に向つて、種々の良効をも悪果をも及ぼす。其中初めの二つ即ち生理及び人口の二方面は有形身體生活の方面で、其餘の四つは無形にして稍々精神的なる方面である、仍て戦争の効果を右の方面上の二大別に纏めて述べやう。

戦争の有形效果の先づ第一に悪い方面は、

生理上には兵營生活と様々の病症との關係である。兵營生活殊に海兵の生活には、兎角或る數種の特種病症が伴ひ易いものである。海兵の上陸に關する衛生上の問題は、海軍醫務の局に當る人、殊に其の司令を掌る將官に取つて、平時に於ける極めて重要な頭痛の種となつて居る。陸上の兵營生活に於いても、亦此類の事が頗る屢々且つ深刻に見らるゝ所で、嘗て佛國其他に於いて下士の營内居住といふ事が頗る研究せられ、又或る程度まで實施された事もあつた。併し是は下士の範圍に止つて、兵の範圍には依然として幾多の問題が残るのである。是等の細かなる點は、之を現代の醫務關係者即ち醫學の實際家の中でも、特に軍隊醫務に深き經驗のある専門家に譲つて、こゝでは唯だ是丈の項目を掲げるに止めて置く。人口上には何人も常識を以て直ちに看取る所の第一が、戦死を以てする人口上の大損失である。第二は戦争に依て惹起さるゝ所の病死に因る人口上の損失である。戦争に依て惹起さるる病氣は、殊に傳染病を最も恐るべきものと做し、而して是は單に兵役に従ふ所の戦士又は軍夫の範圍に止らず、是に依て一般社會民人にも傳染の範圍を擴め、爲に人口の意外の損失を來たす事が屢々ある。近時に至

つては軍隊衛生、乃至所謂野戰衛生も非常に進歩して、斯くの如き事は稍々減じて來たけれども、一たび注意を懈り、絆を弛めるならば、クリミア戰爭、又我が西南戰爭の如き慘澹たる病害を起す事は、瞬く間に來るものと覺悟せねばならぬ。

更に生理と人口との間の子の位置に在る損失は、廢兵の問題である、即ち戰爭に依る負傷から、生命を絶つまででなくとも、生理上には到底回復すべからざる深刻なる損害を來たす點である。凡そ是等の惡果が戰爭に依て何時までも社會の創痍として残り、又は残ると認められ、眞に残る所から、先づ以て、戰爭に對する厭惡の情が湧き來るのである。

併しながら又此の方面にも、戰爭の良効もある事を見通しては、公平なる科學的判斷とは云へぬ。

先づ生理上には、一つには、大凡そ戰爭に依て亡失する者は最劣弱者であり、又殘存する者は最優强者であり、其の中間に位する者は亡失も、殘存する。而して此の中間に位する者は、亡失者と殘存者の最大部分である所から、此の亡失と殘存とに依る社會的淘汰の效果は、餘り大袈裟には言はれぬが、兎に角右に述べただけの

事は明確に斷定出來るのである。土耳其人が偉大なる體格の持主である事に對して其の説明としては、常に土耳其人が祖先以來世の所謂好戰民族であつたといふ事が擧げられる。二つには、又戰後の婚姻に由る所の生理的進歩が著しい事である。戰爭の後に於ける婚姻から來る所の出生は、甚だ其の子供の健康的條件がある。立派であるといふ事が、古來乃至近代に至るまで顯著なる事實として現れて居る。三つには、軍事教練に依る所の生理的改良進歩は、固より極めて手近なる事實である。四つには、競技運動に依る所の生理的發達は、是れ亦極めて手近にして、今日に於いては殆ど聊か高調せられ過ぎて居る所の生理發達の事實である。

人口上には、戰後の婚姻に依る質の進歩、即ち生理的進歩があるのみならず、更に量の發達、即ち戰爭の後、殊に激戰の爲めに多大の戰死者を出したやうな戰爭であればある程、戰後の人口回復が甚だ敏速である。此の事實は野蠻時代の戰爭から開明の今日に至るまで、極めて顯著なる歸納的眞實で、近く我が日露戰爭の後に於いても、爾後六ヶ年後に於ける學齡兒童が俄に其數を増した爲めに、全國各地の小學校の教室及び設備等に、急激なる擴張を必要とするといふ事實があつた。世

界戰亂の最中、獨逸は特に一種の人為的方法を設けて、人口の損失を急速に補充する、人為生殖とも云ふべき方法をも執つたが、斯様なる方法を執らなくとも、全體又本來、戰後殊に世界戰亂の如き大戰争の後には、人口回復が案外敏速に行はるゝ事を、古今の事實とし、原則とするのである。又二つには、人口が特定社會に取つて過多繁殖とも云ふべき若干の問題となる場合に、恰も戰争が一種の調節作用を効果すること、餘り歓迎すべき事實ではないが、戰争の人口上の効果としては、見遁す事の出來ぬ事柄である。

斯くの如き戰争の有形的良効は、之を大觀すると、戰争の爲めに人口が減つて困るといふことを餘り高調が出來ないことになり、世界といふ大きな舞臺、人類といふ全體に就て見ると、戰争からは最優強民族國民が残存する事になる。一寸森の中へ入つて、枯枝が年々出たり、秋になると落葉が徑を埋めるといふ事を見て、急に此森はもう枯れてしまひ、此山は禿山になるのではないかと杞憂を懷く、それが恰も戰争の生理上並に人口上の惡果だけで氣を揉む所の氣の弱い連中の態度で、山林は依然として蒼鬱とし、年々歳々山相が良くなると見透しをつけて、適當に山林

經營をする者に該當するのが、生理上人口上に於ける戰争の良効の認識者である。

四 スポーツ

茲に右戰争の有形良効の一つに數へたるスポーツ、所謂競技運動に關して更に特に一言を添へる事が優生學と社會生活との關係を考察する上に、相當以上の價値があると信ずる。

全體軍事訓練に依る生理上の發達は、直接なるもので、競技運動に依るそれは戰争の間接なる作用である。抑も競技運動は、其の殆ど大部分は軍事訓練から來たもので、嘗て戰闘技術、即ち武技として、極めて大切なる、或る意味に於いては神聖なるものとして尊重せられ、鍛鍊せられたものが、世の中の進歩に伴れて段々後れたる武技として役に立たず、廢絶せらるゝに至つたものが、競技運動の殆ど全體であるのである。例へば我國の武士の事を弓矢執つての武士と云ひ、弓矢八幡といふやうな神聖化せられたる言葉すらもあつた。然るに今日、戰闘技術の大發達、又戰略の大なる進歩から、最早弓矢の如きは實戰上の實用武器として價値を失ひ、射術

の如きは何等實用的武技としては役に立たなくなつた。それで弓は何處に残存するかといふと、女學校等の運動場の隅に於いて、一種面白い競技として残つて居る。所で其の弓術といふものが生理上に良効を及ぼすことは申すまでもない。で、輒近の我國に於ける女學生の體格の發達には、弓に負ふ所甚だ大であり、又單に體格のみならず、精神的修養の上にも大なる効能を發揮しつつある。弓は一例に過ぎないが、劍道、柔道だけは、流石に今日と雖も相當以上の實用的價値を有つて居る。

ズツと飛んで、野蠻時代には極めて有効であつたものが、今日にはまるツきり顧みられない所の古い武技。今日のスポーツの例を更に舉げると、曲亭馬琴の「椿説弓張月」に八丁礮の喜平次といふものがある。確か喜平次の祖先は朝鮮人であつたと思ふが、明治十五年并に十七年の事變や、乃至近頃でも、朝鮮の同胞諸君は非常に石投の名人で、百發百中、且つ遠距離に力強く働き、唯一つの礮を以て、人を打殺すことも稀れならざる程度に達して居る。古代は石投といふことは非常に大切な武技であつた。今日と雖も無論之を無用とすべき理由は少しも無い。併し既に

鐵砲といふものが今日の如く發達して來ると、石投の比較的價値は甚しく低減して居る。然るに此の投げ方を利用したスポーツが色々ある中に、其の最も現今に人氣ある競技として發達して居るのが、ベースボールである。併しベースボールをいくら稽古した所が、之を戰鬥上の價値から見ると、到底朝鮮同胞諸君の石投の百分の一の價値も無い。乃ち古代の武技が世の發達の爲めに、全然廢用に陥つたものの名残りが、えらい人氣のあるスポーツに化して居ることの一例である。

野蠻人は姑く措くも、希臘人あたりで隨分或る程度の實用もしたと傳へられる所の圓板がある。野蠻人は圓板を投げる、其縁が薄くなつて居つて、是がクルクル廻りながら飛んで行くと、物理學上の斜面に當る、相當の切れ味を呈し、丁度首にでも中れば首が飛ぶ。此の圓板の中る所が圓周の全部でなく、半分でもよいといふことになる。圓板が半圓板になる、武器としては縁が大切だといふことになる。圓板が袈裟の輪になり、半圓板は袈裟の輪の半分になる。斯様に曲つた恰好の武器は、今日世界各地の野蠻人が可なり汎く使つて居る武器で、それに柄を附けると日本刀の反のある刀になる。然るに今日日本刀は別として、こんな武器は人類學

博物館へ行かなければ見る譯に行かぬが、さういふ博物館を有つて居るやうなえらい發達せる大學の學生が、スポーツとしては矢張り板投げをやつて居る。東京帝國大學の所謂御殿から其の目の下の運動場を瞰ると、ツイ六月二十六日に薨去せられたる當時の山川大學總長が顔を擧めて、危険だと危ながつて居られた容子が、今も目の先きに見ゆるやうである。

ハンマー、鎗投げ、等等、凡そ此類を一々舉げれば際限もないが、大體斯様の次第で、競技運動が今日國民殊に青年男女の生理的改良進歩の爲めに大層尊尙せられ、獎勵せらるゝといふことは、即ち間接に戦争に對してお禮を申しつゝあることになるので、軍隊へ入つて來た爲めに身體が丈夫になり、又體形が立派になつたことは、直接なる戦争に對する感謝である。競技運動に對する熱中は現今の世相の隨一で、新聞杯は二頁も三頁も割いて、殊に秋の今頃になると、神宮外苑に於ける慶應早稻田の試合、日米の試合、ラヂオは吠ゆるが如く毎日の午後、市内の喧まじさを増し、ラヂオのある店には可なり忙しうな自轉車に乗つた商店の小僧さんを首めとし、脊廣に中折を冠つた商店員めきた諸君に至るまでも、二十人三十人店先き

に集つて、右のラヂオの吠える聲を命懸けの熱心を以て聽いて居る。是等は皆な間接に戦争に對してお禮を申し、戦争神社に對して賽錢を投げつつある、明確なる事實であるのである。

是丈けを申せばそれで済むやうであるが、茲に一つ講者としては、例の聊か超越的、根本的基礎的なる實地經綸の一端を披瀝して置きたい。今日の世界に於いては、國に依り、又社會階級に依り、腹が減つて困る國民もあれば、腹が満ちて困る國民もある。腹が満ちて困る上層階級もあれば、腹が減つて困る下層階級もある。全體スポーツ杯いふ贅澤品は、如何にも右の如き生理上の改良進歩をするといふ大効能はあるにしても、腹が満ちて困る連中のやる仕事である、腹が減つて困る連中は、そんな事をする手間で稼ぐがよいのである。且つスポーツをやつた所で、身體は良くなることは良くなるにしても、効能は唯だそれだけである。然るに身體も良くなると同時に、社會の發達、經濟の進歩を促すやうな所謂生産的なる労働をする方が、原則としては更に賢明なる腹のこなし方であることは申すまでもない。スポーツを嚴禁し、體操科を全廢せよとまで主張する譯ではないが、例へば中學生に

運動をさせる代りに——小學校の通學區域が無暗に延びることは丸で考へないといふ程度の無茶苦茶に陥らぬ限り——教場に於ける頭の疲れを品川邊りの埋立工事に中學生を驅り出してそれを請負うてやつたならば、私立學校も今少し設備を改良したり、良い教員を優遇して教授能率を昂止することも出来るのである。何か藝人のやうに各大學がお抱のスポーツ選手杯を拵へて、彼の人の子を賊うて剩へ木戸錢の問題で學校騒動が持上がる杯いふ鄙しい事に陥らすとも、間接の利益として學校の資本金も出來て行かうといふものである。然るに今日上の好む所下、是より甚しきものありで、農村邊りの小學校杯にまで折角の良田美圃を潰して廣大なる所謂グラウンドといふものを拵へ、人力車夫が車を挽くことを怠つて、駟つこをしたり、百姓が此處で遊び戯れたり、又都會でも、新宿驛の軌道と軌道との間に五六十坪許りの空地があると、其處で驛夫がキャチボールをやつたり、日本橋や銀座の真中で十八九になる店員共が鞠投をやつて、九つになる女の兒の目を潰した杯といふ新聞種まで出來る。全體日本人は第一に腹が滿て困つて居るのか、腹が減つて困つて居るのか、滿て困つて居るならば赤字杯は苦にせねがよい。第

二に運動は運動生産は生産といふことで、日本が貧乏だといふことを零すことは、根柢から甚しき矛盾である。

但し體操やスポーツは何も絶対に効能が無いといふ譯ではない。恰も一例を婦人に取つて之を云へば、健康といふ外に閑雅といふことも欲しい、仍て踊を稽古し、茶の湯を稽古し、小笠原を稽古するといふことも必要である。體操やスポーツの如きは、茶の湯や小笠原の類と見たら決して買被りになる氣遣はない。人間は横に廣くて背が低く、巖丈造りであれば、それで大體用は足りるが、中には、脚のやうな人間も必要である。例へば英吉利や亞米利加の連中と相伍して何かやらうといふ場合には、少し位、細くても、脚のやうにヒョロヒョロと長い方が利益な場合が随分多い。嘗て矢野龍溪翁が西洋に遊んで、『周遊雜記』を著された中に、自分は英吉利人に較べると丁度首だけ脊が低い、其爲めに頗る不利益であつたと書いてある。ジュネーブに於ける施肇基といふ漢は、相當の脚紳士であるかは知らぬが、芳澤謙吉君は中肉中脊のゆつたりした日本紳士であるけれども、脚には少し長さが足りない。馬にも競馬用の馬、荷物運搬の駄馬、又戦争をする軍馬の中には、騎兵用

の騎馬もあれば、輻重兵用の馬もある。各々其の目的に應じて、人間も身體の恰好が様々あらうので、女にも娼婦型の女、主婦型の女と顯著なる大別があるやうに、日本人悉くが牛のやうにならなければならぬといふ譯もなく、偶まには競馬式の間、牛型の人間、英吉利の黒いズボンに赤いジャケットを着て辨慶擬ひの兜巾式帽子を戴き、三越のメツセンジャー・ボーイのやうな姿で細いステッキを持ち、ハイドパークを日曜日に逍遙する、といふ恰好の人間も少しは入用があらうので、斯様な者を拵へる爲めには、單にスポーツだけでは可かぬ、更に夜になつたらダンスでも稽古させて、婀娜にさせることも必要であらう。

五 戦争の無形的效果

優生學と云ふと、一寸單純なる醫學の應用學のやうに誤解され易く、生理上、高々の所で人口上の着目點で、御話が濟むやうに考へられ易いが、實は人間はパンのみで生きるものでないといふ程に、身體の方面と精神の方面とは極めて密に相ひ關するものである。「健康なる精神は健康なる身體に宿る」と云ふと同時に、健康なる

身體は健康なる精神に導かれると云はぬと、真理の全幅ではない。所詮、人といふものは身體のみでもなければ、精神のみでもない、此の兩面を具足するに於いて始めて人である。隨て人の進歩改良は、身體の進歩改良であると同時に、精神の進歩改良でなければならぬ。戦争の良効惡果の吟味も、有形効果を吟味する外に、無形効果をも吟味するでなければ、優生學的考察として完全とは云はれない。

無形方面に於ける戦争の惡果は、
第一、道徳上には、一つに戦争を定業とする階級の發生及び其の存續から來る所の道徳的短所である。武士といふ階級が出來ることは、其の當初發生發達の時代には頻りに謳歌せられるけれども、之が階級となると、結局徳川末期に於ける旗本を首めとして、日本全國各藩の大多數に於ける武士共の大多數が陥つたやうな名實相副はざるより、更に降つて相反するまでに至る、鼻持のならぬ短所が澤山出て來るものである。二つには戦争の濟んだ後に於ける反動的な道徳弛緩である。戦敗國民に於いても此事はあるが、殊に戦勝國民も、戦争の後ち暫くの間は極めて顯著に此の現象を露はすものと定つて居る。赫々たる戦績を擧げた普佛戦後の

獨逸の如きは、實に此の奢侈放漫が餘りに顯著で、佛蘭西は三ヶ年賦で五十億法の償金を獨逸へ拂つたが、五ヶ年賦で悉く之を取返したとまで言はれて居るのは、質朴なる田舎漢に似たる獨逸が、戦後に於いて奢侈品の大供給者たる佛蘭西から、散々贅澤品を買入れたといふ事實を巧みに申した言葉である。三つには戦敗國民、殊に甚しく屈辱を蒙つた者の、道徳的墮落である。人間の心理に於ける弾力には一定の程度があるもので、是は護謨やバネと同じ事である。此の弾力限界を超えての戦敗屈辱を取ると、仕様のない卑劣なる者となる。現在でも斯くの如き國民があるが、禮を重んじて講者は茲に實例を擧げることが略する。四つには軍事に關する事は秘密を要し、之に聯關して軍隊の經理は秘密を尙ふ事が多い。總て暗い所には黴菌が蔓延し易い、軍隊の秘密經理からも若干の病害が来る。五つには兵營生活の道徳的表裏である、是は我國に於いては殆ど見られぬ事であるが、外國に於いては屢々見らるる事で、我が翻譯的赤化思想杯は矢鱈に之を翻譯して來て、我が兵營生活に於ける人心を攪亂せんとするけれども、立木で鼻液を拭むやうに、却て冷笑を以て彈斥せられて居る所である。

第二に政治の方面に於いては、戦争若くは其の繼續から來る所の惡果は、武斷的臭味に由る政治の初等化である。

第三に經濟上には、一つに夥しい戦費を要すること、二つに戦争とまで至らざる平時の軍事費に國家の費用の少からざる部分を費すこと、三つには國債が多くは戦争に依て著しく量を増すこと、四つには軍事に供用する土地建物等の不動産が中々大きな額に上ること、五つに各兵士が小遣として消費する金高も中々重大なる程度に達すること、六つには養兵の費用が軍事上の進歩に應じて年一年と高くなつて來ること、七つには産業組織が複雑になればなる程、戦時の動員から經濟界が感ずる苦痛が増大すること、此事は國が農業者の多數なるより、商工業者の多數になるに移り行くに従つて激しくなるのである、八つには戰場となる地方の不動産又は動産の損害である。

然るに是等無形の方面にも亦戦争の良効が大にある。

第一、道徳上には、一つに武的團結が發生し又發達し、之に伴うて極めて麗はしき、又眞面目にして深く且つ厚い武的友情が發生し、且つ發達することである。山陽

が薩摩の美風に就て歌うた「十八結交健兒社」といふが如きが其の一例で、此類の事柄は社會生活の重要な根柢の一つである所の社交性の發達に對し、一種の儀表を供するとまでに、單に其等の人々の仲間止らず、社會一般に對する重要な事柄である。演劇に、又古きは能に「會我物語」が非常に大なる劇的價値を以て日本國民の深奥なる感情を唆ることは、單に仇討といふのみならず、一人の仇討でなく、會我兄弟の仇討、此の兄弟の情が加はる所に劇的、生命が豊富、且つ、強烈に存して居るのである。二つには温順、自制、修養、訓練、義務心、献身的犠牲的精神、廉恥心及び名譽心等の諸々の貴き徳が發達すること。三つには嚮にも述べた武的儀表階級の道德的長所である。教育者や修身講話者が武士道を無暗に偉いものにする、無暗はいけないが偉いことは偉いに相違ない、必ずしも桃中軒雲右衛門を待つを要せぬのである。四つには平和が餘り永く續くと、恰も三伏の時節に連日晴天で、遂に埃は立ち、草木は萎ひ、鬱陶しい状態となり、社會が沈滞汚濁の状態となる、此の場合に所謂大旱の雲霓で夕立が來、沛然たる驟雨、連日の鬱陶しさを一掃するが如く、社會は忽ち清潔となり、蘇るといふ仕事に依て致されることである。

第二に政治。上には、凡そ大國の建造は、殆ど常に戦争といふ手續を経由せぬものは無い。大國でなくとも國を固め做すといふことの爲には、戦争を経ないものは兎角固くない、眞面目でないといふ弊害を伴ひ易い。革命以後の新土耳其は、革命だけでは殆ど失敗であつた、併し一九二一年から二三年に至るまで希臘と戦争をした、勿論世界戦亂のズツと後の事である。是で土耳其の國民が精神的に覺醒をして眞面目になり、而してケマル・パシヤといふ偉人の指導に依て、立派なる生氣溢したる新しき面目に於ける新土耳其が出來たのである。支那の青年政治家諸君は、國を愛する點、勃々たる雄心——それが個人的であるか社會的であるかは別として——を有せらるゝ點に於いては、實に我國の老朽政治家をして顔色なからしむるに足るものがあるけれども、未だ曾て土耳其に於ける希臘戦争すらをもされて居らぬ。清朝の末年、日清戦役で、一時大なる國民的蘇生があつた。土耳其はアングラに都を遷したに應じて、支那も南京に都を遷して居る。土耳其が王政を廢したに應じて、支那に夙に帝政を廢して居る。併しながら唯だ右の一點に土耳其と支那とが非常の違ひがある。加之、支那に於ける何人も争ふべからざる中央の

大勢力即ち土耳其に於けるケマル・パシヤ其人が蓋し支那にもあるであらうが、之を顯揚して押しも押されぬ支那の超高級偉大なる政治家となつて居るものが一人も見えて居らぬ。蔣介石君が少し許り偉らさうに見えた所で、逆も逆も土耳其に於けるケマル・パシヤだけの地位にはなつて居らぬ。ケマル・パシヤは右の如き國家的大功を樹てたが、支那のケマル・パシヤ候補者諸君はあべこべに、絶好の時機が到來しても、外國にばかり頼り縋り、國際聯盟の草履を掴んで、之を以てケマル・パシヤにならうとするやうでは、實に虎を畫いて猫に類するではなく、猫を畫いて鼠に類すると云ふの外にない。畫くならば、せめて虎か獅子を目的とするでなく、何時まで経つたら支那が一體固まるか。假りに日本が馬鹿やよいいになり、支那の目星の圖に當つてメタメタになつて了うたと假定すると、其次に來る局面は、此の草履を掴む連中が草履を掴ませる連中に依て踏み潰されるといふこととで落ちになるだけの話である。支那の少壯有爲なる青年政治家諸君が、今少しく土耳其を學ぶに徹底せられんことを隣國の陳い教授、幾多の有爲なる青年支那人諸君を教育した經驗のある老教授として、此の一言を呈する次第である。

第三には經濟上の方面、是は何等戰爭に良効が無ささうに見ゆるが、併し是にも亦大なる良効がある。其の一つは交通が、戰爭に依て急速且つ大規模に發達することである。露西亞が波羅的艦隊を對馬海峽まで捨てに來たことは、捨てるといふことが人をして今更露西亞の大國なるを認めしむるほどの愚舉であると同時に、兎も角も三十八隻から成立つ大艦隊を、リバウから歐羅巴を半周又は四分の三周して、或は紅海より、或は阿弗利加の西大西洋を周つて赤道を二たび横ぎり、遂に北緯三十四五度に在る、極東の對馬海峽まで持つて來たといふ、交通上の一種の偉蹟を遺しただけは買つてやらなければならぬ。一四五三年の五月の末、君斯丹丁堡を土耳其人が攻落した時には、軍艦を陸上へ運んで東羅馬帝國の首府の背面に出で、之が遂に此の大國を滅した重要な戦略となつて居る。ケマル・パシヤと支那の青年政治家諸君のやうに、成敗は正に相反して居るけれども、波羅的艦隊の東航は、四百五十年前の土耳其人の仕事と、歴史上の双壁と見てよいのである。舊い事を申せば、二千二百餘年前、歷山が印度まで攻めて行つたのは、それより又更に五十年前、波斯が希臘を一と潰しに潰すべく二百萬の大軍を率ゐて希臘に攻入つ

た、其時に拵へた所の道路を逆に行つたものたるに過ぎない。我が周到なる參謀本部すらも、日露戦争に於いて露西亞が彼丈けの軍隊を、唯だ一線の西伯利鐵道に由つて極東に大兵を送らうとは思はなかつた、是には聊かの誤算があつたと傳へられる。併し是は我が參謀本部の誤算ではなく、露西亞の努力が實に驚くべき程度にまで成功したのである。彼等は軍隊を輸送する客車を、歐羅巴まで戻つて來るには及ばぬ、送るだけ送つたら直ぐ壞して焚物たきものにしてしまへといふ程度に、極端に輸送力を發揮し、約そ四十五分毎に一列車を送つた時期さへあつたと傳へられる。波斯の來た道を逆に歴山が行くやうに、大正六年に我國の西伯利出兵は亦之を逆用するといふ恰好になつて居る。餘り人は知らないが、日露戦役最中に、印度から西藏の中腹を突く所の四間幅の軍用道路が、英吉利のヤングハズバンド佐の力に依て出來て居る。凡そ交通の急速且つ大規模なる發達は、戦争の經濟上の良効の一つである。

經濟上の良効の二つは、産業的努力の極端なる緊張並に發達を致させる、理窟は抜きにして、我が明治天皇が日露戦役の際の御製の一つに

兒等は皆ないくさの庭に出てはてて

翁やひとり山田守るらん

如何にも我國は百二十萬の大兵(軍夫も合せて)を動かしたからに、農村は殆ど老人だけが留守をして居るといふ状態であつた。是からすると明治三十七八年は、非常なる不作でなければならぬ、然るに何等其事が無かつたといふことは、實に此の一大社會的の原則である所の、産業的努力の緊張發展の賜である。中には月の夜に隣人の田畑に、献身的に手入を手傳つてやつたといふやうな美談すらも比々として聞えて居る。日露戦役の尊い經驗の結果、我が農民諸子は、始めて「今まではまだ努力が足らなかつた」と氣付き、悟つたのである。斯くの如き例は、獨り農業に限らず、世界戦亂に於ける獨逸の商工業的努力の猛烈であつたことは、流石に獨逸人自らも、自分等の民族が斯の程度まで彈力ある民族であるかを、今始めて知つたといふ状態にまで、貴い經驗を積んだ次第である。斯の如きは戦争の齎らす良効、然も意外にも、經濟方面にまで儼として存する所の見通すべからざる一つである。道德、政治、經濟の三方面は、戦争の良効を多く有すると同時に、惡果も亦伴ふ所の

方面であるが、茲に良効のみ有つて、惡果の無い方面がもう一つ残つて居る。それは第四、智能上の効果である。一つには戦争に於ける淘汰上の殘存者、即ち殘存民族、殘存國民は、必ず智能上の優尙者であるのである。二つには異なる民族の間に智能成績が調和し、進歩することである。其の最も大なる適例として、十字軍に依て亞拉比亞文明が歐羅巴各國を急速に進歩させた。三つには戦争が智能的活動を、極めて強烈に鼓舞、激勵することである。四つには戦争は如何にも智能成績の大破壊を爲すことが多いのであるが、併し破壊に次ぐ建設を以て、百工技術が戦争に依て一新せられるといふ重要な効果がある。更に五つには、美術の發生及び發達が戦争に依て大に力付けられる。人類の古代生活から美術の二つの最も大なる拍車は一つには宗教、二つには戦争であると、大雜把ながら申して宜しい程であるのである。

斯様なる次第で、有形効果に對して假りに無形効果と名づけた所の方面に於いても、戦争は惡果もあるが良効もある。以上有形無形兩方面の戦争の効果を總括して茲に斷案を下げば、戦争には良効もあれば惡果もあり、惡果もあれば良効もある。概して優生學的には、其の有形方面に於いて、其の個人方面に於いて、良効大にして、惡果小なりといふだけは安全に言へる。併し廣義の優生學方面、單に優生と優境とを含むのみならず、更に直接間接一切を含めて言へば、戦争の以上述べたる數十項目を含む所の良効、惡果は、總て優生學的價值若くは反價值を有せざるはないので、之を概括して、結局戦争は良効が惡果より大なり、若くは惡果が良効より大であると、數量的加減乗除をすることは、容易ならざるのみならず、又左程必要は無。併し數量的といふことを離れて總括すれば、少くとも次の如く斷定せねばならぬ。乃ち戦争は決して世俗の殊に感情に激し、輕卒なる獨斷を急ぐ所の人々が速斷するやうに、惡果のみあつて、良効なし、若くは假令良効あるも、之を惡果に較べれば、言ふに足らぬといふが如きものでは斷じてない。

六 戦争の進化、國防の生命

戦争は熄むか熄まぬかの問題に就ては、斷じて戦争は熄まぬと云ふべく、戦争は止めるべきか止めるべからざるかの問題に就ては、戦争は止めねばならぬと簡單

に片付けるのは斷じて當らない。是は科學的研究法、即ち甲の問題に對しては戰爭の起因を研究し、乙の問題に對しては戰爭の効果を研究せる、總括的結果成績である。

但し戰爭は社會の發達に伴れて、道德上、政治上、經濟上、次第に行はれ難くなる。先づ道德が進むと、諸々の國民の間に活動の調和が進み、死生よりも人格を重んずるから、殺すといふことの威しが稍々輕くなり、宗教も大に進めば、段々道德的内容が豊富になり、又品位も高くなる。政治が進むと利害の勘定が順當になり、儲かると思つて大戰をするやうな山が減つて行く。又特定個人の野心、例へば野心的の社會統率者といふやうな個人の心の向き加減で國民の動くことが容易で無くなり、更に列國の間の利害關係が錯雜するが爲めに、絶對の友邦も無ければ絶對の敵國も無いといふやうに進み、殊に誰れも見ざるやうに、一國民と他國民との交通親和が濃かになつて行く。又經濟が世界的となると、戰爭が世界全般に與へる直接又は間接の苦痛が廣く大きくなるから、世界の一地方に於ける戰爭が、彌々倍々世界の問題となる方に近づいて行く。

戰爭は起り難くはなるが、併し絶滅はせぬ、絶滅はせぬが進化はする。戰爭の進化は一つには戰爭の大規模化すること、二つには戰爭が合理化することである。

戰爭行爲の主體は國であり、又は國々の聯合體である。其中國は人口と領土と物資との上で益々大きくなり、一方國々の聯合も近頃益々大規模になつて來た、其の適例は世界戰亂で、近く我々が經驗して居る。次に戰爭行爲の機關は、軍隊、兵器、築城、海軍の人及び艦艇であるが、何れも年々目醒ましく大規模になつて來た。次に戰爭行爲の方式、即ち戰略及び戰術も亦之に伴れて著しく發達し、戰爭は地域が擴がり、且つ永く續く。更に戰爭の効果も亦生理上、心理上、智能上、政治上、經濟上、益々深く且つ大となりつつある。唯だ道德上の効果は昔し程でない。斯様に主體、機關、方式、効果、此の四つの方面を通じて、戰爭は益々大規模化することになりつつある。之が戰爭進化の一面である。

社會が發達すると戰爭は人道的となり、個人的慘害は段々減少する。今の世の中が宣傳の世の中である爲めに、獨逸軍隊が散々戰場で勝つて、佛蘭西の東北部を荒したといふので、「獨逸の慘烈」といふ叫聲を佛蘭西其他が頻りに出した。併し之

を學術の大きい且つ冷かなる目で見ると、戦争は餘程昔よりは人道的になる方へ進みつゝあるのである。次には又規律的になつて、社會秩序を脅すことが少くなり、三つには又特殊となつて、社會諸般の事項に影響を及ぼすことが段々少くなり、殆ど平時の状態を社會をして續け得させる方に向ひつゝある。此點で最も進んだる實例を世界に向つて示したのは、我が明治天皇の知食しじゆした日本の明治三十七八年戰役に於ける行き方乃至成績である。明治三十七年七月十一日、畏くも明治天皇は、東京帝國大學卒業式に親しく臨ませられて、東京帝國大學總長を通じて、全國の教育界學問界に向つて御汰沙書を賜はつた、其の御言葉は

軍國多事ノ際ト雖教育ノ事ハ忽セニスヘカラス其ノ局ニ當ル者其レ勵精

セヨ

と仰せられたのである。斯くの如きは實に進化せる戦争の絶大なる最高なる模範と申すべきである。西洋各國は、逆もまだ此所まで行き得ないものであるから、尙更戦争といふものに對する呪咀の聲も揚る次第である。

合理化と大規模化之が戦争進化の二大要項にして、相須ち相結んで、戦争の起因

の存する以上、戦争の絶滅といふことは決して無いが、戦争の決行は容易ならず、偕て一たび之を決行したる以上は、輕易に其の終局を見るべからずといふ成績に向つて進みつつあるのである。乃ち國防は重大なる國務として、永久に存立するのである。

列國の間に國防の均衡あるといふことは、國際平和の破れない所以であり、軍備は平和の保障である。外交と云はず、貿易と云はず、凡そ國際的な國民活動の後援は、充實せる國防が即ち是れである。個人と雖も、個人の生存の特徴は、個人意志の實現である。個人意志は動もすれば諸々の個人の間、衝突を惹起し易い、そこで個人意思の調節支配が何を措ても必要になり、國家といふ社會が發達して、此の究竟保障に任ずることとなつた。個人は中級有機體である、上級有機體たる國の意志の強大なることは固より桁が違ふ。此の強大なる意志の本體である所の國と國との間に於ける意力の衝突は、亦何等かの更に偉大なる力を以て之を調節することが運命である。併しながら何人も未だ國の上に國を設けることの設計を發明し得ぬ、是は亦到底出来ない相談で、若し國の上に國があれば、其國は矢張國で

ある。國際聯盟は實は列國協會たるに過ぎぬ。是に於いて現下の實地の問題として、國の意力を減ぼすか、又は國の意力を強くするかの問題となるの外はない。國の意力を減ぼすは是れ國を亡くすること、恰も個人の意力を減ぼすことが個人を亡くすることであると同様である。是れ固より事實不可能である。さうすると残る所の實行案は國の意力を大にするといふことに歸着する。國の意力を大にするの究竟は、國の意志貫徹の究竟的力、即ち國防の力を大にするといふことにならざるを得ぬ。

今や世界列國は可なり深く文明病の痼疾に罹り、頹唐萎靡、斯る有無混同、真假錯認の低能心理、病的心理が、所謂第一流の文明國民共の間にも行はれ始めて居る。「熊を獲ずして熊皮を典賣せざれ」不幸にしてエソツプの古を距ること二千三百年、今尙ほ此の訓言が國運の大問題に對してすら隱然として生命を有して居る。洵に悲しむべく憫むべきは現代の世界文明であると云はなければならぬ。

第五章 新聞雜誌

一 空氣

新聞雜誌は空氣である。時といふ概念の乏しい外交家は空氣を造つた上でなければ外交に従事出来ぬと云ふ、其の意味に於ける空氣を造る重要な現代社會の立て物は新聞雜誌である。されば此の空氣の中に漂ふ所の社會生活乃至個人は、新聞雜誌に影響せらるゝことの重大なるは申すまでもない。仍て優生學と社會生活の考察に於いて、就中因果關係の方面を考察するには、どうしても新聞雜誌を見遁すことは出来ない。殊に一室の中に大勢の人が群ると、其の室内の空氣が或は悪るくもなり、或は又善くもなる。乃ち新聞雜誌は、先天でもなければ、後天でもない、優生學的因果關係の篇に於いて述べる事が適當である。

更に新聞雜誌は空氣であり、又水である。空氣や水は人間には到底無くて叶は

ぬ物である。空氣が悪るいから呼吸せず居る、水が濁つたから飲まず居るといふ譯には行かぬ程、現代生活に於いては何人も新聞雜誌に觸れずには到底生活が出来ないといふ程度にまで、新聞雜誌と人間生活、社會生活との關係は、極めて絶對性を帯びた密接關係になつて居る。

新聞雜誌は文明社會に於ける、優生殊に優境上の重要極まる一つの側面機關である。

二 心理方面

偕て新聞雜誌が現代人の心理に及ぼす影響の行き方に就て、聊か説明を試みやう。

一つには刺戟性である。新聞雜誌が現代人を刺戟するの性に富んで居ることは實に意外なるものであり、隨て新聞雜誌の製造者支配者に於いても、此の刺戟性を利用して新聞雜誌の力を強める事を心掛ける。刺戟性を大にせんが爲めに、現代の新聞雜誌經營者は有ゆる手段を執る事を懈らない。第一には其の紙面の體

裁を飽くまで刺戟的にする。第二には記事の材料を飽くまで刺戟的なるものから採り、紙面を出來得る限り刺戟の種を以て埋めやうとする。第三には紙面の記事の造り方を飽くまで刺戟的にする、即ち使ふ言葉、文體等に於いて、精々針程のもので、棒程の刺戟を與へるやうに努力する。第四には成るべく新らしく、新らしくといふ事に努力する。新らしいもの程刺戟は大である。心理學の一年生も存じて居る通り、刺戟と反應との間には、ウェーベル・フェヒネル法則といふものがあつて、初めての刺戟が一番強い、二度目三度目になると段々同じ刺戟でも薄くさへ利かなくなる。故に全體新聞雜誌といふものが、現代の輕薄なる其本を釋ねれば、頽敗萎靡の一現象である所の、尖端病、新人病の尺度であるとも見て差支ない關係があるのである。

第二には新聞雜誌の宣傳性を注意せねばならぬ。何と申しても、現代の世界の一流とも云ふべき相當の人口を有つて居る國々の新聞では、日刊としても百萬の賣れ高を持たなければ一流新聞とは云へない。斯様に廣き範圍に於いて新聞の力が及びるのであるから、新聞の宣傳的効果は非常に著しい。そこで新聞經營

者に於いても亦此の大事實を抜目なく捕捉して、其の宣傳力に依て亦其の事業の力を大に扶植しやうと幾多の努力を費す、そこで新聞の宣傳性が、單に自然的の結果としてのみならず、人爲的にも幾多培養せられるのである。善いに付け惡いに付け、新聞は極めて現代の人心に對して、挑發的と云はるゝ程度にまで宣傳を猛烈に實施する。

第三は新聞雜誌の流行性、雷同性である。流行は自然の流行もあれば、人爲の流行もある。新聞雜誌に依る所の流行性は、其の大部分が人爲的流行の獎勵である。風俗、又は言語、美術の觀賞、其他社會百般の事物、その何たるを問はず、一たび新聞といふ舞臺に登ると、忽ち其等が流行の事物となつて來る。流行の事實の丸で無い社會があると假定すれば、斯様な社會に生れた者は、恰も土鼠が土の中に潜つて居り、又は深い海の底に棲息する魚類が、遂に視力を失ふやうに、何等流行に對する感受性が無くなるに相違ない。其の正反對が百萬以上の新聞に、毎朝毎夕攻付けられる社會の人々には、出て來るので、現代人は新聞雜誌の力及び影響に依て、著しく流行に對する強烈なる感受性を有つて居り、其の一面の露れが現代人の雷同性で

ある。洵に現代人は相當の智力や、相當の意志の力のある者でも、實は雷同性といふ途轍もない耻づべき病に罹つて居る事が多いのである。是は其人の人格の低劣薄弱といふよりも、所謂優境上の重要な事物の一つである所の、新聞雜誌の影響が與つて全幅の力があると云はねばならぬ。

第四は新聞雜誌の浸潤性である。浸潤の譚膚受の勲に就ては、孔子も其の勢力の大なるに手をあげられた。護良親王の御運命も、隱岐國に一ケ年足らず御醍醐天皇が長くも詫しき御播遷の御生活を遊ばされた間の、嬪藤原氏の浸潤の譚に淵源して居る。新聞雜誌は今日、朝に一度、晩に一度、年百年中七百數十回に亘つて、否でも應でも人々が手にする所である。學校の先生の修身講話は一週に一度か二度、お寺参りは精々信心家で一週に一度、之に對して新聞は斯くの如く引切りなしに人々の心、銘々の家庭を襲ひ來るものであるから、其の浸潤性は實に夥しく強く且つ激しいものと申さねばならぬ。或る一種の新聞を取り、此の新聞が或る一種の主義方針で、然も右述べたやうな刺戟的、宣傳的、流行的、而して雷同性を唆るやうなもので攻めて來る以上、忽ちにして人間の思想は其の方面に引付けられ、然もそ

れが極めて深く浸込んで洗つても煮ても焼いても落ちない程度にまで染まるのである。洵に恐るべき程驚くべき効果を人心に與ふるものは、新聞雜誌なりといはねばならぬ。

第五に、昔はよく勸善懲惡といふ事を申し、曲亭馬琴も小説の趣旨として頻りに言譯したのみならず、新聞雜誌も初期に於いては、矢張或は陰に、或は陽に、勸善懲惡を趣旨とした時代もあつた。今日は斯くの如き事を舊式古風として、殊に少壯新聞記者達は之を言ふを耻づるけれども、事實の上で新聞にも、勸善即ち推獎性、並に懲惡即ち制裁性のある事は、以上四つの大性質に照して疑ない所である。然るに新聞そのものに固有すると云ふよりも、寧ろ人間心理に固有する偏癖として、兎角推獎性は薄く、制裁性が大である。人は人の善を聞く事を樂みとするけれども、之を一だけ樂しむならば、人の惡を聞く事を十だけ喜ぶものである。是が新聞に推獎性と制裁性との兩方があつても、推獎性が甚だ微弱で、制裁性が甚だ強烈である所以である。是に於いて推獎性に於いても然うであるが、殊に制裁性に於いては、惡でもない事を惡とし、不善でもない事を不善と云ふ、即ち善惡の認識を誤る事が

あると途轍もない結果が出て来る。聖人君子が新聞に依て泣かされる事が屢々あるのは、此の新聞雜誌の認識倒錯から来る甚だ厭ふべく憂ふべき社會的弊害である。以上が新聞雜誌が空氣であり水であるに付けても、其の社會人心に對する心理的行き方の主なる五點である。

三 經營と記者

偕て現代の新聞は、大分一種の特色に向つて變遷しつゝある。編輯部よりも、營業部が大層幅を利かせる方に向ひつゝある事が一つ、隨て新聞が世の中の改良上進の機關といふ抱負よりも、新聞も亦商品だといふ考が多く、社の社中に跋扈しつゝある事が二つ、此の營業方針から、新聞としては必ずしもやらなければならぬ事ではなく、却て奇想天外なる事にまで手を擴げるに移りつゝあることが三つ、例へば富士山の絶頂まで狐と狸とがどちらが早く駆上るかといふ競走、新聞屋が米屋を兼業し、豆腐屋を兼業するといふが如きの類である。

新聞記者も、嘗ては無冠の宰相といふ抱負が、少くとも自惚的に無くては記者と

云はれぬ時代もあつたが、今日そんな考があつては新聞記者の資格が無いといふことになり、徒らに夜郎自大、粗笨なる頭腦で悲歌慷慨するといふやうな幼稚なる風は、今日の新聞記者には殆ど棄にしたくも見付らない。併し新聞記者の長所も大に進んで來たと同時に、亦新聞記者の短所も多少目に餘る事が無いでもない。新聞經營の眞の進歩の爲めには、記者の精選といふ事が是非とも大切で、是は新聞雑誌の自衛の爲めからも大切なる事である。

今日の新聞記者及び雑誌記者を見ると、ザツと左の如き類別があるやうに見受けられる。第一が専任記者で、是は各新聞各雑誌の記者として、活動に全時間を捧げて居る所の眞面目なる記者で、實に各社の中心人物である。第二はお備記者で、或は政治、或は經濟、其他何等か其人の身に着いて居る金光りを利用せんが爲めに、各社殊に雑誌社が好んで備聘する者である。第三は目付記者で、多く政治若くは實業の團體と特殊の關係のある者で、實は稍々邪魔であるけれども、其の關係に對する租税の意味で備聘する所の記者である。第四は問者記者で、殊に政治的に特異の色彩ある新聞が、問者とは知りつゝ、然も深刻に政界の裏面を探らんが爲めに、

比較的高祿を吝まずして聘用する所の一種の記者である。第五は兼任記者で、新聞社を二社以上兼務する者は餘り無いが、新聞記者で或る雑誌を兼務する事は屢々行はれる所である。第六は見習記者で、其の力量や文筆は頗る覺束ないが、折角記者志願で來た者だから、見習として使つてやらうといふので、併し其の名刺だけは立派に「何々新聞雑誌記者」と銘打つて出掛ける者である。第七は無任所記者で、實は何新聞、何雑誌記者でもないにも拘らず、何々新聞記者、何々雑誌記者と稱する事だけを當該の新聞雑誌社から認許せられて、必要に應じて何れかの社員と名乗つて訪問記者となる連中である。第八は僭稱記者で、全く何々新聞記者でも、何々雑誌記者でもない者が、其邊の所謂名士、識者、論客等の住んで居る町をうろついて、標札を見て取次を乞ひ、其の名士、識者、論客に相應しさうな、其頃流行の題目を捉へて「何々問題に就て先生の高見を伺ひたく存じます」と出掛ける、其時それに都合の好ささうな社員の肩書がある名刺を出す。倅て幸に其の所謂先生の高見が伺はれると、それを原稿とし、それが出來てから、それを買うて呉れさうな新聞社なり雑誌社なりへ持つて行つて買うて貰ふ。中には不遇な文士の成れの果て、杯で筆だ

けは割合に立つ者も無いではないが、新聞記者道も此に至つては甚だ残念な次第である。第九は婦人記者で、此中には随分玉石混淆が甚しいが、茲に特に言ふ婦人記者は、自分の婦人たる事の意識が強烈で、婦人振りを利用して、それで若干の種取りをやらうといふのである。是には流石に優しい婦人のことであるから、僭稱記者といふ程の鐵面皮の者は餘計無いにも拘らず、其の能力からすると僭稱記者以上に出る者は滅多に無い。中には新聞社、殊に木葉雜誌社杯で、同じく此の婦人意識婦人振りを利用して種を取らうとするものも無いではない。婦人種を取る爲めに奥様訪問といふ婦人記者は、洵に適材適處であるが、茲に言ふ婦人記者は多く男性の名士、識者、論客等を引ッ掛ける方へ、或は利用せられ、或は自ら突進する、是には天下の名士、識者、論客諸君も大分當てられて居る事であらうと思ふ。

四 改良方策

新聞雜誌の改良發達には、新聞の下落を防ぐ事が大切である。何分百萬の發行高がなければ一人前の新聞にはなれない世の中であり、近頃は雜誌も亦殆ど其の

程度に發達して居る時代であるから、貧すれば鈍するで、新聞の合併が必要である。地方新聞では、ちよいと何か政治俱樂部でもあれば、直ぐとそれを後楯とし、若くは其の俱樂部の有力者が黨勢擴張の爲めといふ機關新聞、若くは准機關新聞を出す、雜誌は尙更の事である。碌な準備が無くて創刊すると、直きに三號雜誌の運命になる。若しそれを免るれば、婦人の節操を切賣りして生活を計ると同様、洵に氣の毒なるボロを出し、無理算段が暗黒裡に行はれて、銀行の破綻と同様に、こんな雜誌社若くは新聞社の没落が、晚い程讀者及び社會が迷惑するのである。雜誌發刊の許可の餘り輕易な事は、我國の雜誌事業を保護し發達せしむる所以でない。所で新聞雜誌事業が緊縮せられ、隨つて謹直な立派なる人士でなければ社員に聘用せられぬやうになれば、一番結構である。乃ち記者改良策として、歐米各國を汎く觀察し、其他の考案をも加へて、茲に二三の事を紹介すると、

一つは新聞學校である。佛蘭西の社會高等研究學校の新聞科、瑞西のローザンヌ大學の新聞科、倫敦の新聞記者養成學校、米國の若干高等の學校に於ける新聞科杯が其例である。

二つには新聞記者協會の設立である。從來新聞記者協會は主として新聞記者の互助を目的とし、時としては新聞經營者も之に出資し、新聞記者の經濟的獨立を助け成し、兼ねて親睦を計り、連絡を密にする事が主なる目的であつた。併し進んでは追々精神的の切磋砥礪を旨とし、新聞記者界から粗惡なる分子を淘汰して以て新聞記者といふ者を全體として品位向上するやうにと期する方に向ひつゝある。匈牙利のブタベスト新聞雜誌記者協會、西班牙マドリッドの西班牙記者協會、巴里の三個の新聞雜誌記者協會、其の一つは巴里記者組合、二つは共和國記者組合、三つは共和國地方新聞記者組合、英國の新聞記者組合杯が其例であるが、却て匈牙利邊りのものが進む方へ向ふ事に於いて先鞭を着けやうとして居るやうである。三つには新聞記者會議所である。是は講者が特に我國の實際に取敢へず實行を——實は二十年來、勸めつゝある所の新機關である、是は春秋會を擴張しても至極行はれ易い事と思はれる。何も同業者を此の機關を以て褒貶黜陟するといふ、突飛的行動をするには及ばず、唯だ此の記者會議所の詮衡、濟みの記者と然らざる者との區別が付けばそれでよい。春秋會ならば春秋會の嚴密なる詮衡で入會を

許した者と許さない者、若くは入會を求め來らない者との區別が付いて居ればそれでよいのである。而して其の善い方の記者達は一定の徽章なり、若くは名刺に一定の肩書を付けて居れば、世間は勿論、殊には之に應接すべき事情に居る所の被訪問者、例へば例の名士、識者といふ連中は、其人が何新聞何雜誌に屬するかを問はず、其の會議所員であるといふ點で、初對面から既に其の品格、殊には德操、又は理解力、續いて筆力等に充分の信用を置いて掛る事が出来るから、何等紹介状杯いふ効力が薄くて、然も繁雜なる手續を要する廻り、遠いものを要するまでもなく、極めて敏速に新聞雜誌事業の發達を實現する事が出来るのである。斯様になると劣等を記者も自ら其の活動の範圍が制限されて來るから、段々社會に影を潜め、終には跡を絶つに至るべく、丁度辯護士法が出来て、三百代言が所謂もぐり屋となつてしまふと同様の運命となるべき譯合である。新聞記者は辯護士のやうに、國家が之を試験しても宜しいが、併し記者は様々の長所を有せねばならぬもので、一場の試験で之を淘汰する事は、辯護士よりも遙に困難なる性質の者であるから、成らう事ならば此の記者會議所、又は春秋會といふが如き機關で、詮衡、簡選、淘汰を成し、遂げて

昭和七年一月二十日印刷
昭和七年一月二十五日發行

優生學と社會生活
定價二圓五十錢

版權所有



著作者

建部 遜吾

發行者

長坂 金雄

印刷者

吉原 良三

印刷所

株式會社 雄山閣印刷所
東京市牛込區早稻田町一〇七

發行所

東京市麴町區飯田町六ノ二三
振替口座東京一六八五番

雄山閣

61
412

終